兵庫県文化財調査報告書 第38冊

中井古墳群・中井鴨池窯跡

—山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅴ—

1987. 2

兵庫県教育委員会

兵庫県文化財調査報告　第38冊

中井古墳群・中井鴨池窯跡

—山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅴ—

1987.2

兵庫県教育委員会

中井古墳群出土大刀

三累環頭把頭

例　　言

1．本書は、龍野市龍野町中井字向山に所在する中井古墳群ならびに龍野市龍野町中井字槻坂に所在する中井鴨池窯跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査および整理作業は、日本道路公団大阪建設局の委託を受けて兵庫県教育委員会が実施した。発掘調査は、昭和58年５月25日～９月４日の79日間を確認調査ならびに中井古墳群と中井鴨池窯跡の灰原の全面調査を行った。翌昭和59年10月25日～10月28日の４日間を県道法面部分の中井鴨池窯跡の灰原の全面調査に費やした。

3．発掘調査は、兵庫県教育委員会が調査主体となり、社会教育・文化財課主任井守徳男、同技術職員岡田章一・渡辺　昇が担当した。

4．本書で示す標高値は、日本道路公団設定のＢ．Ｍ．を使用した値で、方位は磁北である。

5．遺構写真は、調査員が撮影した。空中写真は、国際航業株式会社に委託したものである。また、図版１の空中写真は国土地理院撮影のものである。

6．遺物写真は、森　昭氏に依頼し、撮影して戴いた。

7．整理作業は、昭和59年度は山陽自動車道発掘調査事務所で、昭和60・61年度は兵庫県埋蔵文化財調査事務所で実施した。

8．執筆は、本文目次に記した通りである。

9．本報告にかかる出土遺物およびスライドなどの資料は、現在兵庫県埋蔵文化財調査事務所（神戸市兵庫区荒田町２丁目１－５）ならびに兵庫県教育委員会魚住分館（明石市魚住町清水立合池の下650-1）で保管している。活用されたい。

本　文　目　次

例言

第1章　は　じ　め　に …… 渡辺 …… 1

第1節　調査に至る経緯

第2節　調査の組織

第3節　調査日誌抄

第2章　位　置　と　環　境 …… 渡辺 …… 11

第3章　1号墳の調査

第1節　立　地 …… 井守 …… 15

第2節　墳　丘 …… 井守 …… 17

第3節　内部構造 …… 井守 …… 17

第4第　遺物の出土状況 …… 井守 …… 24

第5節　出土遺物

1，須恵器 …… 井守 …… 24

2，鉄　器 …… 石本 …… 28

第6節　小　結 …… 井守 …… 31

付　載 …… 加古 …… 37

第4章　2号墳の調査

第1節　立　地 …… 渡辺 …… 39

第2節　墳　丘 …… 渡辺 …… 40

第3節　内部構造 …… 渡辺 …… 45

第4節　遺物の出土状況 …… 渡辺 …… 47

第5節　出土遺物

1，須恵器 …… 井守 …… 48

2，その他の土器 …… 井守 …… 52

3，鉄器・耳環 …… 石本 …… 52

第6節　小　結 …… 渡辺 …… 57

第5章　中井鴨池窯跡の調査

第1節　立　地 …… 井守 …… 65

第2節　灰　原 …… 井守 …… 65

第3節　井戸状遺構 …… 井守 …… 67

第4節　出土遺物 …… 高島 …… 68

第5節　小　結 …… 高島 …… 77

第6章　お　わ　り　に …… 渡辺 …… 83

図　版　目　次

巻頭　中井古墳群出土大刀、三累環頭把頭

図版１　中井古墳群・中井鴨池窯跡周辺

図版２　中井古墳群　１．中井古墳群・中井鴨池窯跡遠景
　　２．中井古墳群調査前全景

図版３　中井古墳群　１．中井古墳群空中写真（北東より）
　　２．中井古墳群空中写真（北西より）

図版４　中井１号墳　１．調査前
　　２．南側壁裏面状況

図版５　中井１号墳　１．北側墳丘断面
　　２．奥壁側墳丘断面

図版６　中井１号墳　１．奥壁
　　２．羨道

図版７　中井１号墳　１．羨門
　　２．第２次床面

図版８　中井１号墳　１．排水溝
　　２．第１次床面遺物出土状況

図版９　中井２号墳　１．調査前
　　２．全景

図版10　中井２号墳　１．石室全景
　　２．第１次床面

図版11　中井２号墳　１．排水溝
　　２．南側壁裏面状況

図版12　中井２号墳　１．墳丘断面
　　２．墳丘断面（奥壁側）

図版13　中井２号墳　１．奥壁
　　２．奥壁裏面状況

図版14　中井２号墳　１．石室全景（墳丘除去後）
　　２．石室全景（天井石除去後）

図版15　中井２号墳　１．基底石（羨門側より）
　　２．基底石（奥壁側より）

図版16　中井２号墳　１．第１次床面遺物出土状況
　　２．第１次床面遺物出土状況

図版17　中井２号墳　1.　排水溝内遺物出土状況
2.　排水溝内遺物出土状況
図版18　中井１号墳　須恵器
図版19　中井１号墳　須恵器
図版20　中井１号墳　三累環頭把頭・鉄器
図版21　中井１号墳　Ｘ線撮影・鉄器
図版22　中井２号墳　須恵器
図版23　中井２号墳　須恵器
図版24　中井２号墳　鉄器
図版25　中井２号墳　鉄器
図版26　中井２号墳　鉄器
図版27　中井２号墳　鉄器・Ｘ線撮影
図版28　中井鴨池窯跡　1.　調査前全景（南より）
2.　調査前全景（西より）
図版29　中井鴨池窯跡　1.　灰原断面
2.　灰原
図版30　中井鴨池窯跡　1.　井戸状遺構・溝
2.　井戸状遺構
図版31　中井鴨池窯跡　須恵器
図版32　中井鴨池窯跡　須恵器
図版33　中井鴨池窯跡　須恵器

挿　図　目　次

第１図　律令期山陽道確認トレンチ
第２図　調査風景
第３図　調査風景
第４図　調査風景
第５図　調査風景
第６図　調査風景
第７図　トレンチ配置図
第８図　周辺の遺跡分布図
第９図　養久山２号墓

第10図　養久山１号墳
第11図　中垣内１号墳
第12図　中井廃寺石製露盤
第13図　中井１号墳墳丘測量図
第14図　中井１号墳土層断面図
第15図　中井１号墳石室上面図
第16図　中井１号墳石室実測図
第17図　中井１号墳第２次床面実測図
第18図　中井１号墳須恵器実測図（１）
第19図　中井１号墳須恵器実測図（２）
第20図　中井１号墳鉄器実測図（１）
第21図　中井１号墳三累環頭・鞘尻実測図
第22図　中井１号墳鉄器実測図（２）
第23図　兵庫県下出土の環頭大刀分布図
第24図　三累環頭大刀青銅刀装具の蛍光Ｘ線測定チャート
第25図　中井２号墳墳丘測量図（調査前）
第26図　中井２号墳墳丘測量図（調査後）
第27図　中井２号墳土層断面図
第28図　中井２号墳石室上面図
第29図　中井２号墳石室実測図
第30図　中井２号墳第１次床面実測図
第31図　中井２号墳第１次床面遺物出土状態
第32図　中井２号墳須恵器実測図（１）
第33図　中井２号墳須恵器実測図（２）
第34図　中井２号墳その他の土器実測図
第35図　中井２号墳鉄器実測図（１）
第36図　中井２号墳鉄器実測図（２）
第37図　中井２号墳鉄器実測図（３）
第38図　中井２号墳の石材種と構築順序
第39図　頭椎大刀蛍光Ｘ線測定チャート
第40図　兵庫県下出土の頭椎大刀分布図
第41図　中井鴨池窯跡調査区・遺構配置図
第42図　中井鴨池窯跡中央畦畔断面図
第43図　中井鴨池窯跡井戸状遺構実測図

第44図　中井鴨池窯跡遺物実測図（１）
第45図　中井鴨池窯跡遺物実測図（２）
第46図　中井鴨池窯跡遺物実測図（３）
第47図　中井鴨池窯跡遺物実測図（４）
第48図　中井鴨池窯跡遺物実測図（５）
第49図　中井鴨池窯跡遺物実測図（６）
第50図　中井鴨池窯跡遺物実測図（７）
第51図　中井鴨池窯跡甕胴部叩き目拓影
第52図　兵庫県下の古墳時代窯跡分布図

表　目　次

第１表　兵庫県下出土の環頭大刀地名表
第２表　１号墳出土須恵器計測表
第３表　蛍光Ｘ線分析による組成成分
第４表　兵庫県下出土の頭椎大刀地名表
第５表　２号墳出土須恵器計測表
第６表　兵庫県下の古墳時代窯跡地名表

第１章　はじめに

第１節．調査に至る経緯

山陽自動車道は、吹田市を起点とし神戸市北区まで中国縦貫自動車道と路面を共有し、三木市・加古川市・姫路市と徐々に南に下がりながら播磨を西進し、中国地方の南部を縦断し山口市に至る総延長430kmの高速自動車道路である。現在、兵庫県下では龍野西～備前インターチェンジ間25.3kmが、昭和57年３月に供用を開始している。

昭和48年に基本計画が発表されてから、日本道路公団大阪建設局と兵庫県教育委員会の間で協議が重ねられており、分布調査も広域・詳細分布調査を数回実施している。確認調査は、昭和53年度から行われ、翌年に赤穂市堂山遺跡・相生市緑ケ丘窯址群の全面調査を皮切りに昭和61年度まで、龍野市を中心として調査が実施されている。当初20数地点が挙げられていたが、確認調査で終了したものや遺跡が路線外に存在するものを除いて、姫路東インターチェンジ以西の15地点で全面調査が実施されている。

中井古墳群は、昭和48年度当初の協議から明確な墳丘を有することから俎上に乗り、昭和52年度には兵庫県教育委員会から保存を講ずるように要望していた。その後、昭和57年度に再び協議題に上がり、調査方法などの検討が再開された。２基の古墳の保存を前提とした協議を行ったが路線変更は用地買収の問題などから不可能で、工法変更について協議を行った。その結果、１号墳は可能だが、２号墳は路線幅の中央に位置する上に盛土が20ｍ近く積まれることからカルバートボックス様の構造物を建築すれば理論上可能だが、建築上の問題として主に工費の面から変更は不可能となった。そのため、高い盛土下に最低限の保存は図れるものの恒久的に盛土下に位置するため徹底的な調査を行う方針をとった。１号墳は側面の工法を変更し、墳丘を損なわない設計が行われたので、石室の調査と墳丘にトレンチを入れる調査にとどめることにした。

昭和57年度に現地で打ち合わせを行ったところ、古墳は山麓の地形変換線下の広い平担地（麓削面）に立地しており、弥生時代の集落跡など他の遺構の存在する可能性も考えられたので確認調査を実施することとなった。また、本線内東方部分は律令期山陽道が通過している部分に相当するため、確認調査を実施することになった。さらに、鴨池北岸一帯で須恵器が採集され、窯跡の存在が確実視されていた地域があるが、ここを山陽自動車道建設に伴い県道姫路上郡線の付替道路が通るため合わせて調査を行うこととした。昭和57年度は、工期の迫っている揖保川以西の龍野西工区の調査を優先して行うため、中井古墳群の調査は昭和58年度に実施することになった。

昭和58年度も引続き兵庫県教育委員会は調査を実施したが、近畿自動車道舞鶴線建設に

伴う調査が増加したため、1パーティの投入となった。4月18日養久山43号墳の発掘調査から着手し、調査終了後、5月25日から中井古墳群の調査を開始し、10月4日まで延79日、延1048人の方々の協力を得て無事調査を終了した。

調査は、伐採作業から手掛け、地形測量を行ったのち、麓屑面にトレンチを設定し確認調査を行った。1・2号墳間に直線上に2×5mのトレンチを4本5m間隔で設定した。4本のトレンチいずれも遺構はもちろんのこと包含層も検出できなかった。

梅雨も開け、夏になり鴨池の水位が下がり池畔を歩くと広範囲に土器が採集されるため、県道法面以外に北岸全域の確認調査の必要性を感じた。1号墳の調査が終わりに近づいた7月27日から鴨池北岸の伐採を開始し、県道法面を清掃したところ灰原を検出した。その前面にトレンチを入れ、窯壁・灰・焼土を認めたので約140㎡について全面調査を行うこととした。東側へも幅1mで総延長140mについて確認し、県道・市道法面についても確認を行ったが遺構は認められず、当初検出した1ケ所のみが残存しているものと考えられる。

中井鴨池窯跡の調査がほぼ終えた段階で、引続き律令期山陽道の確認調査のためトレンチ2ケ所を設けて調査したが、湿地で不安定な層と地山がすぐ現れる部分とがあり、谷が今よりやや狭いことが判明し、江戸期以降の開田により現地形になったものと思われる。道の遺構は確認されず、土器も須恵器～備前焼と時代幅のある遺物が少量出土したにすぎなかった。ただ、断面で江戸時代以降の水田を確認し、大畦畔1カ所、小畦畔3カ所を検出している。

現在使用されている県道姫路上郡線の法面に灰層を確認しているが、路肩に影響を及ぼすため、県道付替時に調査を行うことになった。そのため、翌年度に調査を実施することにし、昭和58年度の調査を終了した。

翌昭和59年度になって調査時期・方法などの協議を行った結果、7月から1パーティが山陽自動車道の調査に入ることになり、揖保川町半田山墳墓群の調査を行い、県道付替工事に合わせて半田山墳墓群の調査を中断し、法面の灰層の調査を実施することにした。11月19日から4日間調査を行った。路肩法面に一部灰層が残存しているだけで、窯体は全く残っておらず、現県道の工事の際に破壊されたものと考えられた。

昭和59年度から整理作業を実施した。昭和59年度は58年度調査分の水洗・ネーミング・接合復原作業を山陽自動車道現場事務所で実施した。翌60年度からは兵庫県埋蔵文化財調査事務所で整理作業を行った。60年度は59年度調査分の水洗・ネーミング・接合作業と2年分の実測・写真撮影を実施し、61年度はトレース・レイアウト作業を終え、報告書印刷を実施した。

第２節．調査の組織

発掘・整理調査ともに、日本道路公団大阪建設局の委託を受けて、兵庫県教育委員会が調査主体となり調査を実施した。

（１）昭和58年度発掘調査の体制

調査事務　社会教育・文化財課

課　長	西沢良之
文化財担当参事	大西章夫
副課長	森崎理一
課長補佐	池田義雄
管理係長	福永慶造
埋蔵文化財調査係長	櫃本誠一
主　任	八家　均
技術職員	大平　茂
事務職員	杉本恵子

調査担当　社会教育・文化財課

主　任	井守徳男
技術職員	渡辺　昇

調査補助員

井上洋一（早稲田大学文学部）

小林正人（島根大学法文学部）

調査参加者

三尾年一・三尾清一・寺井喜八・山口　勇・三尾亮太

山口としゑ・木津弘子・寺井すえの・村田博子・三尾みつゑ

前川美喜恵・赤松千恵子・出田敬子・横田久美・井上和代

（２）昭和59年度発掘調査・整理作業の体制

調査事務　社会教育・文化財課

課　長	西沢良之
文化財担当参事	大西章夫
副課長	森崎理一
課長補佐	和田富夫
管理係長	小西　清

埋蔵文化財

調査係長　櫃本誠一

主査　坂本豊明

技術職員　大平茂

事務職員　杉本恵子

調査担当　社会教育・文化財課

技術職員　岡田章一

〃　渡辺昇

発掘調査参加者

吉本三四二・藤田鈴枝・土井栄子・栗田律子・房安まみ

整理作業担当

技術職員　渡辺昇

整理作業参加者

赤松千恵子・出田敬子・横田久美・西上知予子・金治美香

（3）昭和60年度整理作業の体制

調査事務　社会教育・文化財課

課長　北村幸久

文化財担当参事　森崎理一

副課長　黒田賢一郎

課長補佐　和田富夫

管理係長　小西清

埋蔵文化財

調査係長　櫃本誠一

主査　坂本豊明

事務職員　松本豊彦

技術職員　森内秀造

〃　加古千恵子

調査担当　社会教育・文化財課

主査　井守徳男

技術職員　渡辺昇

整理補助員

高島知恵子・石本淳子・小川真理子・和田寿佐子

河野里美・下釜豊美・中北敦子・苔口治子

（4）昭和61年度整理作業の体制

調査事務　社会教育・文化財課

課　長	北村幸久
文化財担当参事	森崎理一
副課長	黒田賢一部
課長補佐	福田至宏
管理係長	小西清
課長補佐兼	
埋蔵文化財係長	大村敬通
主　査	小川良太
主　任	加古千恵子
事務職員	松本豊彦
〃	足立彰久
技術職員	渡辺昇

調査担当　社会教育・文化財課

主　査	井守徳男
技術職員	渡辺昇

整理補助員

高島知恵子・石本淳子・井川佳子・下釜豊美

松本　睦・茨木有美

第3節．調査日誌抄

昭和58年5月25日（水）～27日（金）

伐採及び伐採木かたづけ。周辺環境整備。プレハブ建設。絶対高移動し、レベルポイント設定する。

5月30日（月）～6月3日（金）

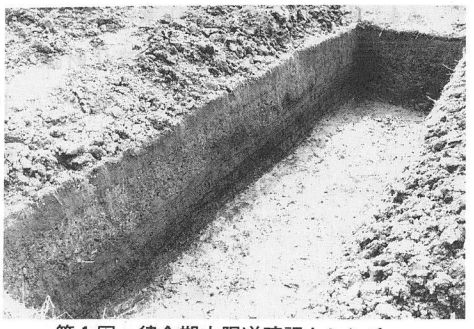
伐採終了後、調査前の写真撮影を行う。1号墳地形測量終了し、2号墳測量開始する。2号墳の石材落石除去するため、削岩機・石ノミで割って持ち運ぶ。1・2号墳間にトレンチ設定し調査するが、遺構認められず。

6月6日（月）～10日（金）

1・2号墳間トレンチ写真撮影し、土層断面図作成。2号墳地形測量終了。1号墳調査開始。墳丘内・墳丘裾堆積土から弥生土器片出土。

6月13日（月）～17日（金）

1号墳に3本トレンチ設定し、墳丘築成などの観察を行う。各トレンチ土層断面図作成。石室内畦畔を残して掘り下げ開始するが、3～6㎝で敷石検出したので、敷石面で清掃するため畦畔除去する。羨門付近後世の盛土があり、除去すると攪乱を受けており床面残存していない。鹵出土。2号墳石室内の石材落石を除去したのち、堆積土を除いていく。平瓦・土鍋出土。



第1図　律令期山陽道確認トレンチ

6月20日（月）～24日（金）

前半は梅雨のため作業中止。1号墳はほとんど作業行えず。2号墳は明治時代と第二次世界大戦前後の開墾によって盛られた墳丘西半の礫層を除去する。

6月27日（月）～7月1日（金）

1号墳は用地内に限り羨門前方を掘り下げる。羨門完掘し、墓壙掘り方ならびに墓道確認する。長頸瓶・横瓶出土。床面2面あることを確認。上層（第2次）床面清掃後写真撮影。2号墳墳丘堆積土除去作業継続する。7月1日日本道路公団と兵庫県教育委員会で打合せ、協議を行い、1号墳は現状保存のための工法変更を設計する。中井鴨池窯跡は県道付替工事に関連するため調査時期など早急に検討する。

7月4日（月）～8日（金）

1号墳石室割り付けし、平面図実測。2号墳石室内攪乱土除去。奥壁中央など数ケ所に攪乱壙がある。石室は敷石が施されているが、遺存状態は悪く出土遺物も原位置を保っていないものと思われる。馬具・鉄鏃・耳環出土。墳丘表土除去し、墳裾追求する。

第2図　調査風景

7月11日（月）～15日（金）

1号墳第2次床面エレベーション入れたのち掘り下げ、第1次床面を検出する。羨道部は、第2次床面の際に整理されており遺物も小片となっている。奥壁近くで三累環頭大刀・大刀・須恵器出土。出土状況図作成し取り上げ。2号墳全景写真撮影。第2次床面割り付け。

7月18日（月）～22日（金）

1号墳写真撮影。鞘尻金具出土。石室割り

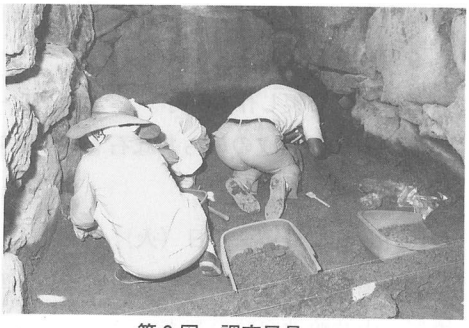
付け始める。2号墳石室平面実測。

7月25日（月）～29日（金）

1号墳石室割り付け後、実測開始。2号墳平面図作成。排水溝を有している。中井鴨池窯跡伐採開始。

8月1日（月）～5日（金）

1・2号墳とも実測継続。鴨池窯跡伐採木かたづけ、トレンチ調査始める。窯体・灰原は確認できないが、古墳時代に限られる須恵器出土。焼けひずみや窯壁も出土することから近くに窯が存在したことは間違いない。



第3図　調査風景

8月8日（月）～12日（金）

1号墳実測継続。2号墳第1次床面の検出作業行う。調査後の墳丘測量行う。鴨池窯跡県道法面ならびに鴨池北岸東半伐採する。

8月18日（木）～19日（金）

2号墳第1次床面清掃。鴨池窯跡鴨池北岸東半にもトレンチ設定する。

8月22日（月）～26日（金）

1号墳実測終了後、割り付け線消す。2号墳第1次床面写真撮影・実測・遺物とり上げ石室内から外へのびる排水溝も全掘し写真撮影。溝内から刀・壺・瑕出土。畦畔を3本残し墳丘除去作業。鴨池窯跡鴨池北岸東半トレンチ遺物もほとんど出土せず、東には窯は築かれていない。県道法面で窯体（灰原）検出。北岸西端灰層が認められたので、全面調査に変える。

8月29日（月）～9月2日（金）

墳丘畦畔ならびに石室清掃し写真撮影・実測。鴨池窯跡畦畔を残し掘り下げ開始。

9月5日（月）～9日（金）

2号墳石室露出状態の写真撮影。石室割り付け後、平面図から実測開始。鴨池窯跡灰層確認。須恵器も出土し始め、溝・井戸確認。

9月12日（月）～14日（水）

1号墳真砂によって埋め戻し。石室内充填し、石室覆う程度まで埋め戻し。2号墳実測鴨池窯跡遺構割り付け後実測。律令期山陽道

第4図　調査風景

確認のためのトレンチ入れるが遺構存在しない。

9月19日（月）～22日（木）

1号墳埋め戻し作業終了。2号墳クレーン車により天井石除去。最も重い石は4t。写真撮影・断面図作成ののち基底石を残して石室解体する。鴨池窯跡実測終了し、平板測量を行い路線外へ杭を打つ。

10月3日（月）～4日（火）

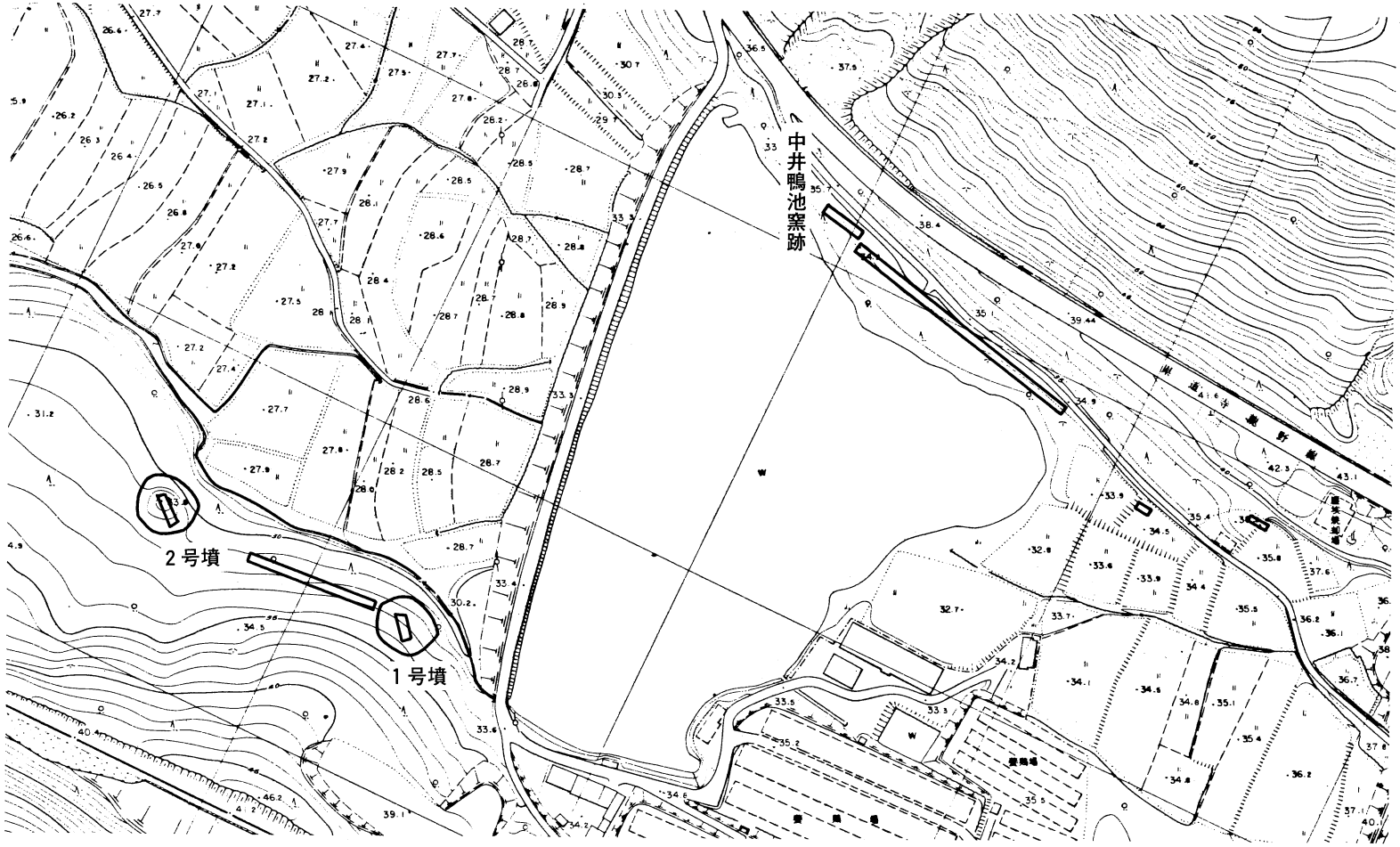
2号墳墓壙掘り下げ。平面図追加し、写真撮影を行う。発掘道具・器材撤収し、中井古墳群・中井鴨池窯跡の調査終了する。

昭和59年11月19日（月）～11月22日（木）

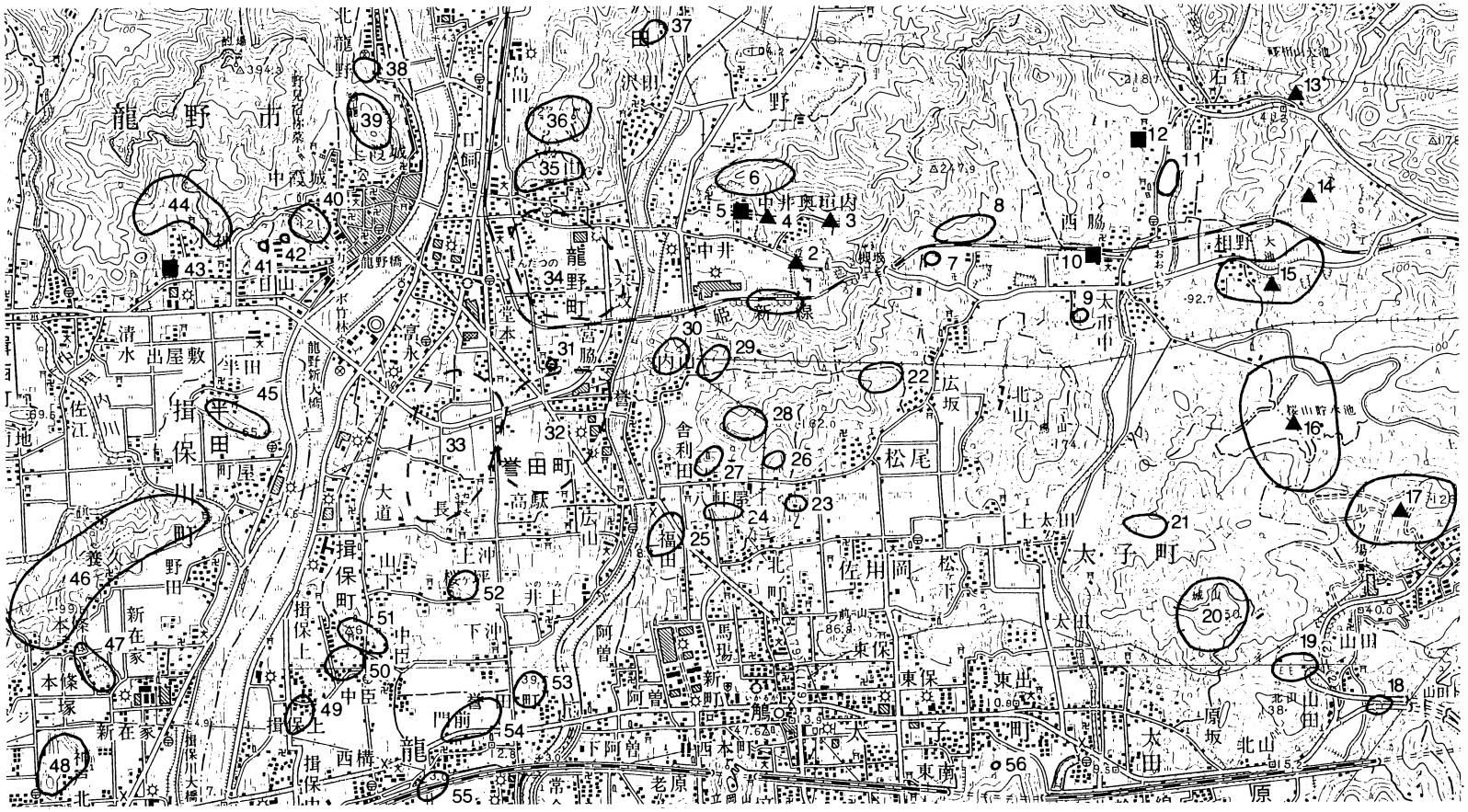
県道姫路上郡線付替に伴い現県道法面の窯体（灰原）の調査を行う。当初、窯体と考えていたが、調査の結果焼けた面がなく、灰原であることを確認する。畦畔の写真撮影・実測の後、調査（残存）部分の灰原の全景写真撮影。調査地区の平板測量を行う。窯体は現県道掘削時に破壊されたものと思われ、残存していない。

第5図　調査風景

第6図　調査風景



第7図　トレンチ配置図



第8図　周辺の遺跡分布図

1．中井古墳群　2．中井鴨池窯跡　3．中井奥池窯跡　4．中井瓦窯跡　5．中井廃寺　6．中井向山遺跡　7．鷹ノ子池遺跡　8．西脇古墳群　9．向山遺跡　10．西脇廃寺　11．中後瀬遺跡　12．観音堂遺跡　13．赤坂窯跡　14．四十町窯跡
15．太市窯跡群　16．桜峠窯跡群　17．青山窯跡群　18．山田遺跡　19．山田古墳群　20．城山城跡　21．上太田古墳群　22．広坂墳墓群　23．坊主山遺跡　24．福田天神遺跡　25．福田片岡遺跡　26．笹山遺跡　27．明神山墳墓群　28．笹山墳墓群
29．内山古墳群　30．内山墳墓群　31．山吹山経塚　32．宮脇遺跡　33．堂本遺跡　34．片山・末政遺跡　35．片山古墳群　36．片山東山遺跡　37．沢田宮谷遺跡　38．北龍野遺跡　39．龍野城跡　40．白鷺山墳墓群　41．西宮山古墳　42．狐塚古墳
43．小神古墳群　45．半田山墳墓群　46．養久山墳墓群　47．赤山墳墓群　48．神戸北山墳墓群　49．揖保上遺跡　50．中臣遺跡　51．中臣山古墳群　52．桜ケ坪遺跡　53．片吹遺跡　54．宝林寺北遺跡　55．門前遺跡　56．揖特山古墳

第２章　位置と環境

中井古墳群は、龍野市龍野町中井字向山に所在し、龍野市と太子町・姫路市との境界となる向山山塊の北側に形成された麓屑面と呼ばれる平坦面上という特殊な立地を示している。

中井鴨池窯跡は、龍野市龍野町中井字鴨池に所在し、姫路上郡断層によって生じた谷の北斜面に位置する。200m余りで谷奥部となる。和名抄の郷名は小宅郷に属し、それから類推して『播磨国風土記』の記載にある小宅里に相当するものと思われる。

中井周辺の遺跡の分布密度は高く、多くの遺跡が知られている。最も古い時代の遺跡は北方約４kmの龍野市神岡町大住寺皿池遺跡からナイフ形石器が出土している。大住寺皿池遺跡のさらに谷奥の大住寺奥池遺跡からも縄文早・前期の石鏃などが採取されており、旧石器まで溯る遺物の存在の可能性もある。南約0.8kmの太子町坊主山遺跡でもナイフ形石器と有舌尖頭器と時期幅のある遺物が出土している。向山を隔てた姫路市、向山遺跡でもナイフ形石器が確認されている。濃密な分布は示さず、各地で旧石器時代の分布状況に特徴は見られない。

縄文時代になっても遺跡数の増加はほとんどない。しかし、太子町常全遺跡・新宮宮内遺跡の土器が図上ででも完形になるもので、資料が乏しかったが徐々に増えつつある。姫路市丁・柳ヶ瀬遺跡では遺構は検出されなかったが、中期～晩期の遺物が多量に出土しており、編年などの作業での基礎資料となるものである。

弥生時代になると遺跡は増加するが、前期段階では縄文時代と余り変化はない。丁・柳ヶ瀬遺跡・常全遺跡・龍野市門前遺跡のように縄文晩期後葉の遺物を出土している遺跡は、引続き存続し弥生時代の遺物を出土している。揖保川右岸の丘陵上で前期の墓が調査されている。揖保川町袋尻浅谷遺跡と半田山遺跡である。前者は土器棺を後者は土器棺・土壙墓が検出されている。中期になると、遺跡数は確実に増えていく。龍野市内では、揖西町尾崎・佐江遺跡の平地の遺跡と養久乙城山・龍子向イ山・長尾タイ山の丘陵上の遺跡で生活を始めるが、中期でも後半の段階で終息している。また、平地の２遺跡で製塩土器が出土していることも特徴の一つである。揖保川以東の遺跡でも揖保川以西と同じく中期後半の単純遺跡が存在する。平地の福田天神・横内、丘陵上の中臣・内山・片山東山の各遺跡

第９図　養久山２号墓

第10図　養久山１号墳

で、横内遺跡は前期からのムラである。内山遺跡は中井の向山山塊の西端に位置する遺跡で、その南方の平野部に林田川左岸に立地する福田片岡遺跡では、中期後半から古墳時代初頭にかけて集落が存続している。後期になると、福田片岡遺跡や揖保川町養久谷遺跡は持続して生活しているが、他のほとんどの遺跡は断絶している。それらに代わって集落が営まれるのが、揖西地域では平野の清水遺跡、丘陵上の日山遺跡で揖東地域では、前期の遺跡である門前遺跡が生活を再開している。片吹遺跡でも後期後半から生活を再開している。中井の現集落の裏山や中井古墳群周辺からも弥生土器片が出土しているが小片のため時期は決められないが、周辺でも生活が営まれていたことが明らかである。弥生時代を通しての遺跡は、揖保川町養久谷遺跡唯一であるが、神岡町横内遺跡も母集落と思われ、今後の調査で全期間を通してのムラとなるかもしれない。

弥生時代末になると、揖保川流域の歴史上で最も特徴的な墳丘墓が現れる。著名な養久山をはじめ、半田山・池の沢・西宮山(日山)・白鷺山・新宮東山・宝記山・内山・笹山・明神山などの墳墓群である。揖保川流域の龍野市から河口部まで構築されている。中井古墳群西方の姫新線建設の際、石材と人骨が出土している。遺物は確認されておらず、事後の調査も行われていないが、この時期の墳墓の可能性もある。石材は箱式石棺で、１～２枚の蓋石ではなく、それ以上あったそうである。将来確定することは不可能であるが、漸定的に中井３号墳と呼称し、幅を持たせておきたいが、墳丘墓の可能性が高いものと思われる。南西約 800 m に内山墳丘墓群が位置している。

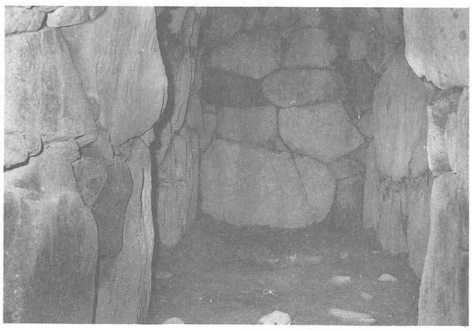
古墳時代前期の古墳は揖保川流域では新宮町吉島古墳、龍野市・揖保川町の境界に位置する龍子三ツ塚１・２号墳、養久山１号墳が築かれる。龍子三ツ塚２号墳を除いて、主体部は竪穴式石室である。ただ、畿内の通有の竪穴式石室とは用石法が異なり、木口積みではない。最近、揖保川上流の播磨国一宮である伊和中山１号墳も前期末の前方後円墳で竪穴式石室を内部主体とする。前期の古墳は吉島古墳より下流に存在していると考えられていたので、揖保川流域の歴史を考える上で大きな変化を与えた古墳である。揖保郡内では、流域は異なるが丁・瓢塚古墳も同時期の古墳である。揖保川河口付近に築かれた興塚古墳もやや遅れた時期に構築された盛期の古墳で、対岸の綾部山古墳とともに海岸部に営まれた古墳である。下流域の丘陵には、金剛山・権現山・岩見北山など前期の古墳が確認されている。権現山51・52号墳、壇特山１号墳は前方後方墳で特殊な墳形をしている。

中期の古墳は減少し、片島古墳群・長尾タイ山４・10号墳・宿禰塚・鳥坂３号墳など僅

かに見られるだけで、資料は乏しい。揖保川以西に今のところ限られており、揖保川以東には存在せず市川流域まで確認されていない。6世紀代になってもその傾向は変わらず古墳数は少ない。養久山41・43号墳・長尾タイ山古墳群や揖西町中垣内の天神山古墳・揖保川町笹田古墳は、この時期の古墳で横穴式石室導入前の古墳である。横穴式石室を最初に採用したのは、最後に築造された前方後円墳である西宮山古墳である。全長34.6mで2列の埴輪列を有しており、後円部中央に南に開口する石室が存在している。幅3.4m、長さ3.8mの正方形に近い玄室の左片袖式の石室で、壁体構造から穹窿式の石室と考えられる。排水溝が施されており、玄門部と羨道中央に境界石が置かれている。出土遺物は、装飾付台付壺・器台・壺などの多数の須恵器と垂飾付耳飾り・銀製丸玉・銅製三輪玉・琥珀製棗玉などの玉類の装飾品、杏葉・雲珠などの馬具類、獣形鏡と豊富である。西宮山古墳と同時期の初期横穴式石室の古墳は、墳形が同じ前方後円墳である御津町小丸山古墳のほかに長尾タイ山1号墳、姫路市丁山頂古墳、新宮町馬立古墳群中の姥塚古墳などが点在している。

6世紀後半～末になると各地に古墳が築かれ始め、中井古墳群もこの時期に相当する。しかし、ほとんど全ての古墳は丘陵上に立地し、中井古墳群のように平坦面に単独墳的に存在する例はない。他地域のように群集している例は少なく、2～10基の古墳群がほとんどで、まれに山頂近くに1基存在する例がある。中垣内・内山・馬立・丁の各古墳群が群集する代表例である。龍野市域の傾向としては、揖西平野北縁の分布状況が稠密である。大型の横穴式石室も市内では、中井1・2号墳と上記の地域の中垣内1号墳・狐塚古墳がある。郡内に目を広げれば、新宮町天神山古墳・相生市那波野古墳・姫路市西脇所在の古墳・御津町正玄塚が挙げられる。立地条件も異なり、単独墳と群集墳中の1基と性格も異なっている。ただ、中井1・2号墳のみ立地条件が他と異なり平坦面上に位置している。なお、中井1・2号墳の南東の山腹にも横穴式石室を主体部とする円墳が存在している。径10m前後の古墳で、1・2号墳とは性格を異にすると思われるが、中井4号墳と呼称しておく。

中井1・2号墳も古墳時代末の古墳であるが、さらに遅れて造築を始める古墳群も存在する。中井古墳群と槻坂を隔てた東側にある西脇古墳群である。現在調査中であるが、古墳の集中度では県下でも1・2の密度で小規模なマウンドを有するものも含めて70基以上が確認されている。明らかに造墓活動は、終末期を中心とするものである。奈良時代の蔵



第11図　中垣内1号墳

骨器も検出されている。終末期の古墳として、他に神岡町大住寺の野森古墳や権現山古墳群中の小規模の古墳がある。小型の箱式石棺を石室内に保有している。

第12図　中井廃寺石製露盤

奈良時代になると、山陽道に古代寺院が現れる。中井廃寺・中垣内廃寺・小神廃寺（以上龍野市）、西脇廃寺（姫路市）で他に瓦出土地が数点と駅家に推定されている向山遺跡（太市駅推定）小犬丸遺跡（布勢駅推定）が存在する。小神廃寺は播磨最古の寺院の一つであり、飛鳥時代に溯る瓦が出土していると伝えられているが、明らかでない。古墳時代末の大型石室出現期から古代寺院の造営期にかけて律令期山陽道沿いの遺跡分布が卓越する傾向にある。中井廃寺は、中井古墳群の谷向こうに位置し、寺域の北限を山に接して配された寺院で、塔心礎・石製露盤が現存している。現在観音堂のある付近から瓦が多数出土し、礎石も残っているので建物（塔？）の存在が推定される。瓦等の種類も多様で、鬼面文の軒丸瓦と鴟尾が注目される。また、東方約150ｍの山裾に瓦窯があり、中井廃寺に供給された瓦の窯跡である。全長4.1ｍのロストル式の平窯である。需給関係の判る数少ない資料である。当初の山陽道も時期が下るにつれ、間道であった向山南側の斑鳩寺への道が主道となっていく。それにより、中井周辺の遺跡も稀薄となっていく。中井鴨池で奈良時代の須恵器が採集され、北方に存在する中井花池遺跡でも同時期の土器が採集されている。山陽道以外にも南では下太田廃寺（姫路市）金剛山廃寺（揖保川町）があり、美作道沿いに奥村廃寺（龍野市）越部廃寺（新宮町）が存在する。

太子町に斑鳩寺が聖徳太子により建立されて、鵤荘として法隆寺の荘園となり、荘園を主体とする歴史に変わっていく。時期が下るにつれ、周辺地域は押領を受け減少していき、周囲に広山荘さらに外側へ小宅荘が設けられていく。中井一帯も小宅荘に含まれていたものと思われる。古墳時代後期に須恵器生産が中井をはじめ姫路市大市～青山にかけての丘陵、御津町碇岩、相生市那波野丸山で開始され、断続的ではあるが生産が行われ、平安時代になると相生窯跡群として一大産地となる。須恵器生産と荘園の在り方が当地域の特徴となる。

第３章　１号墳の調査

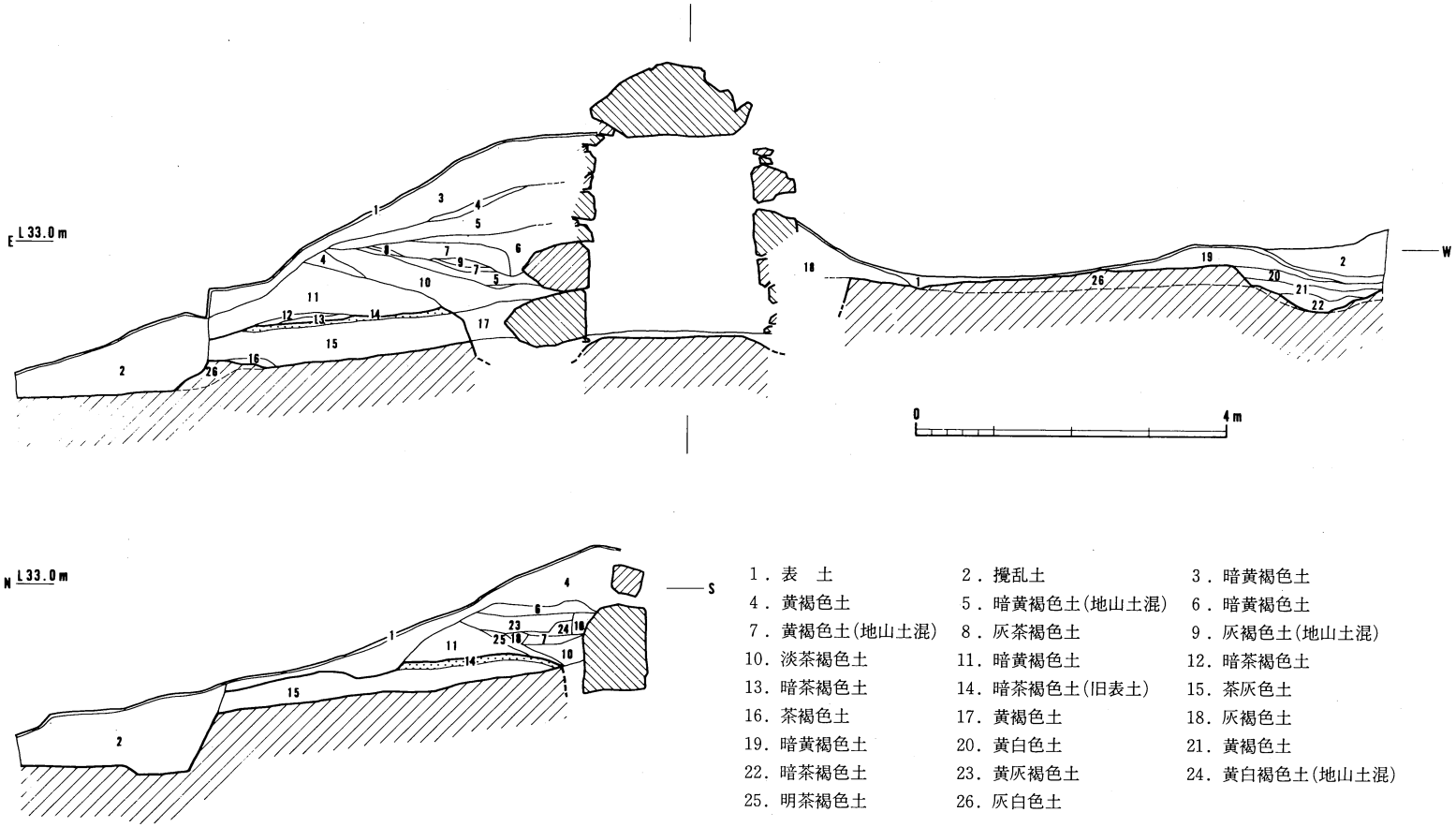
第１節．立地

１号墳は、通称向山（標高 166m）から北向する支脈の先端部緩斜面の標高約32m付近に築造されている。古墳の周辺は竹林や雑草が繁茂し、下方は現在、水田面となっており、古墳との比高差は、約４ｍほどを測る。

中井古墳群は２基から構成され、１号墳はその東側に位置する。２号墳との距離は約60ｍで、やや離れて築造されている。

墳丘および周囲の地形は改変が著しく、斜面上方にあたる南側は竹林および国鉄姫新線

第13図　中井１号墳　墳丘測量図



1．表　土　　2．攪乱土　　3．暗黄褐色土
4．黄褐色土　　5．暗黄褐色土(地山土混)　　6．暗黄褐色土
7．黄褐色土(地山土混)　　8．灰茶褐色土　　9．灰褐色土(地山土混)
10．淡茶褐色土　　11．暗黄褐色土　　12．暗茶褐色土
13．暗茶褐色土　　14．暗茶褐色土(旧表土)　　15．茶灰色土
16．茶褐色土　　17．黄褐色土　　18．灰褐色土
19．暗黄褐色土　　20．黄白色土　　21．黄褐色土
22．暗茶褐色土　　23．黄灰褐色土　　24．黄白褐色土(地山土混)
25．明茶褐色土　　26．灰白色土

第27図　中井１号墳　土層断面図

によって削平され、残る３方向も土採り、開墾、排水路工事などによって、旧状が大きく損なわれている。このような状況から、１号墳と２号墳の間に削平された古墳の存在も予測されたので、１号墳の西側で２号墳に向かって長さ35m のトレンチを設定したが、古墳が存在したような徴証は得ることができなかった。

第２節．墳丘

１号墳は第13図の墳丘測量図でも明らかなように、墳丘が大きく損傷を受け、天井石は勿論、石室壁体も露出しているような状況であった。

墳丘の西、および北側は土採りによると思われる損傷によって、石室の石材が露出するほど大きく削り取られている。一方、南側は竹林や、小道によって損なわれていた。僅かに墳丘の残存する東側についても、調査前に行われた排水路建設の際に墳丘裾部を削り取られている。したがって、２号墳のように墳丘の遺存度は良くなく、墳形、墳丘規模の推定すら困難である。

１号墳は以上のような現況であり、さらに古墳の築造位置が高速道路建設の法面にあたり、工事によって破壊されないということから、幅１ｍのトレンチを石室主軸に直交するように２本、および奥壁から北に１本を最小限設定しただけで、２号墳のように墳丘盛土をすべて除去するというような調査方法はとらなかった。

トレンチによる断面観察では、西トレンチでは地山面まで削平を受けているが、それでも東トレンチの地山面とは約80m の高低差がある。また、東トレンチでは旧表土層が認められ、墳丘は表土層に直接盛土されていることが判明した。旧表土層の傾きは、約8°ほどで、古墳はこの緩傾斜面に築造されていることが推定される。

このような墳丘の遺存状況から、墳形、墳丘規模などについては明らかにすることができなかったが、僅かに残る東側墳丘（この部分にしても、後世の流出が著しいと思われるが）の等高線が円弧を描いていることから、一応、円墳であったと考えておきたい。また、墳丘規模については、盛土の状況、等高線の粗密の状況から径15～20m ほどではなかったかとみられる。

墳丘の高さについても、基底部が明確でないうえに、天井石上部の封土が流出していることから明らかでないが、仮に北西側の標高31m 付近を基底部と推定すると、天井石上端が標高約35m であることから４ｍ以上はあったと考えられる。

第３節．内部構造

１号墳の埋葬施設は、主軸をＳ34°Ｅにおく全長8.9m の片袖式横穴式石室である。

墳丘が大きく損なわれていたにもかかわらず、石室の遺存度は比較的良好で奥壁上半部、

および羨道部の一部が崩壊しているほかは、ほぼ旧状を保っている。石室は古くから開口していたらしく、攪乱が著しい。

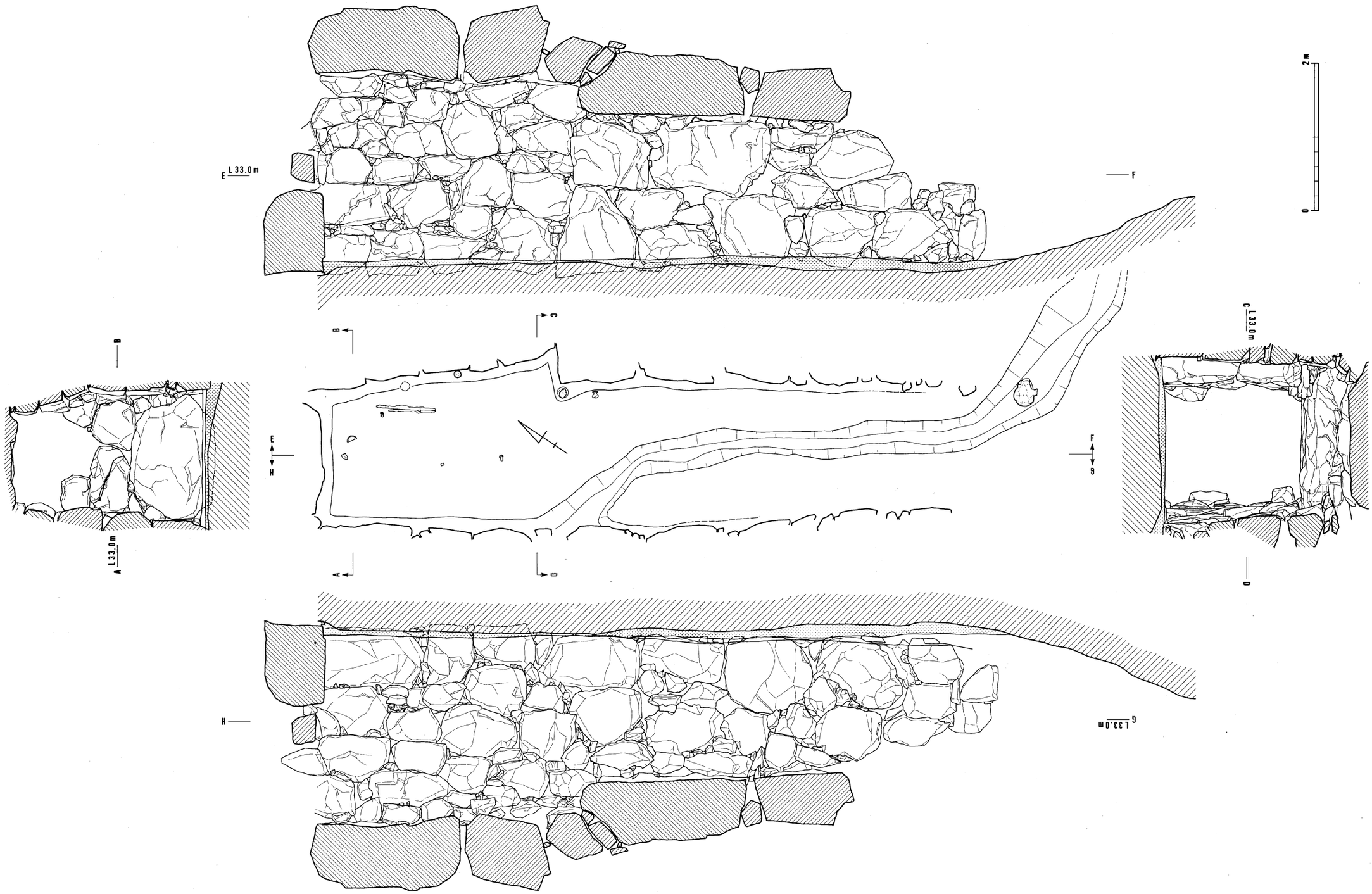
石室は3カ所のトレンチで観察する限り、基底部の1段目のみが旧表土下であり、2段目より上方は盛土によっている。また、石室構築にあたっては、墳丘盛土は墳丘裾部より順次石室側に向かって傾斜するように積みあげられている。

玄室の規模は、長さ約3.2m、幅は奥壁で約1.85m、玄門で約2.45mを測る。玄室の平面形は奥壁と玄門の幅が約60cmも異なっており、整正な長方形プランをとらず、台形状を呈している。これは奥壁からみて左側面で袖部を造り出すため、左側壁のみを外方に開くように構築していることによる。羨道の玄門幅が約1.95mであり、奥壁とほぼ同規模であることから、袖部を造り出すために左側壁を奥壁に対して約100°の開きをもつ鈍角に設定した結果、左側壁のみが台形状に開く平面形となっている。

玄室の高さは、奥壁で約2.5m、玄門で約2.4mを測る。

羨道は長さ約5.7m、幅は羨門で約1.65m、玄門で約1.95mと、やや羨門で狭くなっている。また、玄室長と羨道長の比は1：1.7で、長大な羨道を造っていることが特徴である。羨道の高さは、玄門で約2.4m、羨門に最も近

第15図　中井1号墳　石室上面図


E L33.0m
F
2m
0
B
C
E
H
F
G
A L33.0m
C L33.0m
D
A
D
H
G L33.0m

い天井石の残存する部分で約1.8ｍを測る。

石室の構築は、東から西へ僅かに傾斜する地点の旧地表面を「コ」字形に墓壙を掘ることから開始したと考えられるが、墓壙の検出は最小限の範囲に留めたため、正確な形状は不明である。墓壙の幅は約2.5ｍで、側石を据える部分を一段深く掘り込んでいるようである。

石室奥壁は、上半部を失っている。最下段は幅約1.6ｍ、高さ約1.15mの偏平な石材を立てている。石室の構築に際しては、まず最初に据えられた石材であろう。隙間はこぶりな石で埋められている。奥壁は三段目までしか残存していないが、上方に行くにしたがって小さな石材を用いているらしいことは、側壁と同様である。

左側壁は、良く面の整った凹凸の少ない石材を５～６段積みで形成している。最下段は５石を小口積みにして構成しているが、そのうち１石は隙間を埋め合わせる石材とみられ、基本的には４石から形成されるのであろう。特に床面から高さ約1.85m付近の３段目の上端面は良く揃えられており、１～３段目まではほとんど持ち送りは認められない。４段目より上部は奥壁よりに行くに従って、小型の石材が用いられている傾向があり、石材を前方に持ち送っている。

右側壁は袖部を持たないので、羨道側壁と連続し、壁面では明確な区別は認められない。左側壁と比較すると、石材の構築はやや粗雑であるが、４～６段で構成されている。また、左側壁ほどではないが、３段目上端面は良く揃えられている。持ち送りの状況は左側壁と同様である。

天井石は３石からなる。奥壁側の石材が大きく、幅約2.75m、長さ約2.15m、厚さ約95cmを測る。中央の天井石は、幅約2.5ｍ、長さ約1.15m、厚さ約90cmを測る。玄門の天井石は幅約1.6ｍ、長さ約1.1ｍ、厚さ約90cmの小型の石材で、羨道の天井石構架後に斜め方向から差し込まれたような状況で、羨道部天井石との隙間には偏平な石材を埋め合わせてある。

玄室床面は第１次床面では約6.9㎡を測る。玄室床面の攪乱は著しく、盗掘壙のような形跡は無かったが、第２次床面はほとんど残存していない状況であった。玄室床面には焼土や灰が一面に散布し、後世に石室内で火が焚かれた痕跡が認められた。なお、古墳に関係する遺物以外には、底部糸切りの須恵器椀片が１点出土している。

第１次床面はほとんど水平に掘られた地山上に、厚さ約10cm程度の粘質土をほぼ水平に敷いているだけである。

第２次床面は、５～15cmの角礫を丁寧に隙間なく２～３段重ねて敷き並べた敷石が検出された。しかし、敷石は攪乱が著しく、奥壁から長さ約70cmがかろうじて旧状を保っているだけであった。したがって、羨道にまで敷石の石材と考えられる拳大の石が散在的に認

第17図　中井１号墳　第２次床面実測図

められたが、２次的に移動している可能性もあり、敷石が本来羨道にまで及んでいたかどうか確認できなかった。

羨道は玄室主軸とほぼ平行に構築されているが、羨門に向かってやや狭くなっている。壁体は玄室と同様、良く面の整った石材が使用されている。

袖石は幅約１ｍ、高さ約20cmの石を立てて据えている。

羨道左側壁の長さは約5.8ｍで、２～３段積みで構成され、それぞれの石の間は小ぶりな石で隙間を埋めている。羨道の石材は玄室側壁に比較すると、大型の石材が用いられ、極だった差を持っているのが特徴で、最下段は５段から構成されている。玄室と同様、右側壁に比べると丁寧な石積みである。

羨門は幅約70cm、高さ約70cmの石を立てて外方に面を揃えていることから、左側壁最下段はこれ以上前へのびずに完存していると考えられる。なお、羨門付近の側壁上半部は崩壊している可能性が高い。

羨道右側壁は袖部を持たないため、側壁での区別は明確ではないが玄門に構架された天井石から測ると長さは約5.7ｍで、左側壁よりやや短い。また、左側壁ほどではないが、玄室よりは大型の石材が使用されていることや、玄室と同様、石積みが粗雑であることが指摘できる。

羨門前面は、第15図のように石室主軸と直交するように外方に４石立て並べ石室前面を形成している。

羨道天井石は２石が残存し、隙間を小さな石で埋めている。中でも玄門側に構架された天井石は長さ約2.25m、幅約2.7ｍ、厚さ約85cmで、１号墳で使用された石材では最も大きな石である。一方、羨門側には天井石が認められなかったが、本来、もう１石が構架されていた可能性が高いように思われる。羨道床面は玄室と同様、攪乱を受け、敷石に用いられたと思われる小礫が部分的に散乱していたが、敷石が羨道に敷かれていたかどうかは不明である。

第１次床面には玄門部右側壁から始まる幅約50cm、深さ約５～15cmの素掘の排水溝が検出された。排水溝は右側壁から屈曲して、羨道中央の左側壁寄りまでのび、そこからほぼ直線的に羨門まで掘られている。さらに羨門付近でやや幅を広げながら東方向に屈曲して石室外の斜面下方にのびている。調査区の関係上、羨門から約2.5ｍしか検出できなかったが、２号墳の例からみてさらに外方にのびていると考えられる。石室外で排水溝が屈曲するのは、石室前方の地山面が高く傾斜しており、等高線に沿って排水溝が掘られたと考えられるが、おそらく墓道も石室主軸線上に直線的に存在したのではなく、この溝に沿うように屈曲していたと思われる。

第４節．遺物の出土状況

石室は後世の攪乱が著しく、原位置を保っている遺物は少なかった。そのため調査途中では全く旧状を保っている遺物は無いのではないかと思えるほどであったが、かろうじて第１次床面に直刀２振が切先を玄門に向けて、一部重なった状況で検出された。そのうち、三累環頭大刀は把頭と鞘尻金具が遊離した状況で検出され、かならずしも副葬位置に移動が無かったとは言いがたいが、直刀の出土状況からみて大きな移動は無かったと推測される。

第１次床面ではこの直刀の他に、玄室左側壁に沿って完形の須恵器が２個体やや距離を置いて出土している。それ以外に奥壁に近い個所で須恵器片が、玄室中央部で鉸具が検出されたが、２次的に移動されていると考えられる。

左側壁の袖石に接して上半部を欠損した高坏と脚付長頸瓶が出土した以外には、羨道では床面に接する遺物は無かった。

石室外にのびる排水溝中に横倒しになった状況の横瓶が出土したが、上半部は欠損していた。

以上の床面に接して検出された遺物の他は、すべて攪乱土もしくは石室外の埋土中の出土であり、１号墳が古くから開口していたため盗掘、攪乱をうけ、少なからず遺物を失っているのではないかと思われる状況であった。なお、異なった地点で出土した土器が互いに接合することが多かったことからも、遺物の移動が考えられる。

第５節．出土遺物

出土遺物には須恵器、土師器、鉄器、青銅製品がある。副葬時の状況を保っている遺物は少なかったが、埋土中、攪乱土中の出土遺物が互いに接合する場合が認められた。

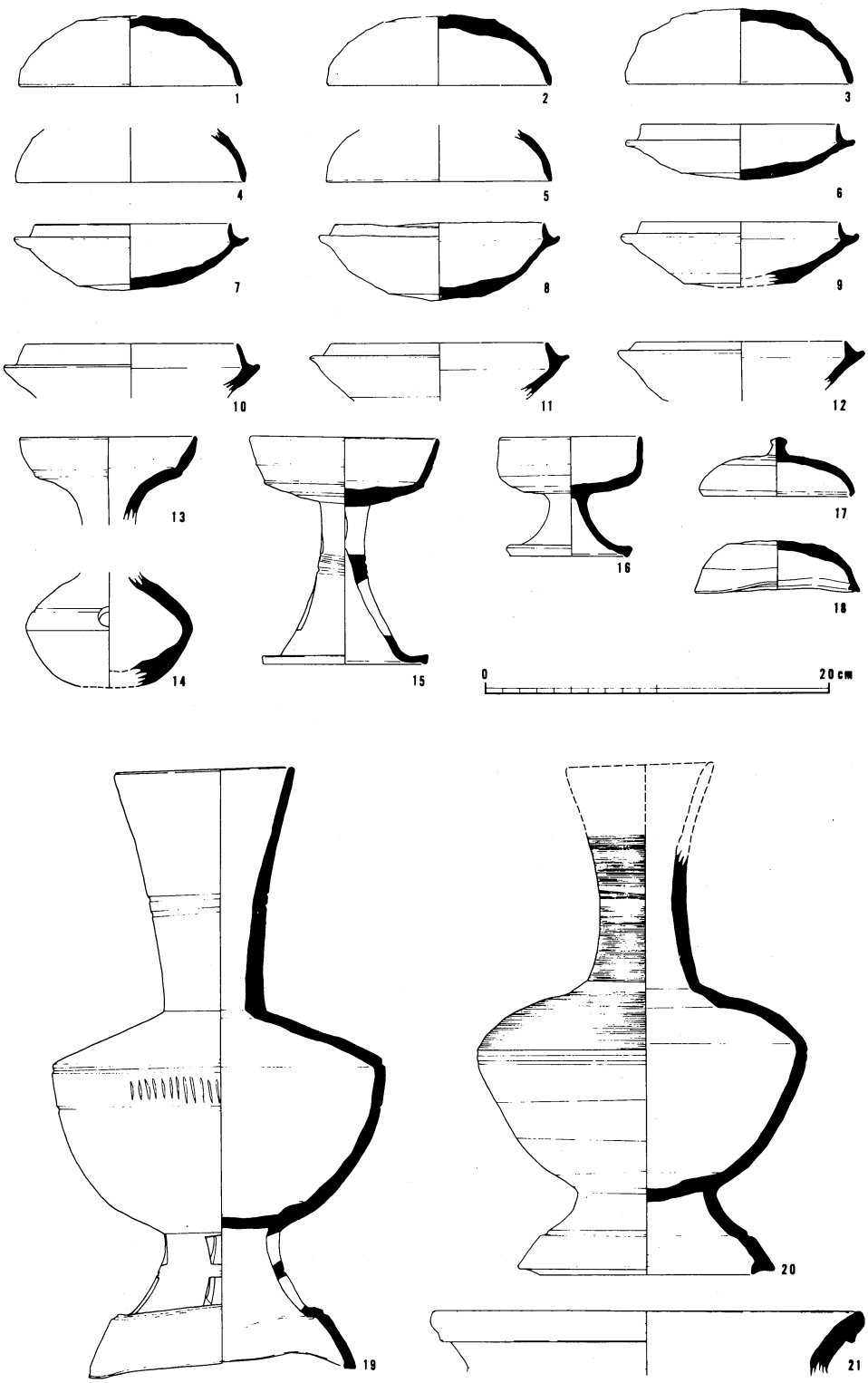
１．須恵器

出土土器のうち、土師器は微細片であるが、壺と考えられる破片の他は、器種など不明である。

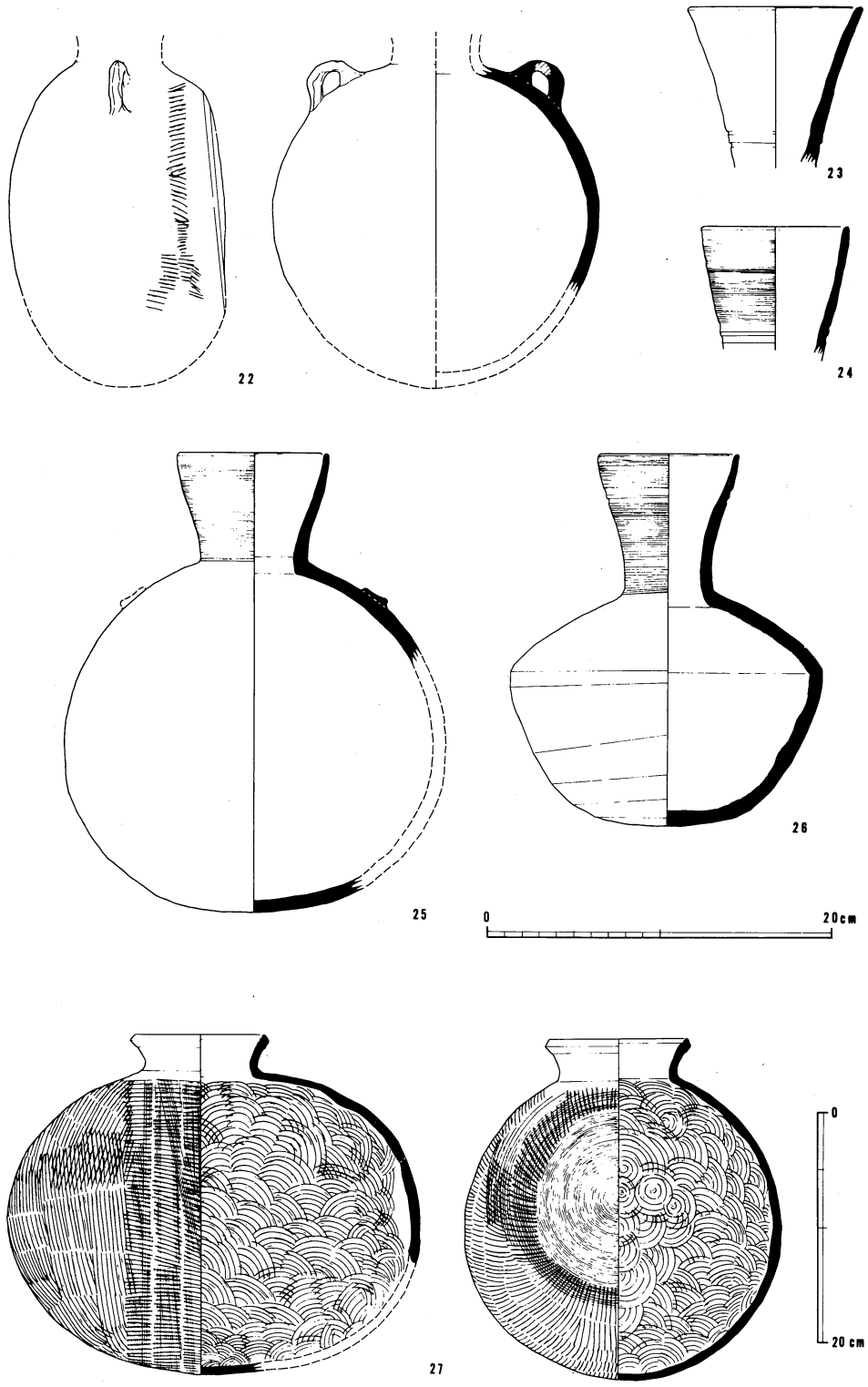
須恵器は図示したものは27点である。器種には坏、蓋、無蓋高坏、脚付を含む長頸瓶、提瓶、瑞、甕がある。坏、蓋の占める割合が多いのは通常の古墳と変わりないが、長頸瓶が５個体と多いのが注目される。

坏（６～12）

出土量の最も多い坏は、矮少化した立ち上がりを有するもので、口径は12cm前後である。立ち上がりは内傾するものが多いが、直立するもの（６）もみられる。断面は尖り気味のものと、三角形状を呈する２種がある。底部が残存しているものは全て内外面は回転ナデ調



第18図　中井１号墳　須恵器実測図（1）



第19図　中井１号墳須恵器実測図（2）

整され、底部内面は仕上げナデが施されている。底部外面はヘラ切りのまま不調整である。

蓋(1～5、17、18)

蓋には坏とセットになるもの(1～5)を蓋A、宝珠つまみの付くもの(17)を蓋B、矮少化したかえりの付くもの(18)を蓋Cとする。

坏とセットになる蓋Aは口径13cm、器高4cm前後のものである。偏平な天井部から緩やかに内彎する口縁部をつくる。口縁部で僅かに内側へ屈曲するものが多く、端部は丸く仕上げられている。内外面とも回転ナデ調整され、天井部内面は一方向の仕上げナデが施されている。天井部外面はヘラ切りのまま不調整である。

蓋Bは乳頭状に近い宝珠つまみを付ける蓋である。天井部は口縁部近くで大きく内彎し、口縁端部を内方に僅かに折り曲げている。内面のかえりが消失する初現的な蓋と考えられるが、つまみの形状からすると特異な例である。内外面とも丁寧に調整され、天井部外面は回転ケズリ、内面は不定方向のナデによって調整されている。

蓋Cは極めて矮少化したかえりをもつ蓋である。つまみは付かないが、坏ではなく蓋であろう。かえりは端部を肥厚させたという程度のもので、内外面とも回転ナデ調整されている。天井部外面は切り離しのまま不調整である。内面は一方向の仕上げナデが施されている。

高坏(15、16)

高坏は2個体あり、いずれも無蓋高坏である。高坏Aは長脚2段の方形3方透かしの無蓋高坏で、坏部は底部から大きく屈曲して外上方に直線的にのびる口縁部をもつ。口縁部と底部との境、及び口縁部中位には退化した段をつけるが、その他の文様帯は認められない。脚部は円筒部を細くしぼり、脚端を外方に大きく屈曲させている。坏底部外面は回転ケズリされ、内面中央には一方向の仕上げナデが施されている。

高坏Bは低脚の無蓋高坏で、坏部は偏平な底部から内彎気味の直立する口縁部をもつ。坏底部外面は回転ケズリで調整され、内面は不定方向のナデが施されている。

瑞(13、14)

瑞は1個体で、13、14は同一個体であろう。頸部は欠損しているが、口頸部の長大化した時期の瑞である。外反する頸部から屈曲して立ち上がる口縁部を付け、境には凹線文を巡らしている。体部は小型で偏平である。円孔は体部最大径より上位の肩部にあり、一条の凹線文体を巡らしている。

長頸瓶(19、20、23～26)

長頸瓶は口縁部を含めると6個体ある。脚の付かないものを長頸瓶A、脚の付くものを長頸瓶Bとする。図示した2個体の長頸瓶B以外にも脚付長頸瓶片があるので、長頸瓶Bは3個体は確認できる。頸部は細長く直立する。口縁部は外反するものと、内彎する2種

がある。口縁部片（23、24）はいずれか判別できないが、23は長頸瓶B、24は長頸瓶Aの可能性がある。

肩部は内彎気味のものと直線的なものがあるが、いずれも鋭角的に屈曲し、胴部から底部へ続いている。長頸瓶Bは屈曲部に凹線を巡らし、19は胴部にさらに凹線帯を巡らし、凹線間を櫛描き列点文で飾る。20は口頸部から肩部にかけてカキ目を施している。長頸瓶Aは口頸部にカキ目を施し、口縁部に2条の凹線文を巡らすが、胴部には文様帯を持たない。

脚は2段方形4方透かしをもつものと、脚高が短くなり、透かしの省略されたものがある。型式的には前者から後者への移行が考えられる。

提瓶(22、25)

提瓶は2個体ある。22は口頸部を欠損しているが、体部は前面が丸くふくれ、背面は偏平である。背面側の体部には平行タタキ目文の痕跡が残るが、凹線文などの文様帯は無い。体部両側には環状の把手が付く。

25は口縁部が内彎して漏斗状を呈する。口頸部にはカキ目が施されている。体部は22と同様、体部は前面が丸くふくれ、背面は偏平であるが、文様は施されていない。肩部には耳に代えて、円形の粘土粒を貼付けている。なお、体部には焼成時に溶着した須恵器片が各所に付着している。

横瓶(27)

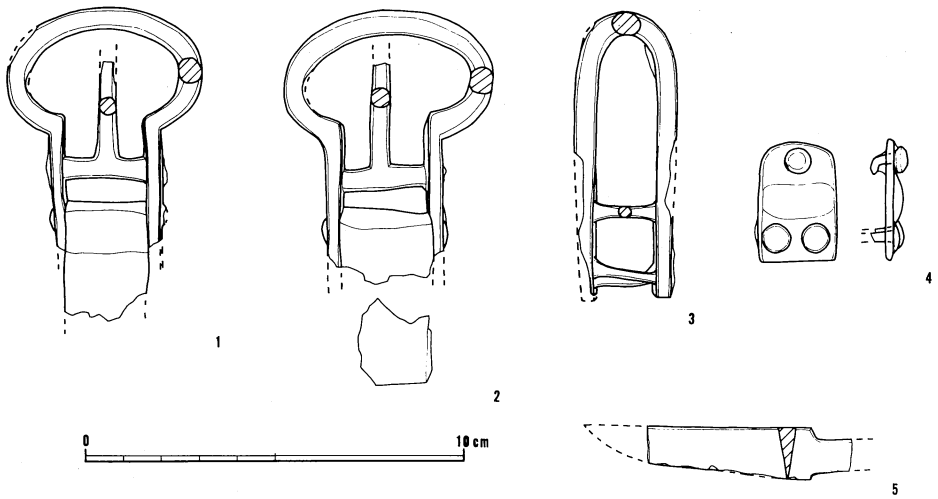
外反する短い口頸部を付ける。口縁端部やや肥厚する。体部外面は平行タタキ目文を施した後、縦方向にカキ目調整されている。体部内面は同心円タタキ目が施されている。横長の側面には粘土板で蓋をした痕跡が内面に残っている。

2．鉄器

鉄器の出土量はそれほど多くなく、僅かに馬具類、武器類など9点出土しているだけである。馬具類には、鉸具2点、鐙1点、飾金具1点があり、武器類には三累環頭大刀を含む直刀2振、鉄鏃3点などがある。

鉸具(1、2)

一端の開いた輪金の中に「T」字形の刺金と、両端を細くした鉄棒を各々所定の孔に差し込んで挟んだものである。1は現存長8.3㎝である。輪金の環部は幅5.15㎝で、断面は円形を呈し、径6㎜である。基部の断面は長方形で、幅4㎜、厚さ6㎜を測る。2も同じつくりで、現存長7.2㎝である。輪金の環部の幅5.5㎝を測る。双方とも「T」字形の刺金の先端及び基部先端が欠損している。



第20図　中井１号墳　鉄器実測図（1）

鐙（3）

長さ7.6㎝、幅1.8㎝、厚さ0.7㎝の鉄板を「U」字形に曲げたものである。先端が欠損しているが、3個所を鋲留めしたものと思われる。

飾金具（4）

全体に銹のため膨張し、鋲留めも余り原形を留めていないが、3個所に鉄製の円頭鋲を打っているのが観察される。全長3.15㎝、幅2.15㎝を測る。全体に金箔を施している。

刀子（5）

先端部分が欠損しているため、刃部長は不明であるが、関は残っており、両関であると思われる。現存長5.4㎝、最大幅1.4㎝を測る。茎部分は約1㎝ほどしか残存していない。茎幅は0.9㎝で、目釘を認めるまでには至っていない。

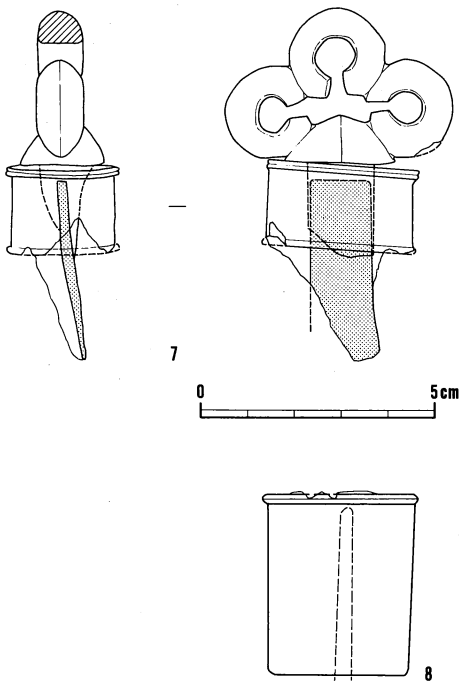
直刀（6、9）

石室第1次床面で、2振が重なるように出土した。6は全体に銹化しているが、遺存状態は比較的良好である。やや小ぶりな直刀で、全長64.8㎝、刀身の長さ55.8㎝を測る。断面形は二等辺三角形を呈しており、鎬をつくらず、膨らみも認められない。刀身の切先付近の幅は2.1㎝、厚さ0.5㎝、中央部で幅2.5㎝、厚さ0.6㎝で、関近くで幅2.7㎝、厚さ0.7㎝を測る。関は棟と刃の両側に付くが、棟側は余り明瞭ではない。鉄製の鍔が残存しているが、小片であるため原形の復原は困難で、径などは明らかでない。茎は長さ9.1㎝、厚さは中央部で0.5㎝で、目釘が残っている。

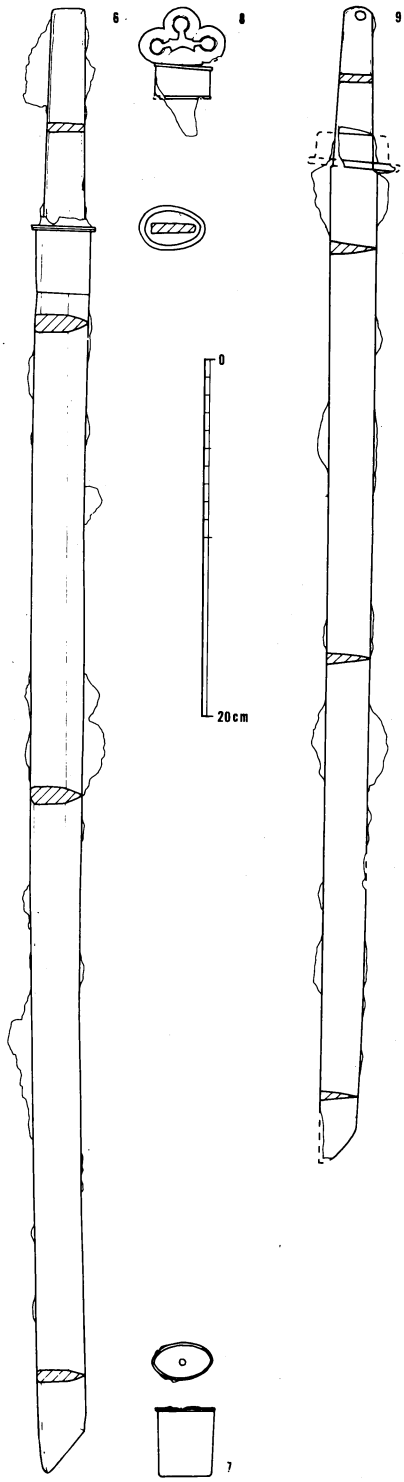
9は、全長82.3㎝の三累環頭大刀である。出土状況の項でも記したとおり、把頭と鞘尻金具は刀身から遊離して出土した。刀身部66.3㎝を測り、全体に遺存状態は良好である。刀身の断面は鎬を持っているため、棟から鎬までは真っすぐで、鎬部分から刃に向かって

は三角形を呈し、鎬と刃の間隔が狭いいわゆる切刃造である。切先は切刃造にみられるカマス切先となっている。切先付近で刀身の幅2.7cmで、厚さ0.7cm、中央部で幅2.85cm、厚さ1.0cm、関付近で幅2.95cm、厚さ1.0cmを測る。関は棟と刃の両側に付くと思われるが、鏥で包まれているため明確ではない。鏥は幅3.5cmの鉄板を断面倒卵形の筒状に曲げたもので、鍔と一体になっている。鍔は小型のいわゆる喰出鍔と呼ばれるもので良く残っており、長径3.6cm、短径2.5cm、厚さ0.3cmの板状を呈している。茎は長さ12.2cm、中央部での厚さ0.5cmで目釘は存在しない。

三累環頭把頭は銅芯銀装で、長さ5.25cm、幅4.85cm、厚さ2.2cmを測る。環が太く、三累環



第21図　中井1号墳三累環頭鞘尻実測図



第22図　中井1号墳　鉄器実測図（2）

の高さに対して横幅が広い。環の径はほぼ2.0㎝ほどで、厚さ0.6㎝を測る。また、各環の中心が、底辺の広い二等辺三角形の各頂点にある形をとっている。縁のある把筒金は、長さ1.8㎝で、断面形は卵形を呈している。縁は三累環側では1条の凹線を巡らし、2条の縁となっているが、把側では1条の突起である。把頭の茎は表面観察では鉄製で、僅かに把木の木質が残っている。把頭と鉄製茎との接着方法についてはX線撮影を行った結果、特異な接着方法をとっていることが判明した。鉄製茎と銅製把頭の接着は、あらかじめ鋳造時にくりこみをつくった幅約1.4㎝、厚さ約1.2㎜の銅製把頭の茎に、幅1.4㎝、厚さ約2㎜の鉄製茎を差し込み、銅製茎の外側から叩きしめているのではないかと想定できる状況が観察できる。刀身との着装は刀身茎に目釘穴が見られないことから、把頭の鉄製茎と緊縛するか、把木で包み込んだのではないかと考えられ、把頭の鉄製茎がやや外方に折れ曲がっているのも、刀身との着装の際に把頭と刀身がずれることがないように意識的に曲げられたものであろう。鞘尻金具は青銅製で、刀身から遊離して出土した。長さ3.9㎝を測り、断面が楕円形の簡単な造りで、縁を付けている。鞘木の木質が残り、閉じている部分の中央には現存長3.0㎝、径3㎜の鉄製の鋲を打っていた円孔があけられている。なお、遺存していた鞘木は松属五葉松類であろうとみられる。

6．小結

以上のように、中井1号墳は石室の遺存度は比較的良好であったが、石室床面は攪乱を受け遺物の出土状況は必ずしも良くなかった。また、石室の調査も最小限に留めたため、2号墳のような石室の構築方法については十分な資料を得ることができなかったが、1号墳の石室の特徴を2、3列記すると次のようである。

まず、玄室の平面形が整正な長方形ではなく、台形を呈していることである。これは奥壁幅と玄門幅が、ほぼ同規模であるにもかかわらず、片袖式石室を造ろうとした結果とみることができる。2号墳もまた同様であるが、1号墳は玄室長が2号墳より短いため、よりいびつな平面形となっている。後に触れるように、1号墳の構築年代が早くとも6世紀末以降であり、あるいは7世紀初頭と考えられることから、袖を造る古墳の中では最も後出し、無袖式石室出現の直前に位置付けることが可能である。このことは、羨道長が玄室長の1.7倍であり、羨道の長大化傾向からみても妥当であろう。なお、奥壁幅／玄室長は0.58、玄門幅／奥壁幅は1.05で、奥壁より玄門幅が僅かではあるが大きいにもかかわらず袖を造りだしたため、玄室が台形に開いた平面形とならざるをえなかったとみられる。

使用された石材をみると、玄室に比べ羨道の方が大型の石材が使用されていることである。このことも、1号墳が新しい要素を有しているとみることができる。

また、玄室側壁の構築では、床面から3段目の上端面が良く揃えられており、3段目を

境に石材の大きさ、持ち送りなどに区別もあり、石室構築上の特徴となっている。

つぎに、出土遺物についてみると、播磨地方は勿論、兵庫県でも初出例である三累環頭大刀が出土したことが中井１号墳の最大の特徴として挙げられるが、その前に築造年代を示すと考えられる出土土器について簡単に触れておきたい。

出土土器量は攪乱のためそれほど多くは無かったが、比較的まとまった型式を示し、その大半はＴＫ-217型式に収まるものであろう。

坏はたちあがりの形状に２種あるが、時期差を示すものか、生産地の差を示すものか明らかでない。いずれにしろ、極めて矮少化したたちあがりであり、蓋と共に外面には回転ヘラケズリが施されず、切り離しのまま不調整であることなど、Ⅲ期初頭の様相を示している。ただ、坏の場合口径が11.5～12.5cm程度でやや大きく、前型式との過渡的な位置にあると考えられる。

出土土器の中で、蓋Ｂは特異な形態を示している。他の蓋・坏に共伴するとすれば、かえりを消失させ、端部を折り曲げる蓋の初現的な例であろうか。また、出土土器中では、丁寧な整形・調整が施されている点も注意される。

先に触れたとおり、出土須恵器の多くはＴＫ-217型式に属すると考えられるが、22の提瓶は環状の把手を持つ。この種の提瓶は、ＴＫ-10型式を境に消滅しているといわれるが、地方では後出の型式まで残存するようであり、口頸部の形状が明らかでないため、所属時期については判然としない。したがって、22の提瓶ついても他の土器と同様の型式と考えておきたい。

このように出土土器から検討する限り、１号墳の築造年代は上限が早くとも６世紀終末であり、おそらく７世紀初頭の築造と考えられ、第２次床面を含む追葬もさほど時期を隔てずに終了したのではないかと考えられる。

鉄器は出土量が少なく、本来副葬された鉄器の全てが検出できたとは考えられない。幸いにして、直刀２振が第１次床面上に遺されていたが、他は全て攪乱土からの出土である。

三累環頭は播磨地方は勿論、兵庫県でも初出例である。穴沢咏光、馬目順一氏の集成（「三累環頭試論　―伝・常陸岩井出土の竜紋三累環を中心にして」『藤沢一夫先生古稀記念古文化論叢』　1983）によれば、我が国では31例ほどが知られている。分布にも偏りがあり、北部九州・山陰・四国西半部・東海西半部・北関東に多いという。畿内及びその周辺地域では、伝奈良県出土例、京都府福知山市大内出土例と少なく、畿内周辺部の播磨地方西部の出土であり、さらに律令制下の山陽道に接する地点に築造された古墳の出土例として注目される。また、着装状況は明らかでないものの、刀身や刀装具が遺存している点も良好な資料といえる。穴沢、馬目氏の型式分類によれば、本例はＣ式、すなわち「横幅の方が長さより大になり、各環の中心は広辺の広い二等辺三角形の各頂点にある」型式

で、6世紀後半以降のものとされており、1号墳の年代観と矛盾はない。一方、その被葬者の性格については、あまり「家格」の高くない地方豪族と考えられている。

新谷武夫氏は三累環頭大刀が日本出土の環頭中の中で占める割合は1割前後と少なく、新羅、伽耶地方の工人によってつくられたか、その地からの掠奪ではないかと考えられ、ヤマト政権が在地方豪族に対し、服属のしるし、軍事権のシンボルとして下賜したものであろうと考えられている。（「環状把頭研究序説」『考古論集　―慶祝松崎寿和先生六十三歳論文集―』　1977）

新納泉氏は直接三累環頭大刀には言及されていないが、装飾付大刀について首長墓型と群集墳型の二つの類型を設定され、畿内政権が首長層の権力を弱体化させながら、有力家族層を直接軍事的に編成してゆく過程を示され、装飾付大刀をもつ被葬者の階層を、それぞれの地域における軍事組織の頂点を占めた首長層（地方豪族）と共同体の頂点に位置する者（上層農民）が中心であると考えられている。（「装飾付大刀と古墳時代後期の兵制」『考古学研究』 119　1983）ただ、中井古墳群の場合、首長墓とみるのか、群集墳とみるのかは検討の余地があり、揖保川下流域の後期古墳の推移について、さらに検討が必要であろう。

ところで、兵庫県出土の環頭把頭、もしくは大刀は14古墳18例（第1表）を数える。それ以外に数例の環頭大刀があると言われているが、未確認である。他に円頭大刀、圭頭大刀、方頭大刀、頭椎大刀が、9古墳11例ほどが知られている。環頭把頭の出土例で最も時期的に古いものは、弥生時代終末～古墳時代初頭と考えられる内場山墳丘墓例で、古墳時代前期の前方後円墳である伊和中山1号墳出土例や5世紀中葉ごろとみられる宮山古墳第1主体出土例と共に素環頭大刀が出土している。なお、時期が下るのではないかとみられている袋尻浅谷出土の素環頭大刀は、周辺に横穴式石室を埋葬施設とする古墳時代後期の群集墳が存在するものの、出土地点が古墳とは確定できない位置にある。一方、6世紀後半以降とみられる単龍、単鳳、双龍、双鳳式環頭大刀は、前方後円墳で組み合わせ式石棺からの出土とされる伝御園古墳例を除くと、すべて墳形は円墳で、いずれも横穴式石室を埋葬施設とすると考えてまちがいなかろう。また、中井古墳群を含め当該古墳の多くが交通の要衝に存在することは注目される。ただ、環頭大刀の出土した古墳自身の内容が不明確であったり、当該古墳の古墳群中での評価が現在のところ不可能な場合が多く、出土古墳の性格については今後の検討課題であろう。

なお、環頭大刀については町田章、穴沢咏光両先生、櫃本誠一氏から多大のご教示を得た。また、X線撮影、および刀装具の成分同定にあたっては、奈良国立文化財研究所の肥塚隆保氏の指導のもと加古千恵子氏の手を煩わせ、鞘木材の鑑定には奈良国立文化財研究所の光谷拓美氏のご教示を得た。記して感謝いたします。

第１表　兵庫県環頭大刀出土地名表

No.	古　墳　名	所　在　地	墳　形	埋葬施設構造	大刀形式	共　伴　遺　物	所　蔵	文献
1-1	宮山古墳	姫路市四郷町坂元	円墳（径22m）	竪穴式石室	素環頭	玉、挂甲、馬具、鏃、斧、鎌	姫路市教委	①
1-2				竪穴式石室	素環頭	鏡、帯金具、玉、垂飾付耳飾、直刀、挂甲、馬具、鏃、刀子、斧、鏃、須恵器、砥石		②
1-3					素環頭			③
1-4					三　葉			
1-5					銀錯貼金			
2	瓢塚（妻塚）	神戸市西区伊川谷町潤和	前方後円墳（長60m）	埴輪円筒棺	単龍鳳	――	兵庫県教委	④⑤
3	中井１号墳	竜野市竜野町中井	円墳（径20m）	横穴式石室	三　累	直刀、馬具、須恵器	兵庫県教委	
4	袋尻浅谷２号墳	揖保川町袋尻	――	横穴式石室？	素環頭	直刀、須恵器	揖保川町教委	⑥
5	伊和中山１号墳	宍粟郡一宮町伊和	前方後円墳（長62m）	竪穴式石室	素環頭	鏡、玉、竪櫛、剣、鑓、鏃、鉇、斧	一宮町教委	⑦
6	高畑２号墳	佐用郡三日月町新宿	――	横穴式石室	双　龍	耳環、玉、金銅装大刀、鏃、馬具、須恵器	三日月町教委	⑧
7	佐用比売神社	佐用郡佐用町本位田	円墳	横穴式石室？	単龍鳳	直刀、須恵器	佐用比売神社	⑨⑩
8	御園古墳	尼崎市御園	前方後円墳（長60m）	組合せ式石棺	双　鳳	――	尼崎市教委	⑪⑫
9	――	神戸市東灘区本山町	――	――	――	――	東京国立博物館	⑬
10	奥谷蕪谷古墳	多紀郡篠山町殿町	――	横穴式石室？	単　龍	玉、須恵器	東京国立博物館	⑭⑮
11	山田２号墳	多紀郡西紀町大山下	円墳（径20m）	横穴式石室	単　鳳	鏡、直刀、須恵器	大山顕彰会	⑯
12	内場山２号墳	多紀郡西紀町上板井	方墳（長20×23m）	木棺直葬	素環頭	剣、鏃、鉇、斧、土器	兵庫県教委	⑰
13	大簽古墳群	養父郡養父町大簽	不明	横穴式石室？	単　龍	耳環、玉、須恵器	東京国立博物館	⑱
14	文堂古墳	養父郡村岡町寺河内	円墳（径10m）	横穴式石室	双　龍	鏡、頭椎大刀、方頭大刀、鏃、馬具、須恵器	村岡町教委	⑲

参考文献

① 松本正信、加藤史郎『宮山古墳発掘調査概報』　姫路市教育委員会　1970

② 松本正信、加藤史郎『宮山古墳第２次発掘調査概報』　姫路市教育委員会　1973

③ 町田　章「環頭の系譜」『研究論集　Ⅲ』　奈良国立文化財研究所　1976

④ 櫃本誠一、松下勝『日本の古代　3　兵庫南部』　保育社　1984

⑤ 町田　章「環頭大刀二三事」『山本清先生喜寿記念論集　山陰考古学の諸問題』　山本清先生喜寿記念論集刊行会　1986

⑥ 松本正信、加藤史郎『袋尻浅谷―弥生時代土壙墓群と横穴式石室の調査報告―』　揖保川町教育委員会　1978

⑦ 垣内　章『伊和中山古墳群　Ⅰ　―１・２号墳発掘調査概要報告』　一宮町教育委員会　1986

⑧ 三日月町史編集委員会『三日月町史　第１巻　古代』　佐用郡三日月町　1964

⑨ 井守徳男「本位田遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告書（佐用編）』　兵庫県教育委員会　1976

⑩ 原田正彦「演習日記摘要」『東京人類学会雑誌』第182号　東京人類学会　1901

⑪ 森岡秀人、藤田和尊「兵庫県東部―西摂地方」『古代学研究』104　古代学研究会　1984
なお、森岡氏の教示によれば、その後の追跡調査でこの双鳳式環頭大刀は、御園古墳出土ではない可能性が高いとのことであり、将来抹消されることになるかもしれない。

⑫ ⑤と同じ

⑬ 斎藤　忠『日本古墳文化資料綜覧』　吉川弘文館　1956

⑭ 浜田耕作、梅原末治『近江国高島郡水尾村の古墳』　京都帝国大学　1923

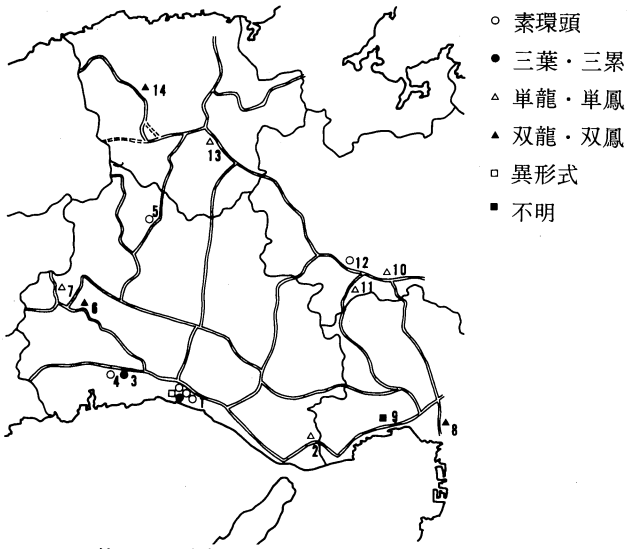
⑮ 穴沢咏光、馬目順一「単龍・単鳳環頭大刀の編年と系列　―福島県伊達郡保原町愛后山古墳出土の単龍環頭大刀に寄せて―」『福島考古』第27号　1986

⑯ 中野卓郎他「山田群集墳」『波賀尾群集墳分布調査報告書』　多紀郡教育事務組合教育委員会　1973

⑰ 兵庫県教育委員会『内場山城跡解説会資料』　1986

⑱ 神林淳雄「環頭大刀雑攷　―環頭大刀とその文化」『考古学雑誌』第33巻12号　1943

⑲ 村岡町誌編纂委員会『村岡町誌 上』　村岡町　1980



第23図　兵庫県下出土の環頭大刀分布図

第２表　１号墳出土須恵器計測表

No.	器種	出土地区					法量 (cm)				色調
		玄室	羨道	石室外	墓道	墳丘	口径	器高	最大径 坏高	底径	
1	蓋A	1・床					13.1	4.1	—	—	青灰色
2	蓋A	1・床・埋	1・床・埋				12.9	4.0	—	—	灰～灰白色
3	蓋A	1・床・埋	1・床・埋				13.1	4.4	—	—	灰　色
4	蓋A	1・床・埋					(13.2)	—	—	—	灰白色
5	蓋A	1・2床埋					(13.2)	—	—	—	灰～灰白色
6	坏A	1・2床埋					(11.5)	3.2	—	—	灰　色
7	坏A	1・2床埋					11.5	3.9	—	—	灰　色
8	坏A	1床埋・攪					12.2	4.5	—	—	灰　色
9	坏A	1・2床埋					11.6	—	—	—	灰　色
10	坏A			攪			(12.4)	—	—	—	灰白色
11	坏A					攪	(12.6)	—	—	—	灰　色
12	坏A	1床埋		排・底			12.2	—	—	—	灰　色
13	瓮	1床埋					(10.2)	—	—	—	灰白色
14	瓮		1床埋				—	—	9.8	—	灰白色
15	高坏A	1・2床埋					(11.0)	13.3	3.9	9.4	黒灰～灰色
16	高坏B		1　床				8.2	7.0	3.3	6.8	黒灰～灰色
17	蓋B	1床埋					8.7	3.4	—	—	黒灰～灰色
18	蓋C	1　床					9.6	3.0	—	—	黒灰～灰色
19	長頸瓶B	1床埋	1　床				(10.1)	35.7	(19.4)	15.3	灰～灰白色
20	長頸瓶B	1床埋			埋	攪	(8.5)	(30.0)	19.1	12.4	灰～灰白色
21	甕		排				(24.8)	—	—	—	灰白色
22	提瓶					攪	(6.6)	(22.1)	(19.0)	—	緑灰～灰色
23	長頸瓶	1床埋	排				(10.0)	—	—	—	灰　色
24	長頸瓶	1床埋・攪	1床埋	排			8.4	—	—	—	灰～灰白色
25	提瓶	1床埋		排			(8.6)	26.6	(22.1)	—	灰白色
26	長頸瓶A			排・攪			8.0	21.5	18.2	—	灰　色
27	横瓶						11.9	29.6	35.8	—	緑灰～赤灰色

１…第１次、２…第２次、床…床面、埋…埋土、排…排水溝、攪…攪乱

No.は土器実測図と、写真図版に付した番号に一致する。

付載　中井１号墳出土の三累環頭大刀の青銅刀装具の材質について

はじめに

中井１号墳出土の三累環頭大刀は、遺物の重要性から、出土後早急に元興寺文化財研究所において保存処理が実施されていた。報告書作成にあたって、把頭金具の刀身への装着状況が他に類例のないもののように思われたため、奈良国立文化財研究所の肥塚隆保氏にＸ線透過撮影による内部構造の確認を依頼した。その際に、遺物が保存処理後であったため、定量分析はとりあえず除外して、非破壊で出来る蛍光Ｘ線分析による青銅器の材質分析も依頼した。

以下、その結果をまとめたものである。

Ｘ線透過撮影による腐蝕状態と把頭金具の内部構造

三累環頭把頭、鏥、鞘尻金具の外観上は、いずれも暗緑色の光択を有し、鏥には腐蝕は全く認められない。把鞘尻金には直径２～３mm程度の斑点状の孔蝕が見られ、ブロンズ病にかかっているサビが観察され、銷尻金具には直径１～８mmのより大きな孔蝕と、淡緑色のブロンズ病にかかっている盛り上ったサビがみられ、地金はかなり変質しているのではないかと思われる。

把頭金具の内部構造を観察するため平面と側面のＸ線透過撮影を行ったが、電圧140KV、透過時間５分を要してもなお不鮮明であったため、増感紙２枚を使用し、電圧140KV、透過時間10分要することによって、鉄板が銅金具に挟みこまれた状況がやっと確認できた。

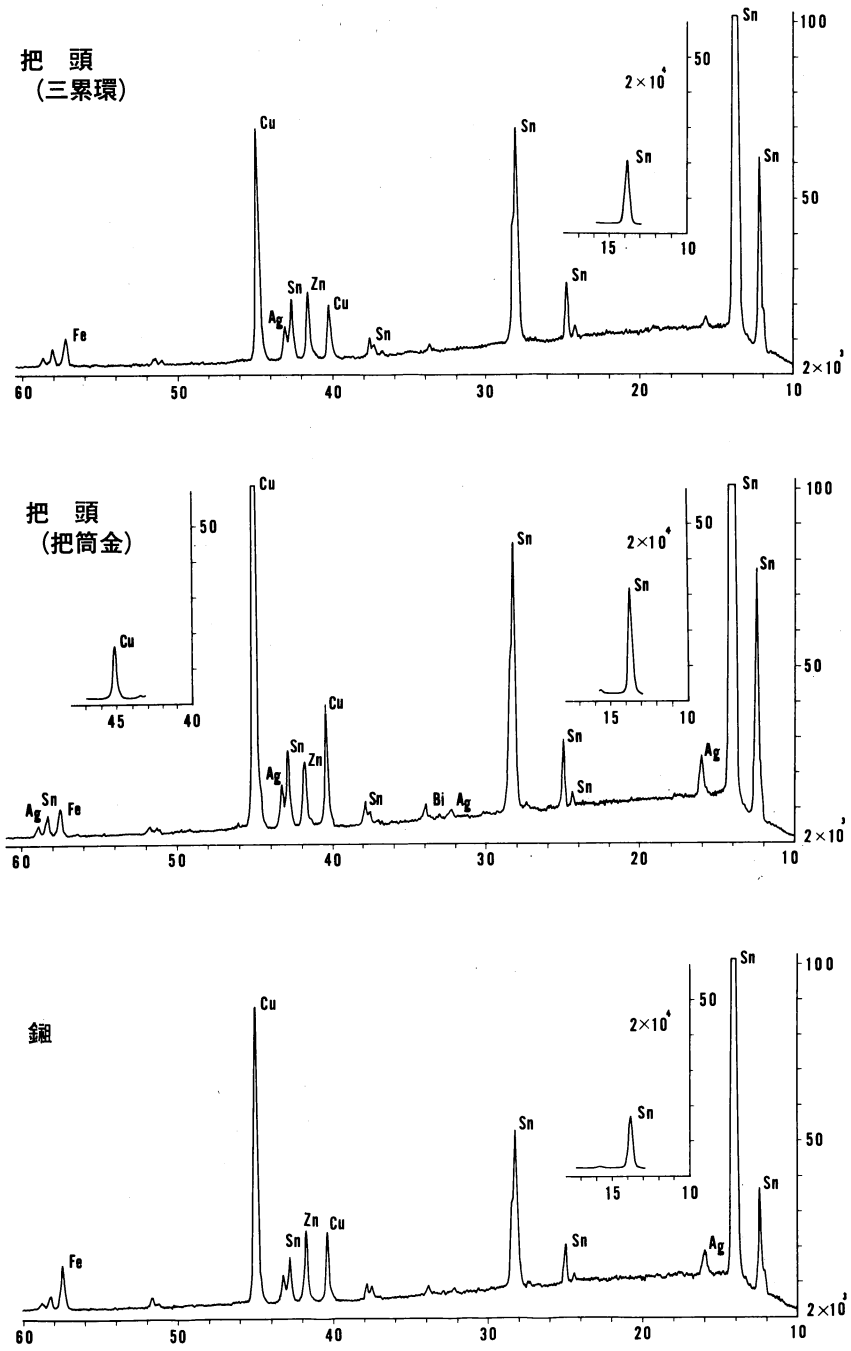
蛍光Ｘ線分析による定性分析

分析資料の平面部が少ないため、それぞれの裏、表２ケ所を測定して組成成分を調べた。その結果を第３表に掲げた。錫、銅、鉄、銀、鉛、砒素、ビスマス等の組成成分が認められる。また、補足調査としてチタンのマスクを置いての蛍光Ｘ線分析も行った。(第24図)それぞれの分析資料の測定は表面を研磨しない原状のままで行ったものであり、照射面積や、錆の状態など多少異なるが、相対的に同様なＸ線ピーク強度を示している。

名称＼成分	錫	銀	鉛	砒素	ビスマス	銅	鉄
把　頭(三累環)	＋＋＋	＋	tr	tr	tr	＋	＋
把　頭(把筒金)	＋＋＋	＋	tr	tr	tr	＋	＋
鏥	＋＋＋	＋	tr	tr	tr	＋	＋
鞘　　尻	＋＋＋	＋	tr	tr	tr	＋	＋

第３表　蛍光Ｘ線分析による組成成分

(測定条件　励起用管球　：　クロム　　分光結晶　：　フッ化リチウム
印加電圧　：　40ＫＶ　　検出器　：　シンチレーション・カウンター
印加電流　：　20ＭＡ)



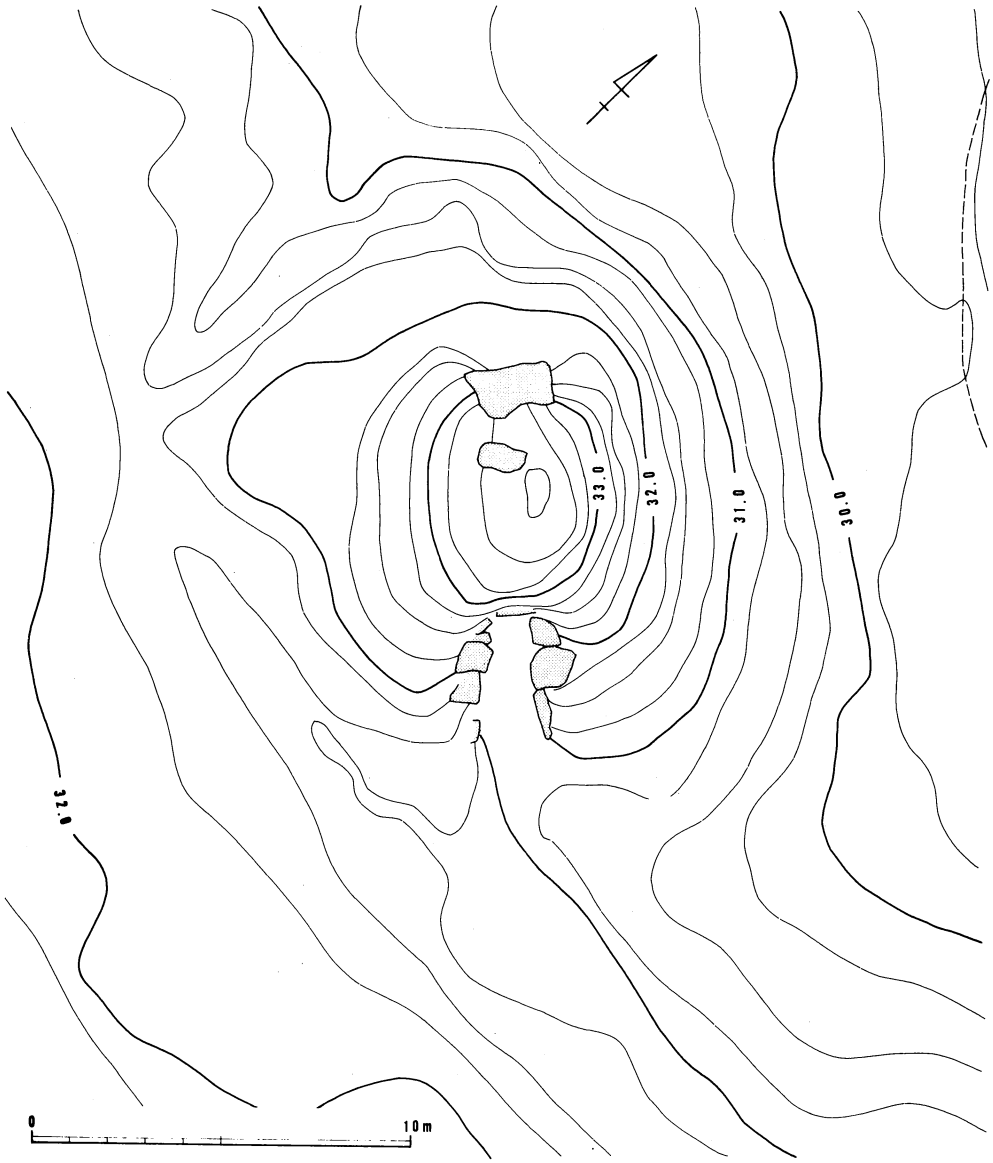
第24図　三累環頭大刀青銅刀装具の蛍光X線測定チャート　Full Scak : 2×10³

(測定条件　励起用管球 : クロム　分光結晶 : フッ化リチウム
印加電圧 : 40KV　検出器 : シンチレーション・カウンター
印加電流 : 20mA　走査速度 : 2°/分　マスク : チタン)

第４章　　中井２号墳の調査

第１節．古墳の位置

麓屑面上に立地する点は１号墳と共通している。１号墳が麓屑面東端に位置するのに対して、２号墳は中央近くに存在している。麓屑面は、平担面とは言え緩やかな傾斜を持っている。１号墳の立地する南東方向から北西方向へ向かっての緩斜面を呈し、比高差は12

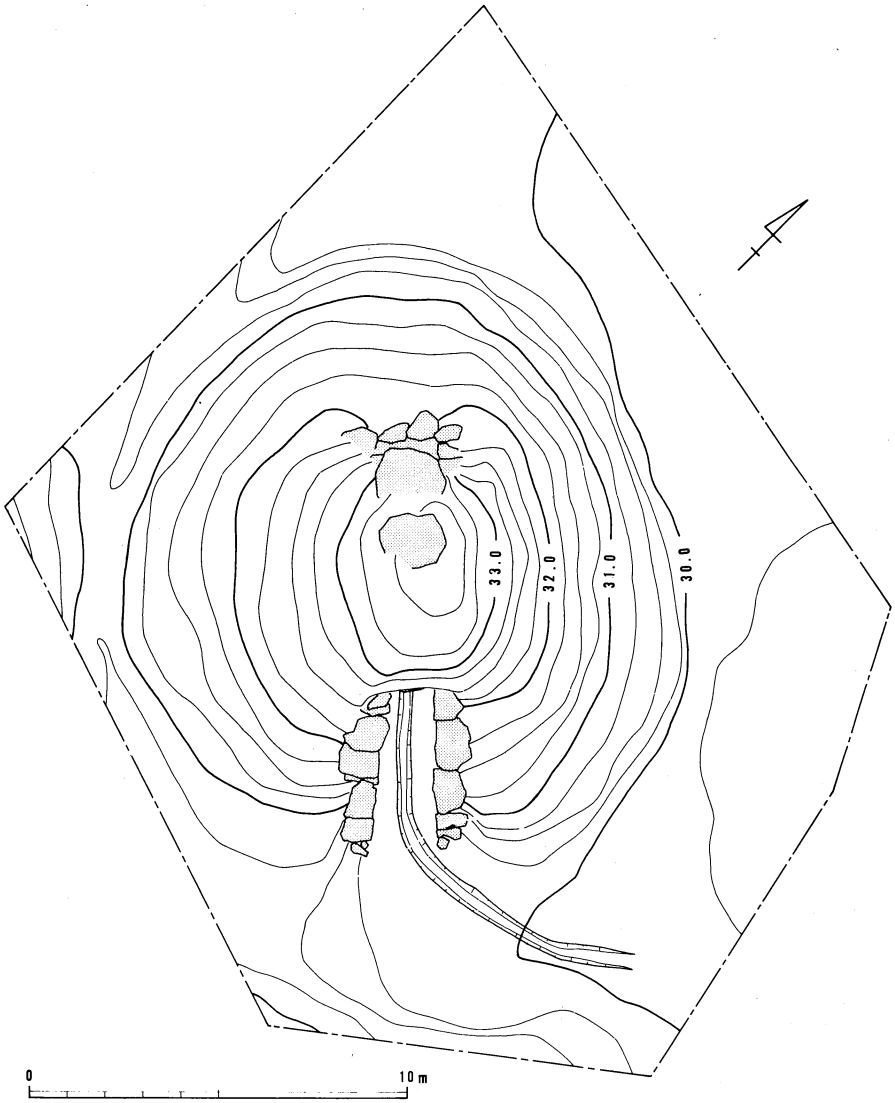


第25図　中井２号墳　墳丘測量図（調査前）

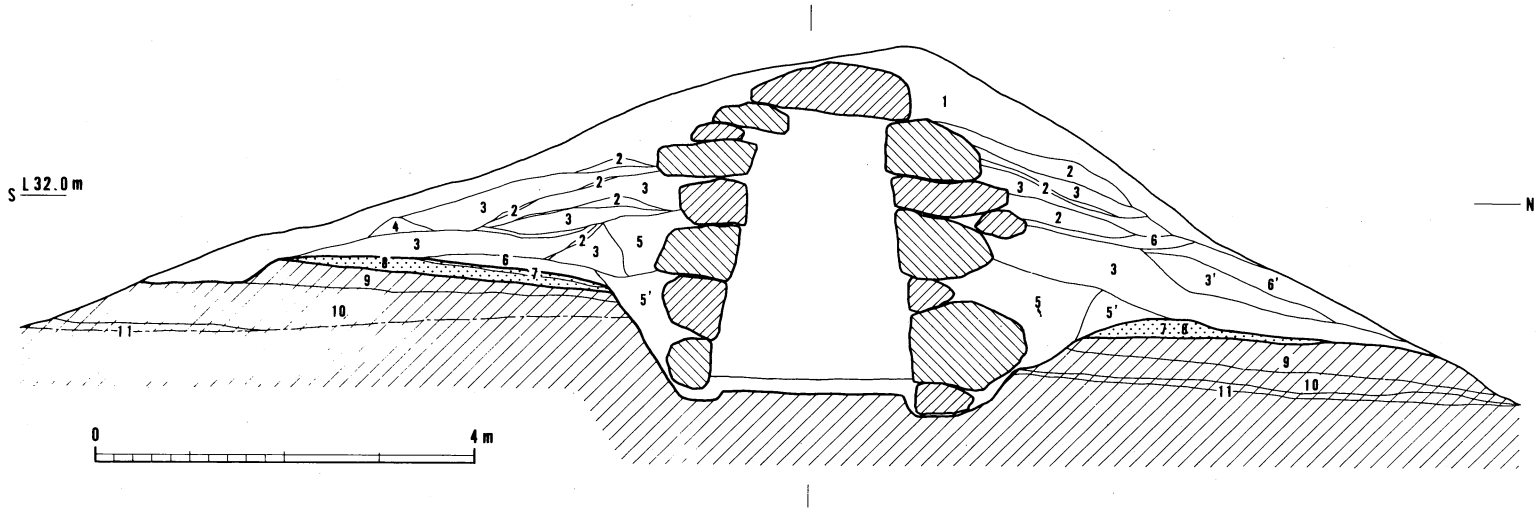
m である。最大の値で東西450m 、南北120m の平坦面で、2 号墳は東から約100m の北側地形変換線近くに立地している。平坦面の端部に構築するのは、古墳を際立たせる意味があるものと思われる。伐採後の状況でも遠くからでも、墳丘が認識出来る状態であった。現地形で、麓屑面と北側の隣接する水田で4.2m 、最も低い水田で7.1m の比高差を有する。

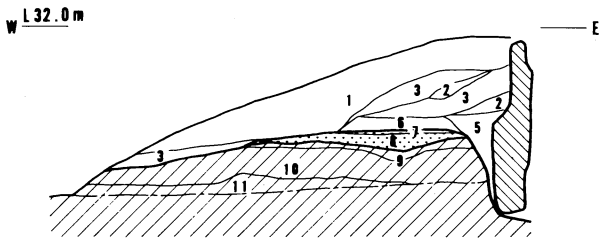
第 2 節．外形

古墳の位置でも記したように後期古墳ではあるが、古墳の立地条件からも墳丘は明瞭である。調査に入る前は、開墾に伴う排土が墳裾に盛られていたが、最も比高差の少ないと



第26図　中井２号墳　墳丘測量図（調査後）





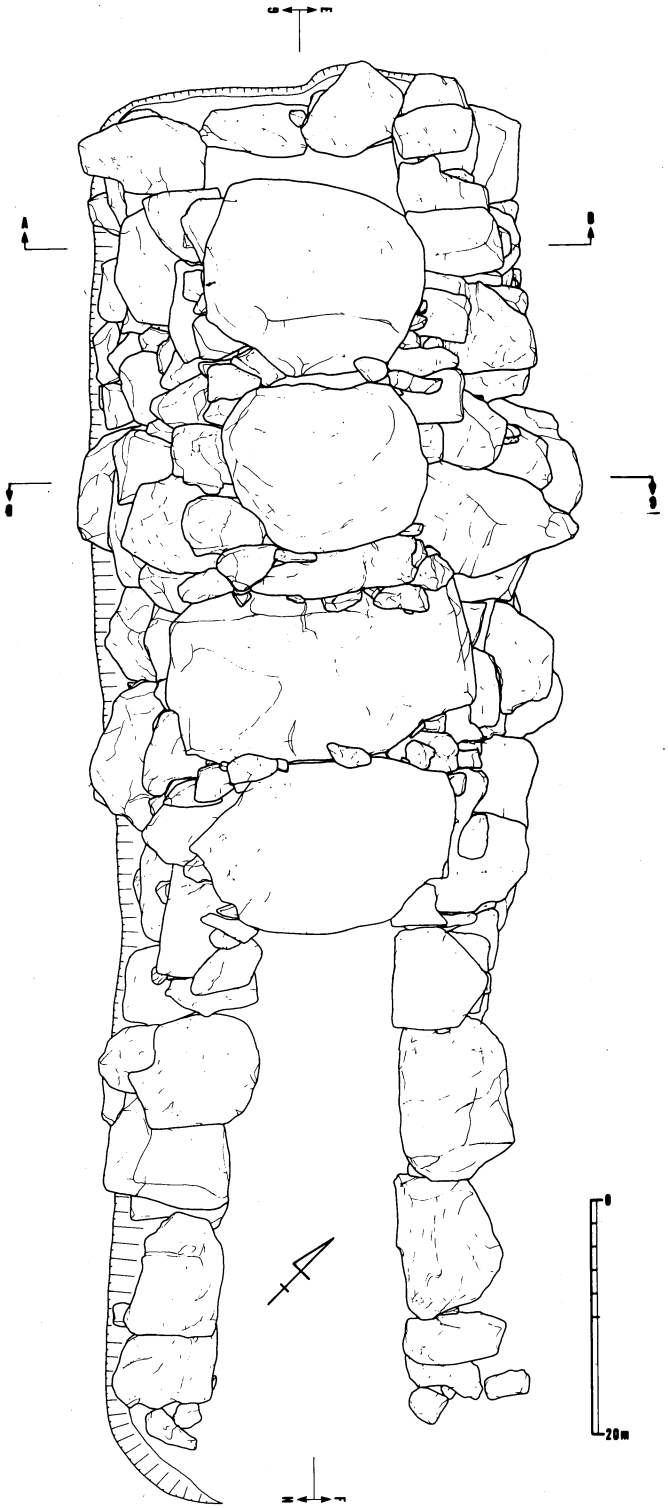
1．黄褐色砂質土　2．暗茶褐色有機質土　3．黄灰色砂質土
4．灰褐色砂質土　5．暗黄灰色砂質土　5．暗黄灰色砂質土
6．黄褐色砂質土　6．黄褐色砂質土　7．暗褐色砂質土(旧表土)
8．暗褐色砂礫土　9．暗灰褐色砂質土　10．黄灰色砂(礫)土
11．黒色土

第14図　中井２号墳　土層断面図

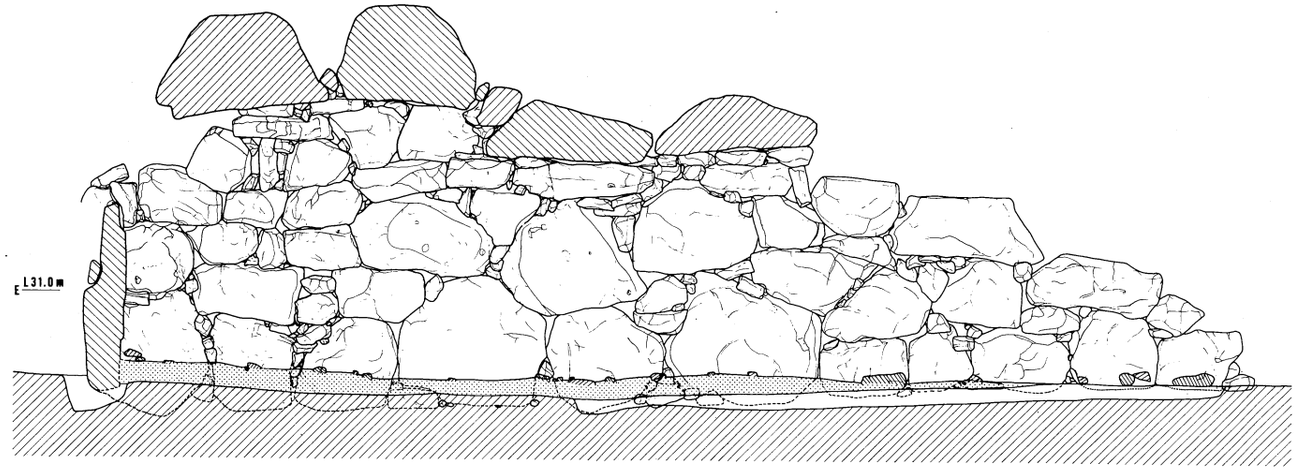
ころでも2.75m を測るほどで、墳丘の高さは十分にある。天井石の一石の上面の一部と奥壁・羨道部分が欠失しているが、保存状態は良好と言えよう。墳丘は、平坦面に立地しているため、流失は十分に考えられるが、自然の堆積はほとんど考えられず、人工の排土（開墾時の）に限られている。

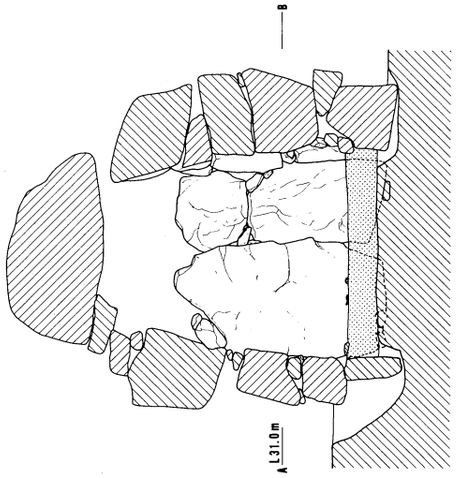
古墳の立地する基盤は、南から北へ向けての援斜面である。そのため、南側の方が比高差が少なく、北側の方が大きい。調査終了段階の数値でみると、南で2.8m 、北で3.7m を測る。墳丘南半は、斜面に浅い掘り割りを施し墳域を画しているので、墳裾を決定することは容易であった。しかし、北半は土層観察から墳裾を決している。最大径20m 、最小径17m の円墳で、高さの最大値は3.5mである。

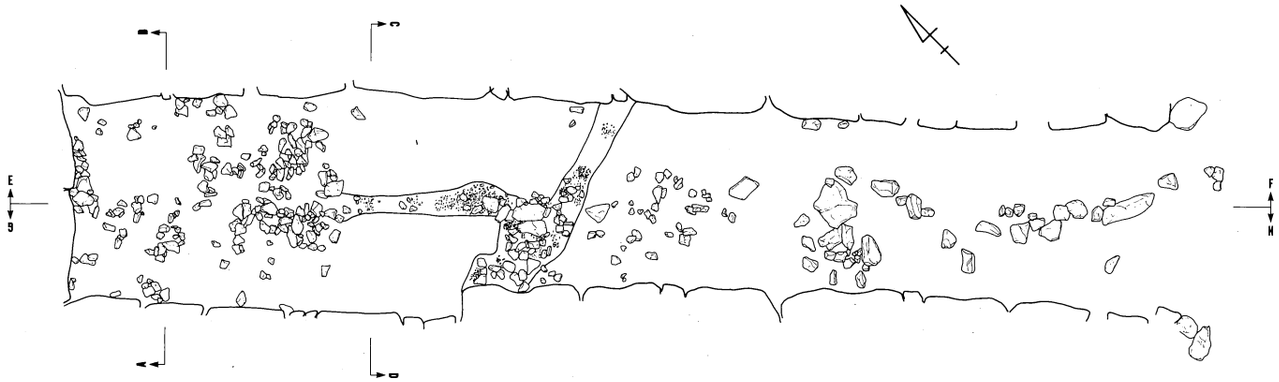
墳丘は、山腹に立地する古墳に比べて自然地形の利用が少なく盛土量が多い。墳丘の高さは2.9 mを測る。まず、墳裾を

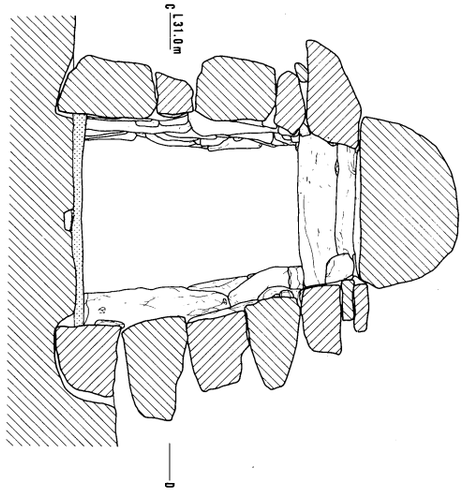


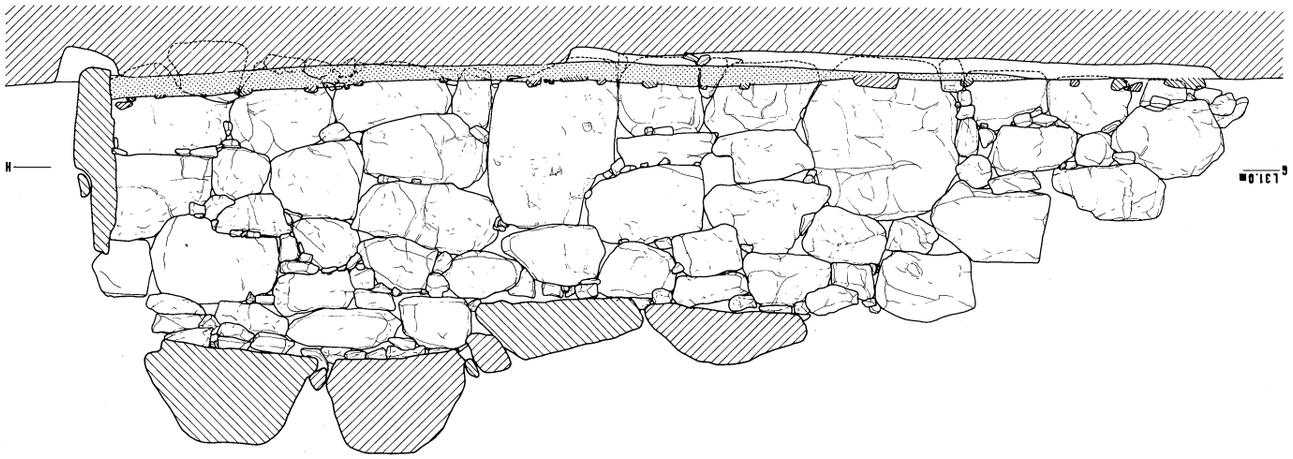
第28図　中井２号墳　石室上面図


E L31.0m
F L31.0m
G L31.0m
H


B
A L31.0m


E
F
H


C L31.0m
D


H
G L31.0m

0
2m

画したのち緩斜面に墓壙を掘り込み、基底石から３石目前後までを積み、最初の盛土である礫を多く含む暗黄灰色土を裏込めとしている。南側の標高の高い方は、旧表土の上に礫を含まない黄褐色砂質土を硬く突き固めており、その上に裏込め土が盛られている。

その上は、基本的に礫を含む地山土である黄灰色土と黒色有機質土を互層になるように盛っている。側壁上面まで互層になった墳丘築成土を使っている。側壁上部から天井石が隠れるまでは同じ覆土で行っており、硬くしまった層である。天井石の露出部分があることから同一層が流失したものと思われる。墳丘は、土層断面の観察から天井石を覆う程度であったろうと思われる。

第３節．内部主体

主体部は横穴式石室で、播磨では最大規模の右片袖式の石室である。石室は、奥壁上部と羨道部の羨門側の半分の天井石を欠失しているものの、石室の遺存状態は良好である。ただ、古墳の規模が大きく平坦面に際立っていることから、古くから「ツカ」の認識が高く、人の石室への出入りがあり床面まで手が加えられているようである。それは、敷石の遺存度が悪いことや遺物の出土状態からも明らかである。

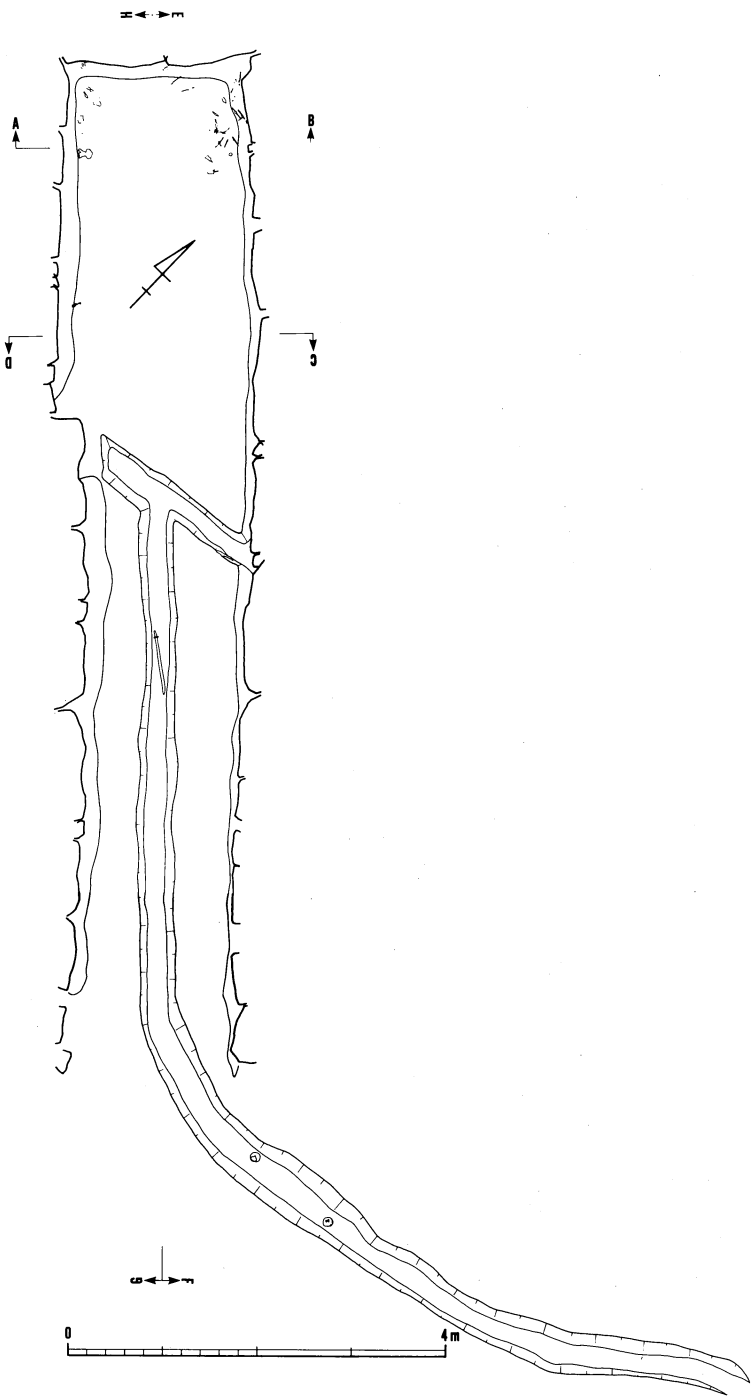
石室の規模は、玄室の長さ3.8m 、最大幅2.1m 、最大高2.8m で、羨道の長さ7.3m 、最大幅1.6m 、最大高2.1m で、玄門の幅1.8m 、高さ2.3m 、羨門の幅1.8m を測る。全長11.1m で袖は0.3m を測り、最大幅を玄門部にとるプランをしている。玄室のプランは、奥壁を上辺とする台形となっているため、袖側の右側壁のみが開くという特異なタイプとなっている。また、奥壁と羨門の幅の数値が近似しているのも一つの特徴である。羨道のプランも玄門から羨門へ緩やかに広がっている。

石材は、向山山塊ならびに中井周辺で採取される石材を使用している。大半は、角礫岩と通称觜崎石と呼ばれる流紋岩質凝灰岩の２種類である。安山岩質を含む礫岩など細かな変化はあるが、基本的には２種の石材である。栗石には両岩を構成する鉱物である安山岩・頁岩・チャートも使われている。ただ、石材の使い分けはしていないようで、大きさに適合した石材を個々に使用したものと思われる。角礫岩に対して觜崎石は偏平なため、奥壁をはじめ高さを必要とする位置に据えられている。また、玄門の見上げ石にも利用されている。

石材の違いは、壁体構造に変化を与えている。石材の特性の違いによるものであるが、奥壁を除いて觜崎石は横積みとなっている。角礫岩は、厚みのある幅と高さ・厚さの数値の近い重量感のある石材であるため、側壁最奥部の石や袖石に使われており、縦積みに近い構築である。

石室構築にあたっては、まず緩斜面上に墓壙を掘っている。北側の低い方の一部を含ん

だ最大値13.5mの長楕円形に掘り下げ、石材を置く部分をさらに溝状に掘り込む。この時点で右側壁に関して言えば、平面プランを決定しているはずで、袖石と羨道中央の2石については他の基底石よりも一段下げて掘っている。この2石を据え、両方に基底石を置き石室を築いていったものと考えられる。袖石・羨道中央の石を基点に構築したもので、ともに他の部分の2石目よりも高く、3石目が袖石などにかかっている。その後は、横積みを基本として石室をつくっている。斜面の低い方にあたる左側壁には縦横積みの石材がなく、右側壁のように明らかな基準となる石材が見られない。

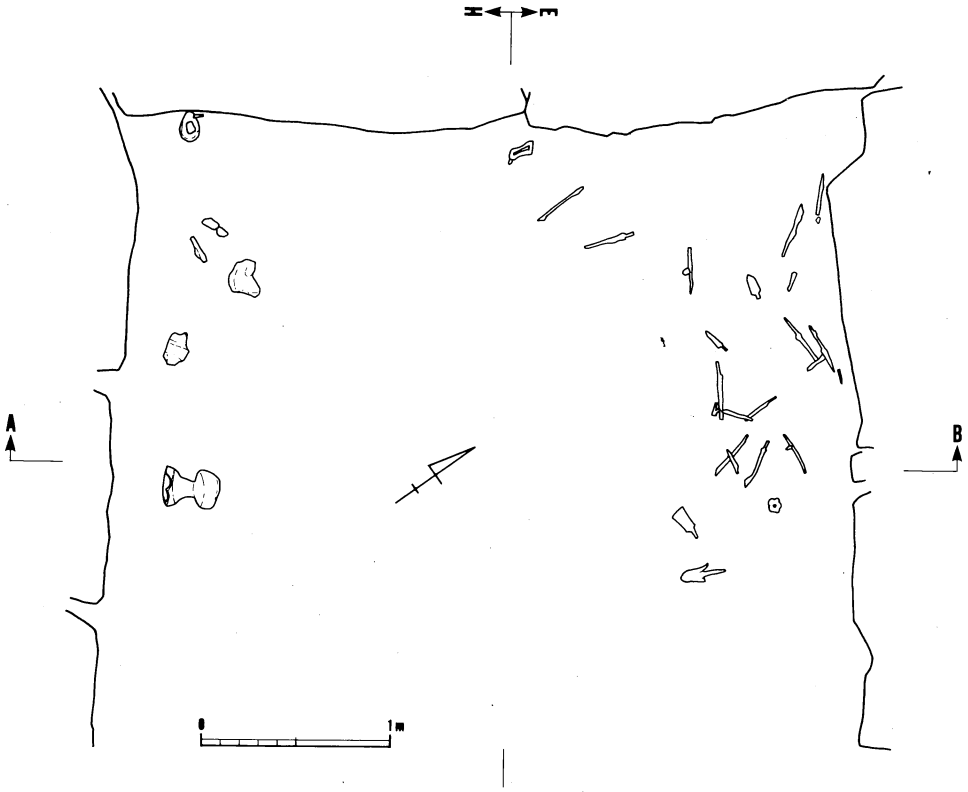


第30図　中井2号墳　第1次床面実測図

両側壁間に明らかな構造の違いが指摘できる。奥壁は、やや偏平な石材で側壁の後に築いている。石室は基底石を並べてから２石目以上を積んでいる。

第４節．遺物出土状況

後世の攪乱を受けているが、埋葬面は２面確認している。第２次床面は旧態を保っておらず、遺物の出土も原位置とは思えない。第１次床面は、排水溝を有する埋葬面で、排水溝内と奥壁前方部しか残存していなかった。排水溝からは、羨道部で大刀が１振、石室前方の墳裾を巡る溝内から須恵器（短頸壺・瑞）が出土している。大刀は、羨道中央より玄門寄りで玄門から2.5m の位置から切先を羨門側に向けて出土している。鍔も残存している大刀で、排水溝の主軸に平行ではなく、棟を南にして切先が排水溝北壁に接するように出土している。溝底に着いていることからも、通有の副葬品とは考えられず、排水溝に伴った祭祀関係の遺物と考える方が妥当であろう。排水溝内の須恵器は、羨門を出て溝が北へ曲折したところに約１ｍ離れて南側（羨門寄り）に短頸壺、北側に瑞が出土している。瑞は、頸部より上を欠失しており当初（埋葬時）から下半部のみの個体である。須恵器２個体も意図的に埋置されたものと思われ、性格も大刀と同種の性格と考えられる。



第31図　中井２号墳　第１次床面遺物出土状況

奥壁前方では、主に鉄器が出土している。北壁側では金箔の着いた飾金具・刀子と鉄鏃がまとまって検出されており、広根・細根の両タイプが混在している。奥壁沿いからは馬具（鉸具）が出土している。南壁側では須恵器（瑞）と馬具（鉸具）が出土している。鏡板・銜・責具の３点の馬具は床面上ではあるが、原位置を僅かに移動している。頭椎(42)・兵庫鎖（38）・刀子（25）・耳環（30）は石室攪乱土から出土している。

玄門手前からも鉄器が１点出土している。残存長19.2cmの幅の広い刀である。原位置を保っていないものと思われ、第２次床面か第１次の際の追葬時に掻き出されたものと思われる。他の遺物も同様に原位置を保っていない。銀象嵌の施された金具（44・45）・大刀（43）・耳環（31）は石室外から検出されており、追葬時に掻き出されたものと思われる。

第５節．出土遺物

出土遺物には須恵器、鉄器、銅製品がある。１号墳と同様、副葬時の状況を保っている遺物は少なく、多くは埋土や、攪乱土中の出土で、異なる地点で出土した遺物が相互に接合する場合が認められた。

１．須恵器

古墳時代の土器は１号墳より更に少なく、器種の確認できるものは、19個体である。器種には坏、蓋、高坏、瑞、壺、甕などがある。１号墳に比べると甕が多いのが特徴である。また、瑞が３個体とやや多い。

坏（４、５）

坏は２個体と少ない。平底状の底部から直線的にのびる体部に内傾する立ち上がりをつけるもの（４）と、体部が彎曲し、受部が外方に屈曲するもの（５）がある。いずれも底部外面はヘラ切りのまま不調整で、内面には仕上げナデを施している。

蓋（１～３）

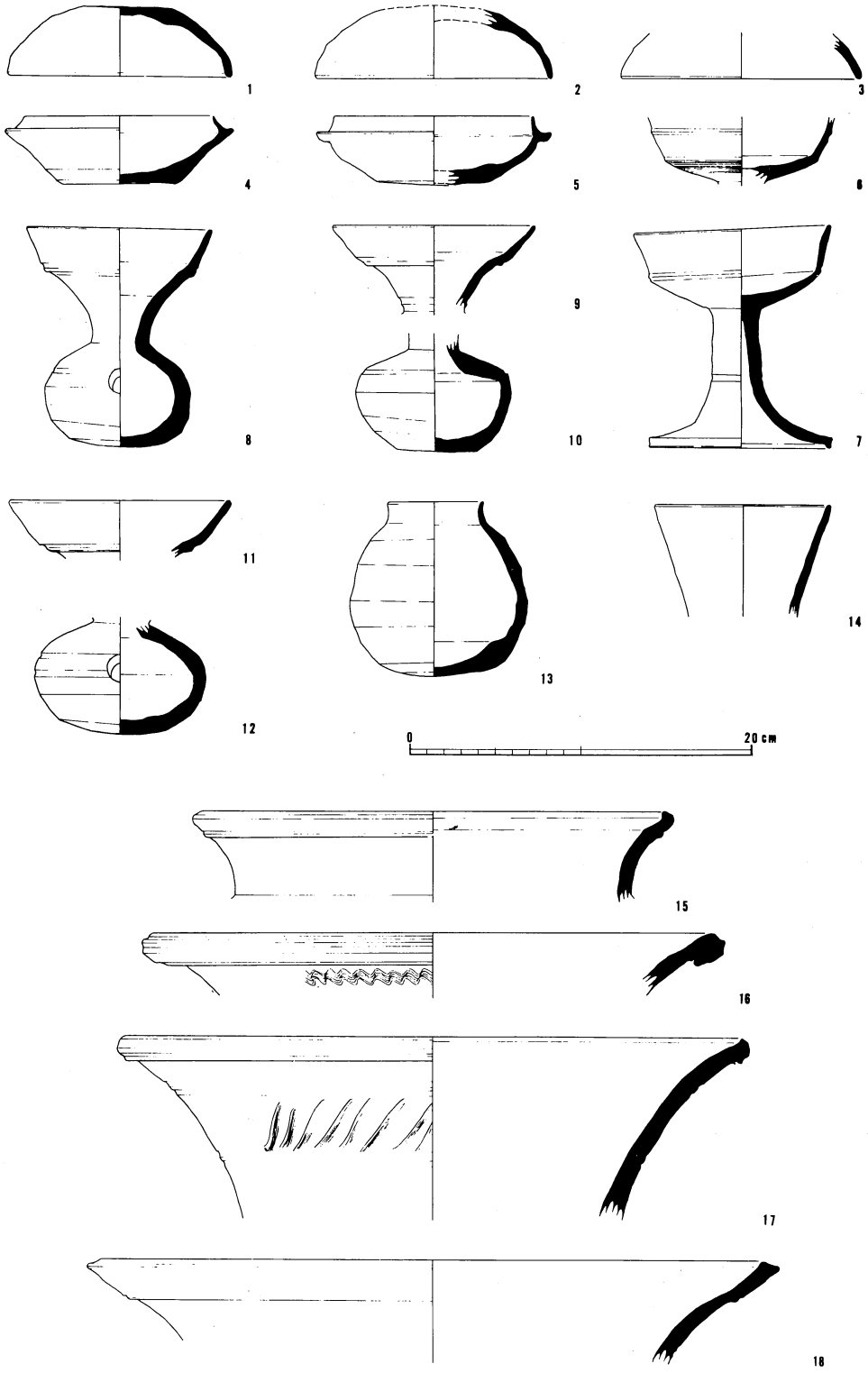
蓋はいずれも坏とセットになるものである。偏平な天井部から緩やかに内彎する口縁部をつくる。口縁部で僅かに内側へ屈曲するものと、しないものがあるが、すべて端部は丸くおさめる。天井部の残存するものは外面はヘラ切りのまま不調整である。

高坏（６、７）

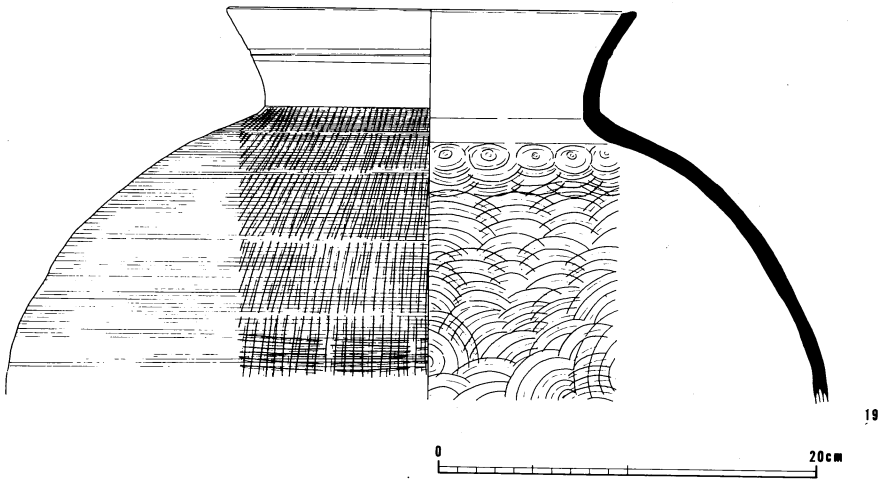
高坏は２個体あるが、いずれも無蓋高坏である。口縁部と底部の屈曲は大きく、６は底部にカキ目を施している。７の脚部は長脚であるが、透かしは無く、中位に１条の凹線があるだけである。脚端部は下方にのみのび、面をつくる。

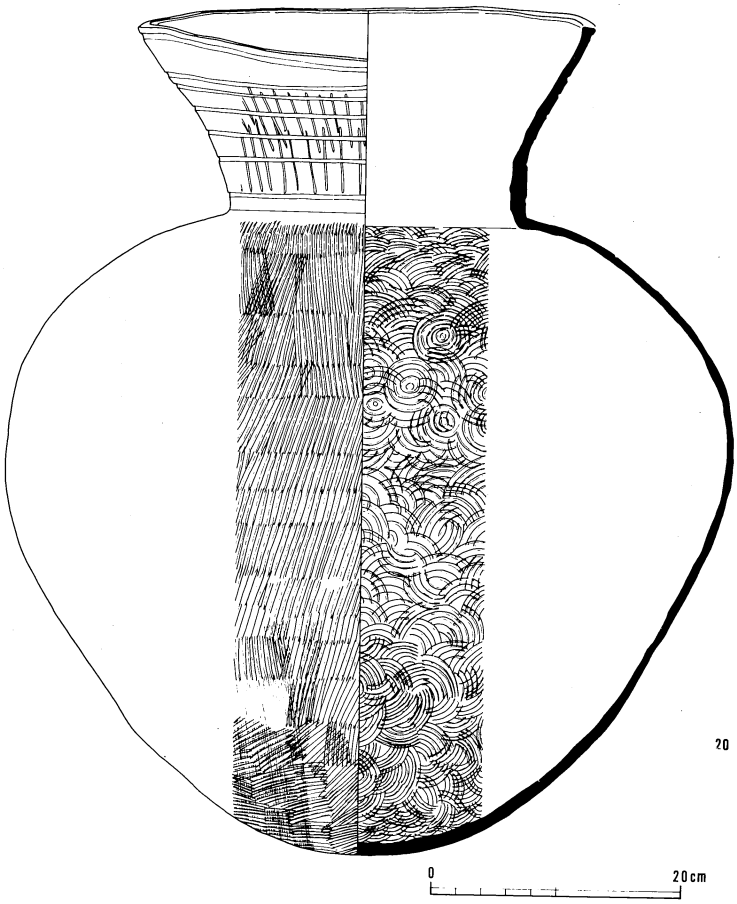
瑞（８～12）

９と10、11と12は接合しないが、同一個体の可能性が高い。いずれも口頸部の長大化し

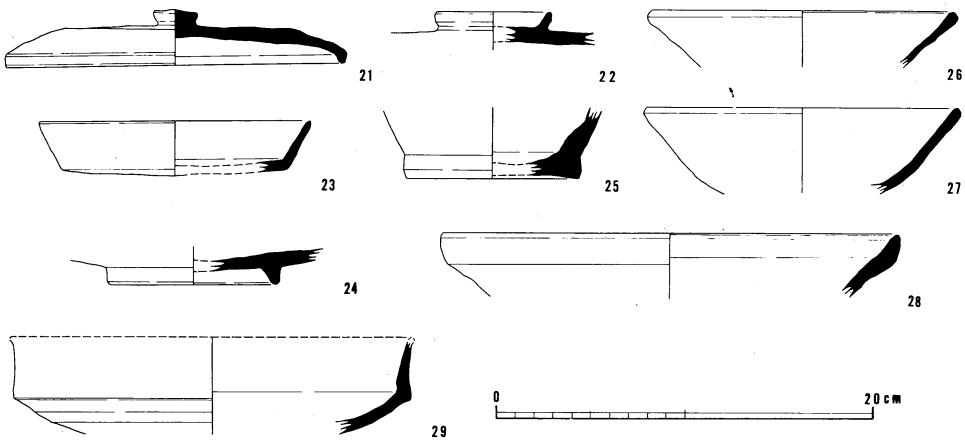


第32図　中井２号墳　須恵器実測図(1)





第33図　中井２号墳　須恵器実測図(2)



第34図　中井２号墳　その他の土器実測図

た小型瑕で、段をなす口縁部をつくり、境界には凹線を巡らしている。体部は肩の張るもの（10）と、球形のもの（８、12）があり、円孔上部に１条の凹線を巡らしている。前者の底部はヘラ切りのまま不調整で、後者は回転ヘラケズリされている。

長頸瓶（14）

口縁部部片であり、器種は明らかでないが、長頸瓶の口縁部であろう。

短頸壺（13）

体部の器高が胴径を上回り、最大径が胴部下半部にある。口縁部は短いが、やや外反する。底部外面は回転ヘラケズリしている。

甕（15～20）

体部の遺存しているものは少なく、口頸部だけでは壺との区別が難しいが、一応、甕と考えておきたい。

口頸部の形態は多様で、すべて異なっている。15は中型甕の口頸部で、外反する口縁端部を上方に肥厚させ、外面に１条の凹線を巡らしている。16は大きく外反する口縁端を折り返し肥厚させ、端面に２条の凹線を巡らしている。口頸部には櫛描き波状紋が巡らされている。17は大きく外反する口頸部をもち、端部を上方に僅かに肥厚させている。外面には細い凸帯を巡らしている。頸部には２条単位の凹線間に波状紋を簡略化したとみられるＳ字状櫛描き紋で飾っている。18は外反する口頸部に段をつくって外上方にのびる口縁部をつける。19は端部を肥厚させない甕で、体部外面はカキ目を施す。20は唯一全形の判る甕で、口縁部はやや内彎気味に立ち上がる。端部は僅かに外方に肥厚する。口頸部には間隔の不揃いな凹線が、６条巡らされ、上下２段にヘラ状工具によって沈線を交互に描いている。

2．その他の土器

古墳に伴う土器以外に、石室内や墳丘周辺から再利用時に遺されたとみられる遺物が10点ばかり出土している。第34図のように奈良時代から平安時代末ないし鎌倉時代初頭の、比較的長期にわたる。

21はほぼ完形の蓋である。奈良時代前半であろう。24は高台径や底部の形状からみて盤であろう。25は瓶底部片とみられ、底部はヘラ切りである。29は類例が多くないが、高坏受部であろう。丁寧な整形が行われており、21と同時期か。26、27の椀は前者が備前、後者は東播系の製品とみられる。28は神出窯産の片口鉢であろう。

3．鉄器

2号墳では、43点もの鉄器が出土している。馬具類では、素環鏡板付轡1点、飾金具1点、銜1点、鉸具3点、兵庫鎖1点、不明鉄器1点があり、武器類では、頭椎大刀を含む直刀3振、刀子5点、鉄鏃24点などがある。またその他耳環2点も出土している。

鉄鏃（1～24）

形態から6種類に分かれる。

（a）篦被両丸造腹抉柳葉式のもの(1)が出土しているだけである。現長11.4cm、鏃身残存長5.7cm、篦被長5.9cm、茎には矢柄の痕を残し、桜皮の緊縛痕がある。棘状突起はないものと思われる。

（b）広峰両丸造篦被三角形式（2）が出土している。現長9.85cm、鏃身長5.0cm、篦被長2.85cm、茎に矢柄の痕を残し、桜皮の緊縛痕がある。

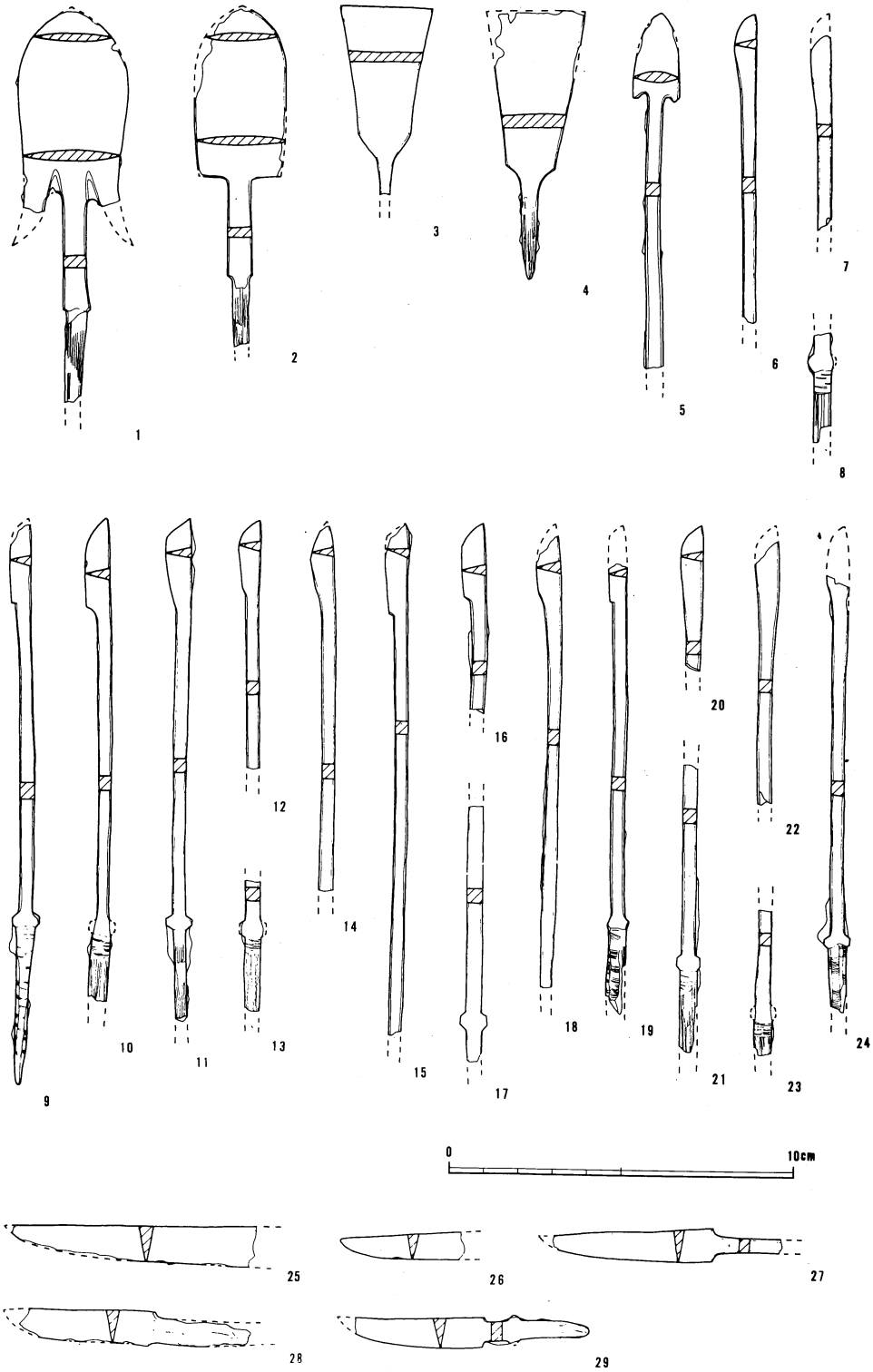
（c）方頭広根斧箭式で、2点（3・4）出土している。（3）は、現長5.6cm、最大幅2.7cm、鏃身長4.5cm、断面は長方形をしている。茎に矢柄の痕は残っていない。（4）は全長7.8cm、鏃身長4.9cm、断面は長方形をしている。ほぼ残存しており、わずかに刃先が欠けているだけである。茎には矢柄の痕を残し、桜皮の緊縛痕がある。

（d）狭峰両丸造(棘)篦被腹抉三角形式(5)が出土している。現長10.3cm、鏃身長2.55cm、現存篦被長7.76cm。

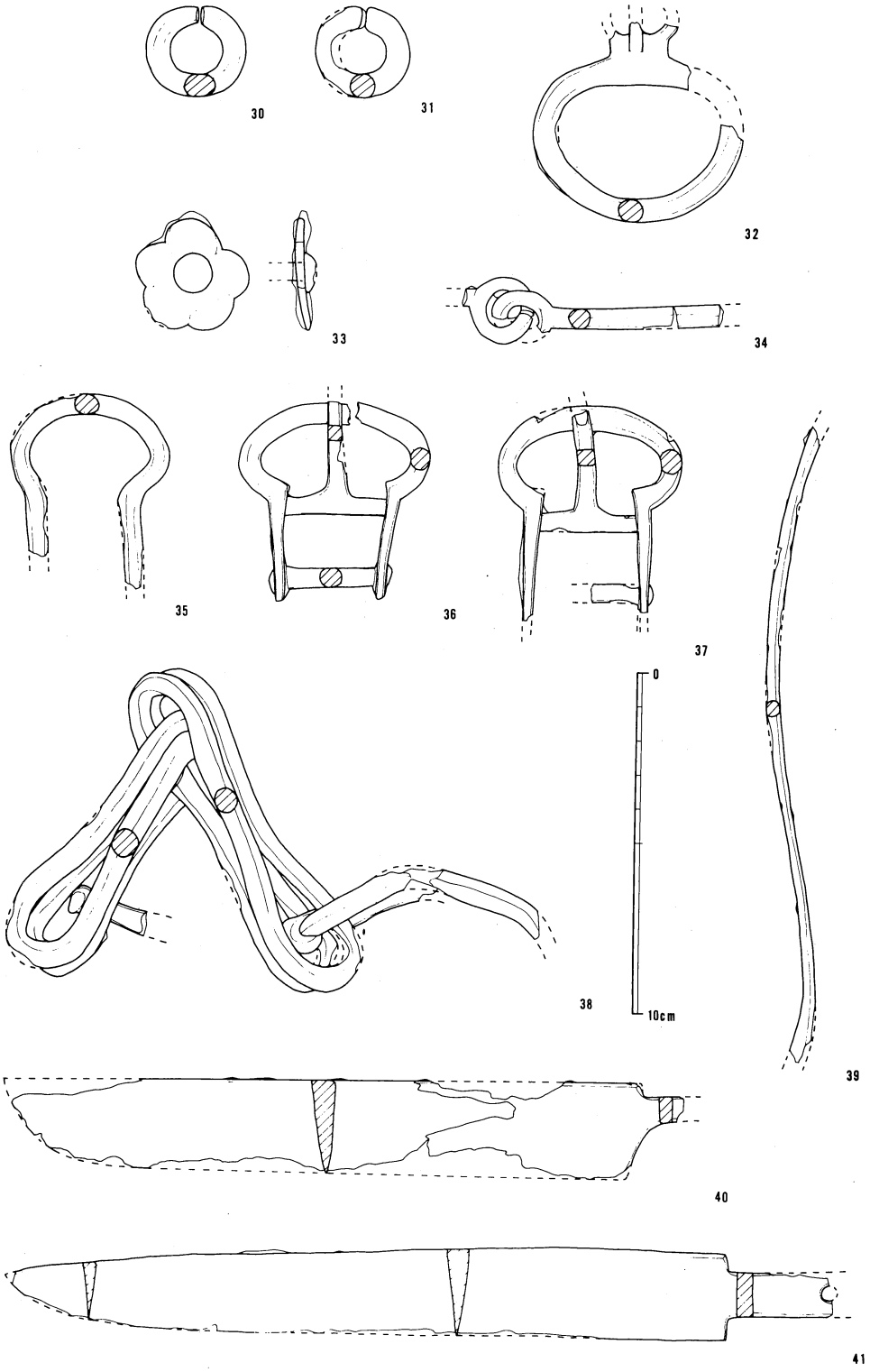
（e）棘篦被片関片刃箭式で、7点(9・10・12・15・16・19・24)出土している。ほぼ完形に近い（9）をみてみると、全長16.45cm、鏃身長2.45cm、篦被長9.40cm、茎には桜皮の緊縛痕が残っている。従って完形でない他のものも、おそらく全長は16cm前後あったものと思われる。

（f）棘篦被端片刃箭式で、7点（6・7・11・14・18・22）出土している。

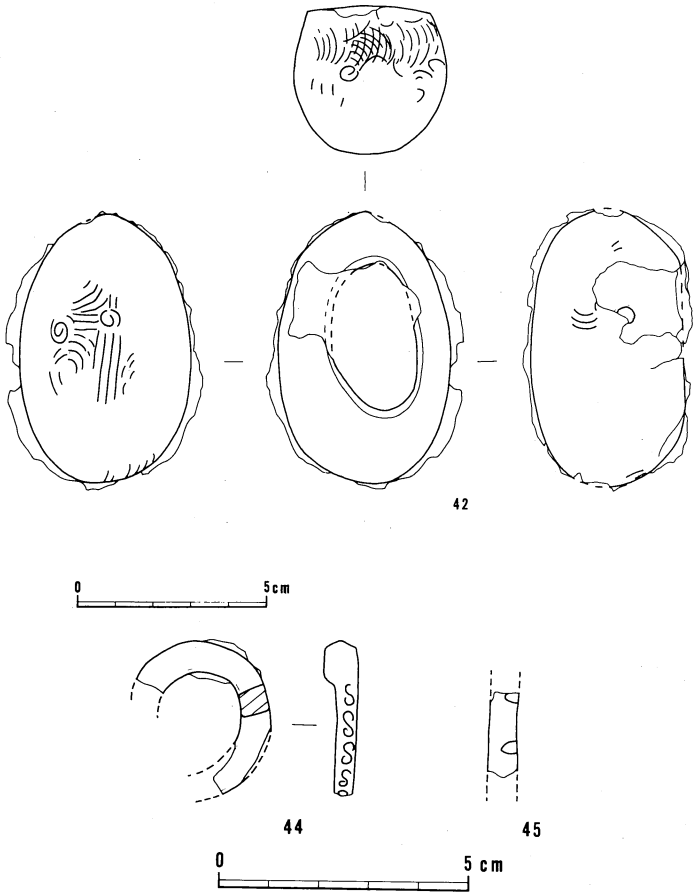
（e）・（f）と分類しているが、（f）の鏃身には不明瞭な所があり、片関がついていたとも考えられるため、（e）の可能性大である。

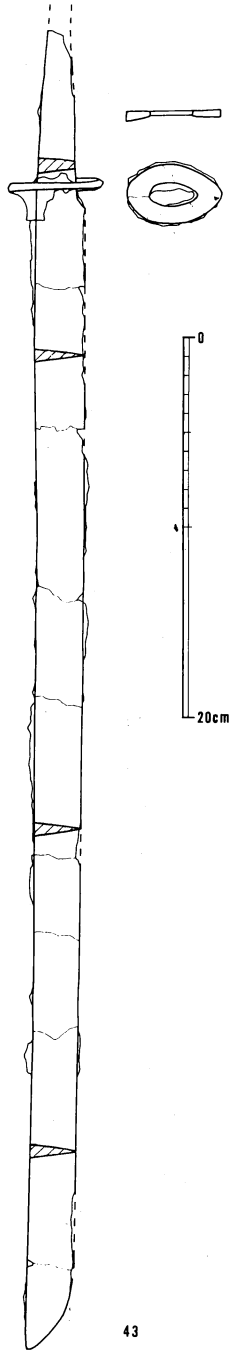


第35図　中井２号墳　鉄器実測図（1）



第36図　中井２号墳　鉄器実測図　(2)





第37図　中井２号墳　鉄器実測図（3）

刀子（25～29）

５点出土しており、うち２点（25・26）は刃先のみである。

（25）は、現存刃長7.2cmと長く、５点ある刀子の中では、完形品になると一番長い刀子である。（28）は現長7.2cm、刃部長4.4cm、両関で関の部分から木質が付着している。茎は2.8cm残存している。（29）は先端が少し欠損している以外、ほぼ原形をとどめている。現長7.3cm、刃部長4.3cm、茎部長3.0cmで茎には木質が残る。共に刃部の断面は二等辺三角形を呈しており、棟幅0.3～0.4cmを測る。

次に馬具８点について見ていくことにする。

轡（32）

素環鏡板付轡で１枚残存している。この素環鏡板は6.1×5.9cmの楕円形の環体に、鉸具状になっている立聞をつけたものである。立聞の部分は半分以上欠損してしまっている。

銜（34）

（32）の素環鏡板と組み合わさるものと思われる。二連式でくくみの側だけが残存し、全長は不明である。

飾金具（33）

円形の頭のまわりに五花形の座金具をもつ3.3×3.5cmの大きさのもので、全体に金箔がめぐらされている。

鉸具（35～37）

（35）は刺金をもたないつくりのもので、径0.6cmの鉄棒を曲げて輪金とするが、側辺にわずかにくびれをつくる。現長5.7cm、幅4.6cmである。（36）・（37）は共に「T」字形の刺金をもつもので、両端を細くした鉄棒を各々所定の孔に差し込んで叩き留めたものである。（36）は、全長5.8cm、輪金の環部の幅5.6cm、断面は径0.6cmの円形。（37）は、現長6.3cm、輪金の環部の幅5.3m、断面径0.7cmの円形。共に「T」字形の刺金の先端欠損している。

兵庫鎖（38）

1単位約10.75cm・10cmを測るものと2連残存する。その断面の厚さ0.7cm、遊環部径2.8cm。10.75cmを測る鎖の方に現存長7.7cmの長方形の断面をもつ鉸具が残存する。またもう一方の鎖には現存長2.5cmを測る鉸具の一部がみられる。

不明鉄器（39）

現長18.55cmの細長い鉄器である。用途その他不明である。

耳環（30・31）

（30）は現存状態が良好で、全体に金箔が施してあり、金環であることがわかる。径は0.3cm弱で、厚みのある重量感あるものである。一方（31）の耳環は現存状態があまりよくなく、全体の半分の箔が剝がれ緑青がふいている。しかし観察してみると金箔が残っており、金環であることがわかる。径は0.3cm弱。

直刀（40・41・43）

（40）は現長19.4cm、先端は若干欠損している。刃部長18.7cm、断面は二等辺三角形を呈しており、中央部で刃身の幅2.85cm、厚さ0.7cmを測る。関は棟と刃の両側につき、刃側は斜めに切りこまれている。茎部分は1.2cmしか残存しておらず、関近くで幅0.75cm、厚さ0.4cmの長方形をなす。目釘の有無は茎部分残存わずかのため不明である。

（41）は刃部がほぼ完形に近い形で残存する。現長24.2cm、刃部長21.2cm、断面は二等辺三角形を呈している。切先近くでは刃身の幅1.7cm、厚さ0.4cm、中央部で幅2.6m、厚さ0.7cmを測る。関は棟と刃の両側につき、共に明瞭である。茎部分は3.0cm残存しており、関近くで幅1.3cm、厚さ0.4cmの長方形をなす。また関から2.7cmの所に径0.4cmの目釘の半

分が見られる。

(43) 鉄鏃に銹が付着しており、遺存状態は良いとはいえない。現長69.4cm、刀身は長さ60.3cm、断面は二等辺三角形を呈しており、鎬はもたず、ふくらみもない。切先近くでは、刀身の幅2.4cm、厚さ0.7cm、中央部で幅2.45cm、厚さ0.7cm、関近くで幅2.7cm、厚さ0.6cmを測る。関は棟と刃の両側につくが、棟側はあまり明瞭でなく、刃側は斜めに切り込まれている。鍔も銹の付着により、遺存状態はよくないが、原形はとどめている。長径5.0cm、短径3.1cm、厚さ0.3〜0.5cmの板状をしている。茎部分は長さ8.8cm、最も残りのよい関近くで厚さが、棟側0.8cm、刃側0.4cm、幅2.0cmの台形をしている。また目釘の有無は不明である。

一方銹の付着が著しい頭椎(42)は、目釘と把間にかぶせる穴により、かろうじて判別されたほどである。またこれは象嵌をもつものであるが、出土した状態では当然、完全に銹におおわれていたため、X線撮影によって初めて亀甲繋文状の象嵌が施されているのがわかった。支点環文を3本の平行直線文がつなげている形であろうと思われる。4.05×7.35cmを測る。

その他、形にならないもの、不明のものを最後にまとめて書いておく。

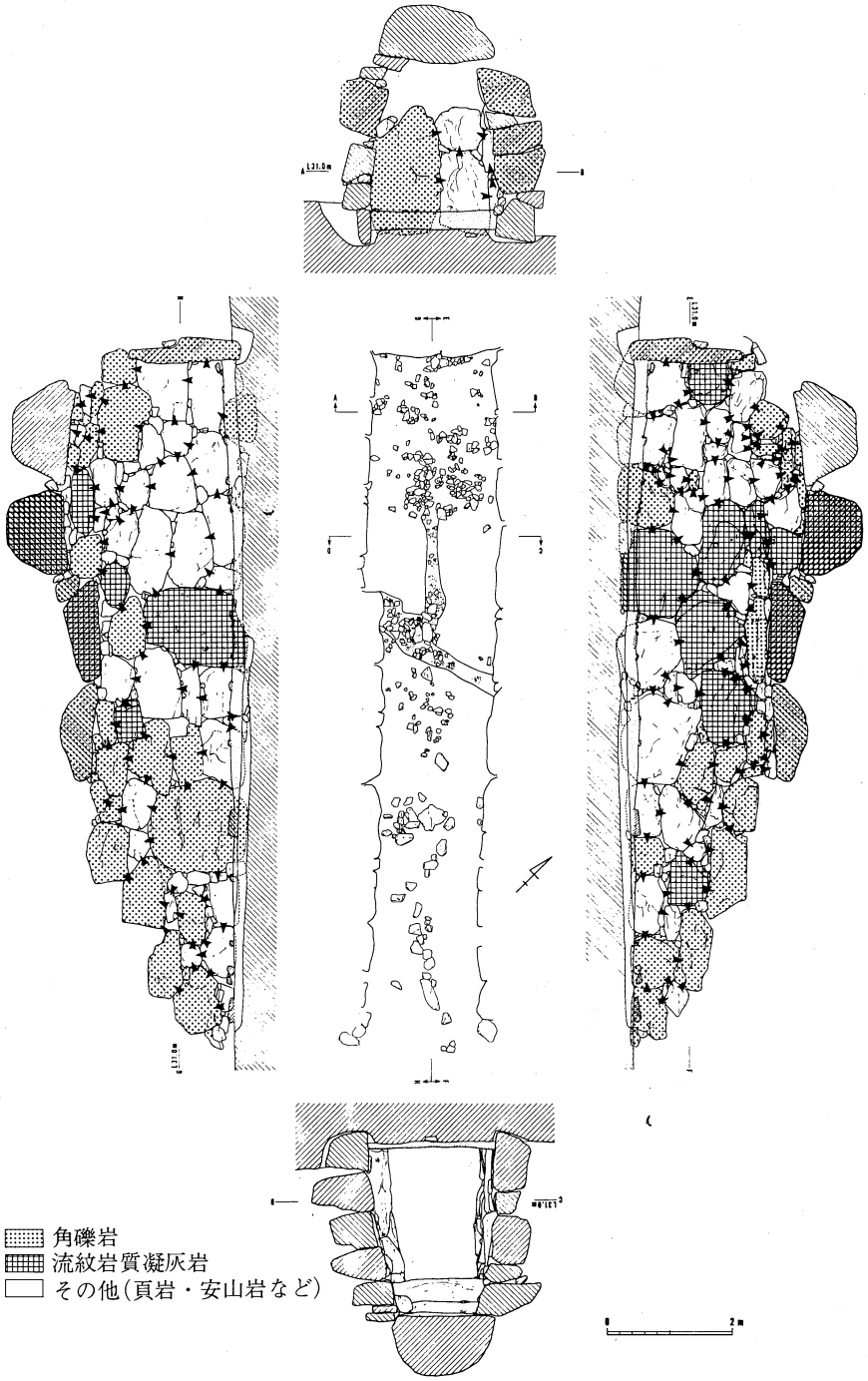
鉄鏃類では刀子の一部がみられ、馬具類においては留金具4点、銜の一部と思われる長さ6.05cmの棒、象嵌のみられる責金具2点、その他不明のもの約4点が存在している。

出土鉄器全体を通してみてみると、かなり銹の付着が著しく、それにより、形・種類を判断するのが困難であった。

第6節．小結

中井2号墳は、平坦面である麓屑面上という特殊な立地条件を有する古墳で、1号墳と2基のみで構成される小規模の古墳群の1基である。平坦面とはいえ、南から北側へ緩やかな斜面を呈しているため、南側の標高の高い方は手が加えられており、浅い掘り割りを施して墳裾を画している。南側の標高の高い方に三日月状に掘り割りが見られる。広義の外部施設と考えられないこともない。最大幅1.4m、深さ0.8mの規模の掘り割りである。掘り割りと土層の堆積状況から、最大径20m、最小径17mの東西に長い楕円形をした円墳である。墳丘規模以上に古墳の立地状況から、規模はさらに大きな感覚を受ける。ただ、実際の数値でも周辺では後期の古墳に限れば最大規模のクラスに入る。

古墳の立地しているところからの眺望範囲は狭く、東側は槻坂に遮られ、南側も向山があり遮蔽されている。北側は現在の中井の集落を見るにとどまり、神岡方面はみわたせない。唯一視界が広がっているのは西方で律令期山陽道推定部分を中心に鶏篭山・的場山を見ることが可能である。墳丘墓の存在する内山によって西方の可視範囲も南限となっているが、龍野市南部の平野部を見渡せる。2号墳は、1号墳と比べて山裾から離れた麓屑面



第38図　中井２号墳の石材種と構築順序

端部に位置するため視界も僅かに広がっている。この範囲に存在する後期の古墳は、片山東山古墳群と白鷺山古墳群である。

墳丘築成は、原則的に２種の土を交互に使って築いている。地山土である黄灰色砂質土と黒色～暗茶褐色の有機質土の２種を互層にしている。緩斜面上に墓壙を掘り、基底石を並べて石目までを積み、墓壙裏込め土を突き固めるまでの作業を行っている。ここまでは水平に近い盛土で、有機質土は用いず上層とはやや性格を異にしており、墳丘築成土下層と考えられる。上層は互層となり墳丘を高く盛っている。最終段階の盛土は、石室を覆う土で同一層で墳丘全体にかかる覆土で、硬くしまった土である。天井石露出部はあるものの、大半の天井石は隠れており、天井石最高部を覆う程度の墳丘と思われる。残存高で、墓壙底面から3.6m、墳裾最下部から2.9m を測る。天井石最高部が1.05m 露出していたので1.2ｍ前後を加えた数値が推定墳丘高となろう。墓壙底面から4.8m、墳裾下部から4.1ｍの推定値となる。墓壙の掘り込みは約0.8m である。これらから盛土量を推定積算すると、東西を水平と考え緩斜面が５°とすれば約815㎥となる。石室は、墓壙を掘ったのち、袖石と奥壁を据え置き石室プランを決め、第38図のように構築の順序が石材の力のかかり方から復原される。奥壁幅と羨門幅が同じ数値で、袖をつくることによって平面プランが台形となる方法を採用している。袖を設けることに意味があったように思われ、無理に片袖式の石室にした観が強い。龍野周辺の同時期の古墳にも見られる特徴であるが、それが顕著である。しかし、龍野周辺の他の古墳では、無袖式にして構築している例が多く通有である。袖の有無に意味があるのであろうか。平面プランは、奥壁幅を１とすれば、玄室長は２、羨道長は４の割合となる。奥壁幅・玄門幅・羨門幅ともに同じ数値である。

石室の構築は、奥壁と袖石を基準にして平面プランを設定している。壁体を築くのは基底石と２石目までを原則的に築いていることは墳丘の土層観察からも明らかである。基底石は、袖石ならびに袖石に対応する玄室側側壁の石材を据え、その間の側壁を築いている。奥壁の位置は当初決めていたものと思われるが、最終的に据え置いたのは側壁の後である。玄門から羨門へ向けて羨道壁体を構築している。袖を設けている右側壁については、羨道中央に位置する玄門から３石目の石材は縦積みしている。高さも1.4ｍと大型の石材で袖石・奥壁とほぼ同じ高さの石材である。大型の横穴式石室とくに長い羨道を持つ石室では１・２箇所に縦積みの大型の石材を置いている例があり、同様の性格を有する石であろうと思われる。

２石目までの石材の構築が第一段階で、次の段階は３石目までで、ここまではほぼ石材を垂直に積んでいる。３石目は、奥壁・袖石・羨道中央の３石の縦積みされた石材の高さに相当する。４石目から天井石架構までは、持ち送っている。羨道は４段、玄室は５段積みで壁体が構成されている。天井石は、玄室・羨道ともに２石ずつ残っている。同クラス

の石が架構されていたならば、玄室は３石、羨道は５石の天井石で構成されていたものと思われる。袖石上方（玄門手前・羨道最奥部）の天井石は偏平な石材で長さは最も大きな値を示し、約４ｔの重量がある。玄室の天井石は、ともに厚みのある重量感のある巨石で4.5ｔ・6tを測る。傾向としては、羨道の石は偏平なものを使用している。

石室の用材は、第３節に記したように３種の石材が使われている。流紋岩質凝灰岩・角礫岩ならびに相生層群中の他の石材（安山岩が大半）の３種である。槻坂安山岩は槻坂を中心に向山山麓と鴨池北側の丘陵に分布している。側壁の一部や裏込石に使われており、大型の石材はない。中井角礫岩は中井古墳群の谷向かいの現在の中井の集落の北側一帯から産出され、現在でも山裾や水田の脇に角礫岩の露頭や残石が見られる。天井石をはじめ巨石に使われており、最も多く利用されている石材である。觜崎流紋岩質凝灰岩は觜崎の屏風岩周辺で代表される石材で、今でも採取される石材で建築材などに使用されている。龍野断層に直交するように南北に広がっており、向山の基盤層と槻坂北側の一部に見られる石材である。角礫岩のような露頭は見られない。硬質の石材で、袖石や細長い天井石などに使われている。３種の石材は、全て古墳周辺の石材であり、遠隔地から運んだものではない。ただ、石種によって使い分けは行っていたものと思われる。

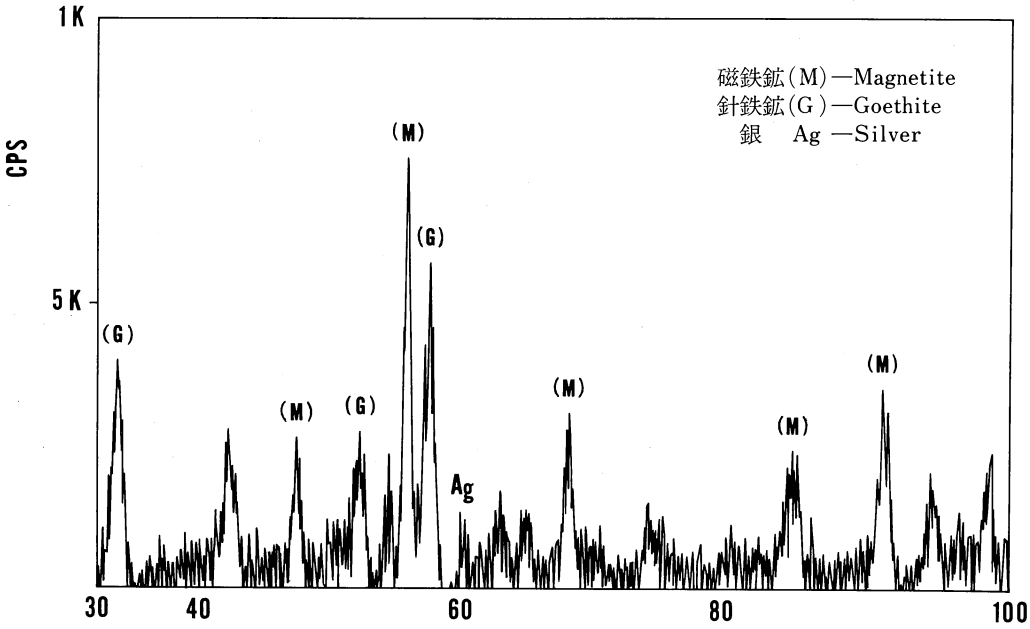
埋葬面は２面あり、第２次床面は角礫を敷石としており、原位置を保って出土した副葬品は第１次床面の一部だけである。第１次床面は排水溝を有しており、石室主軸に0.2～0.3m幅で縦貫し、石室外から墳裾沿いに標高の低い北側へのびている。墳裾中途で自然消滅的になくなっている。付属するように石壁の袖部から左壁へ斜交する溝も設けている。斜交する溝には砂利に近い小礫が詰められていた。羨道部には、その上面に人頭大前後の偏平な角礫を並べた総延長12.8mを測る排水溝がある。排水溝内から遺物が出土している。玄門手前２ｍ余りの羨道部から鍔装着状態の大刀１振が、石室外から須恵器の瑞・短頸壺が埋置されていた。共に明らかに意図して置かれたもので埋葬前の祭祀行為と考えて大過ないものと思われる。

中井２号墳は、後世の攪乱を受け埋葬面の保存状態は劣悪であった。しかし、原位置は保っていないものの興味ある遺物も見られる。その一つに頭椎大刀がある。把頭と責金具と思われる銀象嵌を施した小片２点の３点である。奥壁近くであるが、旧状は保っておらず移動した状態で検出している。金銅装の頭椎ではなく、鉄製の頭椎に銀象嵌を施し、装飾している。頭椎がつく大刀の刀身は明瞭でなく、欠失している可能性が高い。鞘尻や鐺などの装飾具は残存しないが、銀象嵌でＣ字とＳ字文を施した責金具は出土している。

兵庫県下で頭椎大刀は、６古墳から出土している。３例は金銅装の立派な大刀で、２例は鞘縁金具から頭椎大刀と考えられる。中井２号墳例のみが、鉄製の把頭で亀甲繋鳳凰文が施されている。全国的にも象嵌のある鉄製頭椎の例は少なく、西山氏の集成では９例挙

げられており、埼玉県から鳥取県まで分布が見られる。6世紀後半の通有の古墳に限られており、全て銀象嵌である。中井2号墳例も同じく銀象嵌で、タイプ・形態も似通ったものである。ただ、中井2号墳例は後期古墳としては石室・墳丘規模ともにやや大きなものである。龍野周辺ひいては兵庫県下でも規模の大きな範疇に入る古墳である。播磨の6世紀後半の位置づけが、全国レベルで考えた場合、銀象嵌の頭椎大刀の保有となるのであろうか。

頭椎の象嵌は、現状では肉眼観察出来ないが、蛍光X線分析の結果、銀象嵌であることが判明した。X線回折の結果、象嵌の銀線は磁鉄鉱（Maguetite Fe304）に覆われているため、塩化銀に至らず純銀のまま残されている。ただ、部分的に針鉄鉱もみられるので、徐々に塩化銀に移行するものと思われる。現在、研ぎ出し作業を行っており保存処理を実施中である。

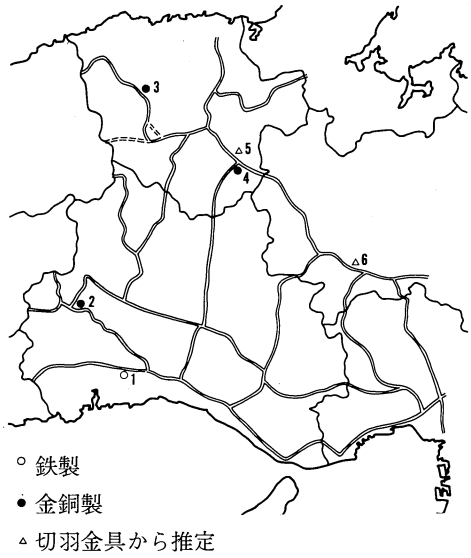


第39図　頭椎大刀蛍光X線測定チャート

他の鉄器では、排水溝内から出土した大刀を除いた２振の大刀が短く幅広の特徴的な形態をしている。１振には目釘穴まで残っており、ほぼ全長が推定できる。全長27cm前後で刀身の幅2.6cm、長さ21.2cmと刀身長が極めて短い。鉄鏃には各タイプがあり、柳葉式・三角形式・斧箭式・片刃箭式と変化に富んでいる。大半は片刃箭式のもので、茎部分の長い細根の小型鏃である。馬具も兵庫鎖・鏡板・轡・鉸具・飾金具と破片ながら各種の馬具が出土している。出土位置も遊離したものが大半で、一組のものと断定は出来ないが、時期差も認められない。

註1.　西山要一　「古墳時代の象嵌　―刀装具について―」『考古学雑誌』第72巻１号　1986

2.　兵庫県教育委員会加古千恵子氏に奈良国立文化財研究所にて回折して戴いた。また、分析については奈良国立文化財研究所肥塚隆保氏に種々ご教示戴いた。



第40図　兵庫県下出土の頭椎大刀分布図

第4表　兵庫県頭椎大刀出土古墳

番号	古墳名	所在地	墳形	主体部構造	共伴遺物	時期	所蔵	備考	文献名
1	中井2号墳	竜野市竜野町中井	円墳	横穴式石室	刀、馬具、鉄鏃、須恵器	6世紀末～7世紀初頭	兵庫県教委	鉄製	
2	高畑2号墳	佐用郡三日月町新宿高畑	不明	横穴式石室	環頭大刀、馬具、鉄鏃、耳環、管玉、切子玉、須恵器など	〃	三日月町教委	金銅製	三日月町史第1巻古代 兵庫県佐用郡三日月町 1964年3月30日発刊
3	文堂古墳	美方郡村岡町寺河内	円墳（全長10.2m）	横穴式石室（両袖式）	環頭大刀、刀、鏡、馬具、須恵器、土師器、銀装大刀	〃	村岡町教委	〃	干支銘鉄刀の発見と古代但馬 但馬考古学研究会 1984．3．18
4	筒江・長尾古墳	朝来郡和田山町筒江	円墳	横穴式石室	不明	〃	和田山町教委	〃	古代学研究第67号 古代学研究会 1973．4．20
5	上山5号墳（春日古墳）	朝来郡和田山町林垣	円墳	〃	須恵器、鉄鏃 刀子、刀 馬具	〃	〃	切羽金具から推定	秋葉山墳墓群 1978年3月 和田山町教委
6	沢ノ浦2号墳	多紀郡西紀町上板井	円墳（9m）	〃	須恵器、土師器、陶器	〃	兵庫県教委	木製頭椎か？ 切羽金具から推定	1987年刊行予定 展示の解説 兵庫県縄文調査事務所 1984．10．27

第５表　　２号墳出土須恵器計測表

No.	器種	出土地区					法量 (cm)				色調
		玄室	羨道	石室外	墓道	墳丘	口径	器高	最大径 坏高	底径	
1	蓋A			攪			(13.0)	4.2	—	—	灰色
2	蓋A			攪			(13.8)	(4.3)	—	—	青灰色
3	蓋A			攪			(13.9)	—	—	—	灰～暗灰色
4	坏A				埋		(11.0)	4.0	—	—	灰白～明灰色
5	坏A			攪攪			(11.6)	(4.0)	—	—	灰色
6	高坏A			排		攪	—	—	—	—	灰～灰白色
7	高坏A	1床	攪			裾	11.4	12.8	4.9	10.5	灰白～灰色
8	瑞	1床					(10.8)	12.8	8.5	—	灰色
9	瑞		門・攪				(11.8)	—	—	—	灰白色
10	瑞		門・攪				—	—	9.1	—	灰白色
11	瑞	2床		排・埋	埋		(12.8)	—	—	—	灰色
12	瑞	1床		排・底			—	—	—	10.0	灰白色
13	短頸壺A	1床					(5.6)	10.2	10.4	—	灰色
14	長頸瓶	1床	攪				(10.2)	—	—	—	灰白色
15	甕		門				(27.0)	—	—	—	灰～灰白色
16	甕					攪	(33.0)	—	—	—	灰白色
17	甕	2床		攪		裾	(36.2)	—	—	—	灰白色
18	甕					攪	(39.0)	—	—	—	灰～灰白色
19	甕	1床		攪	埋		21.3	—	—	—	灰白色
20	甕	埋		排・攪		裾	36.5	(67.8)	58.4	—	灰色
21	蓋B		攪			裾	17.8	3.1	—	—	灰白色
22	蓋C					攪	—	—	—	—	灰白色
23	皿A	攪				攪	(14.4)	(2.9)	—	(11.8)	灰白色
24	盤					攪	—	—	—	(8.7)	灰白色
25	壺					攪	—	—	—	(9.1)	灰色～灰色
26	椀		攪				(16.0)	—	—	—	灰白色
27	椀	2床		攪			(16.6)	—	—	—	灰白色
28	鉢					攪	(24.1)	—	—	—	灰白色
29	蓋D		攪				—	—	—	—	灰白色

１…第１次、２…第２次、床…床面、埋…埋土、門…羨門、排…排水溝、裾…墳裾、攪…攪乱
No.は土器実測図と、写真図版に付した番号に一致する。

第５章　中井鴨池窯跡の調査

第１節．立地

中井鴨池窯は中井古墳群の東約200ｍに位置し、東から西に派生する小支脈の南向き斜面裾部の、標高約35mに立地している。中井古墳群とは谷筋の基部付近につくられた鴨池を挟んだ位置にある。これまで窯の存在は知られていなかったが、志水豊章氏によってその存在が注意された窯跡で、山陽自動車道建設予定地内にかかるため発掘調査を実施した。

窯跡付近は後世の改変が著しく、窯体をはじめ灰原も明確には検出できなかった。窯体は斜面裾部を通過する県道姫路上郡線によって削平され、灰原も後世の遺構、鴨池の修築、コンクリート基礎などによって損なわれているような現状であった。

第２節．灰原

発掘調査は鴨池の北岸に沿って、幅１ｍのトレンチを長さ約70mにわたって設定し、窯跡の存在する位置の確認に務めた。その結果、須恵器片はかなりの範囲に分布するものの、明確に灰原と特定できる箇所は確認できなかった。ただ、１カ所灰混じりの黒褐色土が堆積している地点があり、須恵器片もやや多量に出土したので、この付近に窯跡が存在する可能性が考えられた。

一方、トレンチ調査と並行して県道下の法面の清掃を行ったところ、先の黒褐色土の認められた地点の上方で、幅約４ｍ、深さ約20cmの灰が充満した浅い「U」字形の落ち込みが検出されたため、この地点に窯が存在したことが確認された。しかし、落ち込みの状況から判断して、窯体はすでに県道付設の際に削平され、消滅していると考えられた。

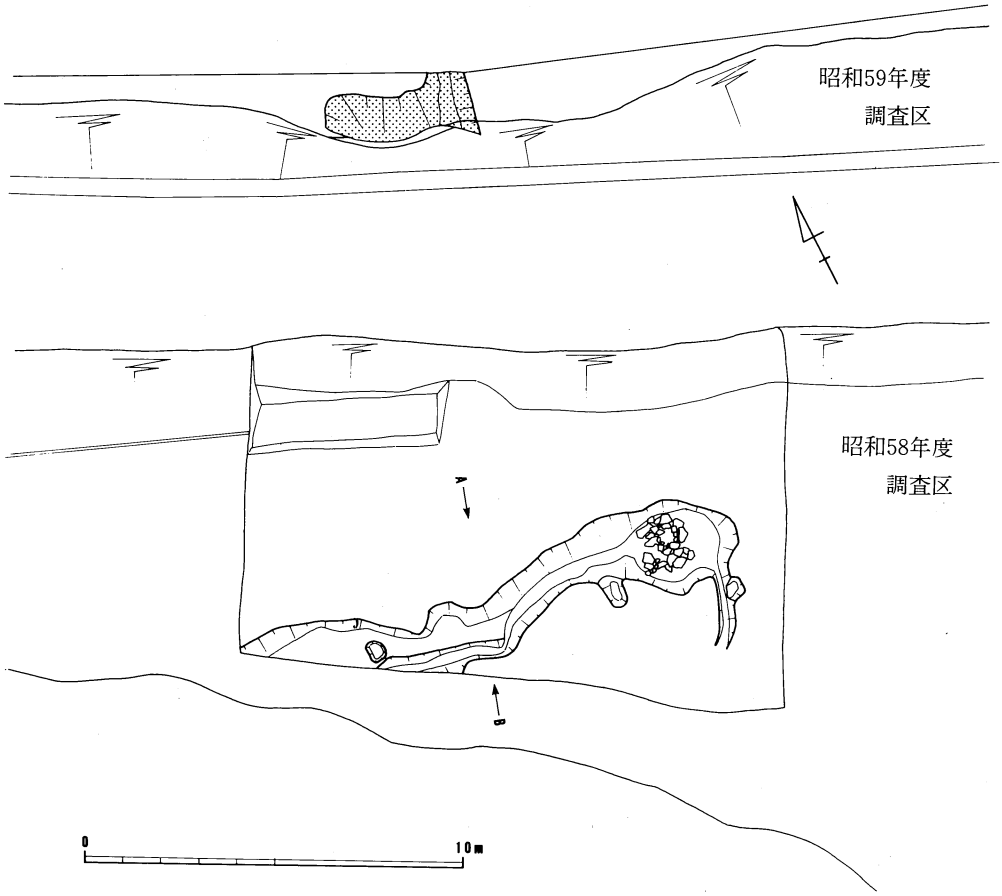
調査は、工事工程の関係上、法面の落ち込みについては昭和59年に実施することにし、昭和58年度は鴨池水際の東西約14m、南北約10mについて全面調査を実施した。

すでに触れたように、この地点は厳密には灰原が良好な状態で残存しているとは言いがたく、灰原が２次的に攪乱されている。調査区の基本的な堆積は、地山(黄灰褐色シルト)の上に10～20cmの層厚をもつ灰混じりの黒褐色土の堆積があり、その上層に茶褐色土の堆積が認められた。そこから上層は攪乱土で、現在層である。遺物は茶褐色土、黒褐色土中にかなり多量に包含されていたが、特に黒褐色土中に多い。しかし、古墳時代の須恵器の中に少量の奈良時代の須恵器が混在して出土し、黒褐色土の堆積が古墳時代の灰原によって形成されたものの、奈良時代以降の攪乱を受けたものと考えられる。

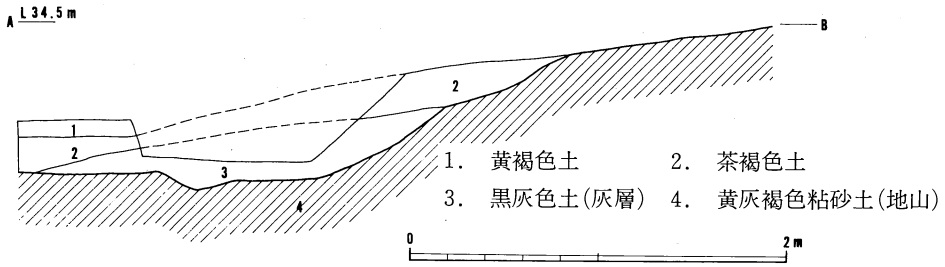
一方、県道法面で認められた「U」字形の落ち込みは昭和59年の11月に実施した。調査の結果、古墳時代の須恵器ばかりを包含することが明らかとなり、古墳時代の窯跡の灰原

の一部ではないかと推定された。落ち込み幅や、断面の形状などからみて比較的窯体部に近い部分が残存しているのではないかと考えておきたい。

なお、奈良時代の須恵器片の出土から、窯跡の存在も予想されたが、調査では窯跡の存在を明らかにすることはできなかった。また、土器片には溶着した土器片などが認められないことから、奈良時代の遺物については須恵器窯のものではなく、井戸状遺構にみられるような別の性格の遺構を想定した方が妥当かもしれない。



第41図　中井鴨池窯跡調査区・遺構配置図



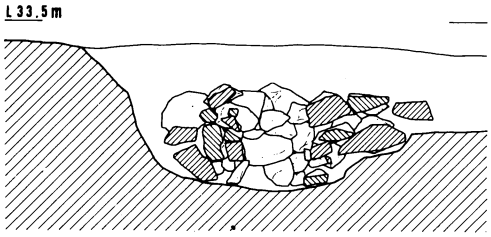
第42図　中井鴨池窯跡中央畦畔断面図

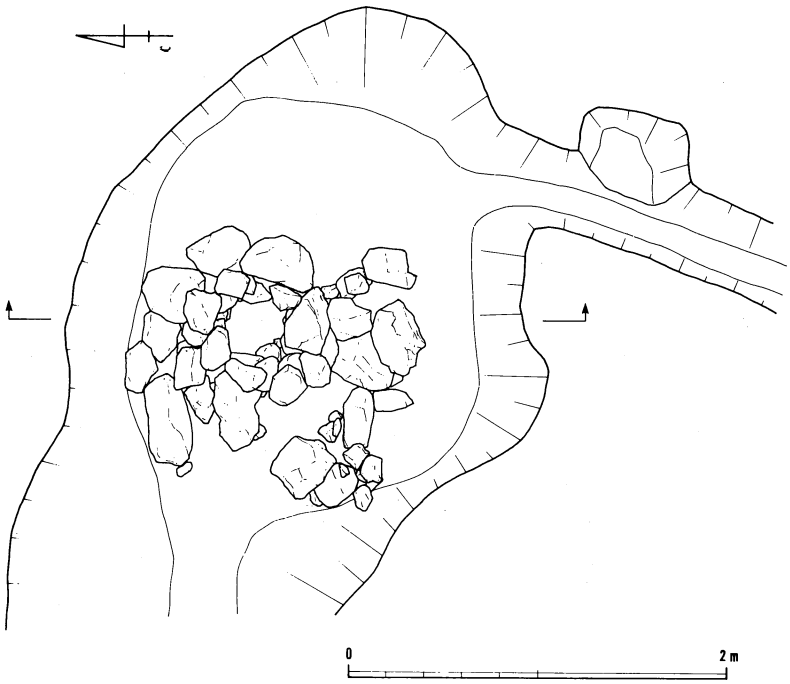
第３節．井戸状遺構

鴨池北岸調査区の最下層で、地山を掘り込んだ小規模な石組みの井戸状遺構を検出した。井戸状遺構からは西へのびるやや幅の広い溝と、南へのびる幅の狭い溝がとり付いている。

井戸状遺構は、東西約3.0ｍ、南北約2.5ｍの不整な円形掘り方の北に寄った所に構築されている。掘り方の断面形は「U」字形を呈し、北から南へ傾斜する地形に制約されて北側で約70cmと深く、南側では約55cmと浅くなっている。石組みは５～50cmほどの亜角礫を使用して３～４段から構成され、内径約40cmほどの空間が開くように高さ約50cmほど積み上げられている。

井戸状遺構から僅かに屈曲しながら西へのびる溝は、幅約１ｍ、深さ約50cmを測り、井戸状遺構の底面よりは約30cmほど高い位置に造られ、石組み井戸内には一定の滞水状態があり、許容量を越えると井戸上面からオーバーフローし、溝へ流れ込んだのではないかと考えられる。なお、南の方向へのびる細い溝も同様な性格を有していたと考えられる。





第43図　中井鴨池窯跡井戸状遺構実測図

第４節．出土遺物

１．概観

中井鴨池窯跡の出土遺物は、県道法面の灰原残存部と、鴨池水際の２次的に攪乱を受けた灰原から出土したものである。出土量は、コンテナ数にして20数箱程度である。特に県道法面の灰原では、第44図のように実測可能なものは７点だけで、遺物量は少なかった。遺物の大半は鴨池水際の２次的に攪乱を受けた灰原から出土した。

須恵器は、古墳時代（第44図～第49図・第51図）と奈良時代（第50図）とに大別できる器種は全般を通して、蓋・坏・高坏・瑞・提瓶・平瓶・鉢・壺・甕などが見られる。

全出土数の約８割近くは、蓋・坏と甕胴部片が占める。そのうちの約半数以上は蓋・坏で、それも口縁部と天井部、あるいは底部とに破損してしまっていた。他の器種についても口縁部付近が遺存しているのみで、したがって今回の整理の中心は口縁部の分類が主であった。

２．器種別による概略

中井鴨池窯跡出土須恵器のうちの古墳時代のものについては、県道法面の灰原残存部と鴨池水際灰原付近のものとでは時期差や、形態差も認められないため区別せずに述べていきたい。古墳時代のものとしては、蓋・坏・高坏・提瓶・瑞・壺・甕などの器種がある。

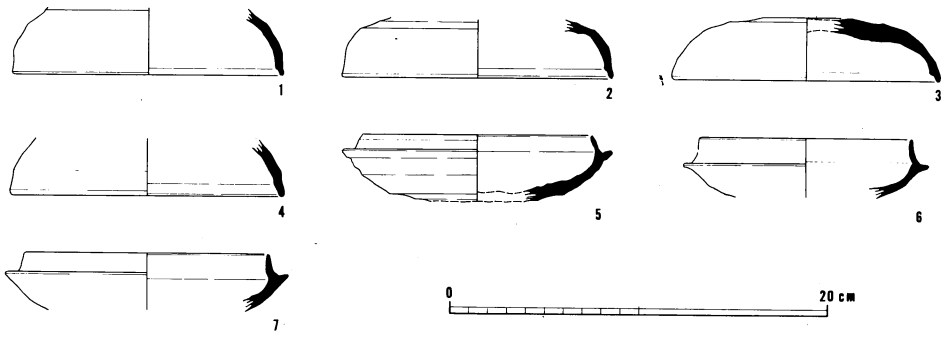
以下、個々の器種について簡単な説明を加えていきたい。

坏（５～７、39～72）

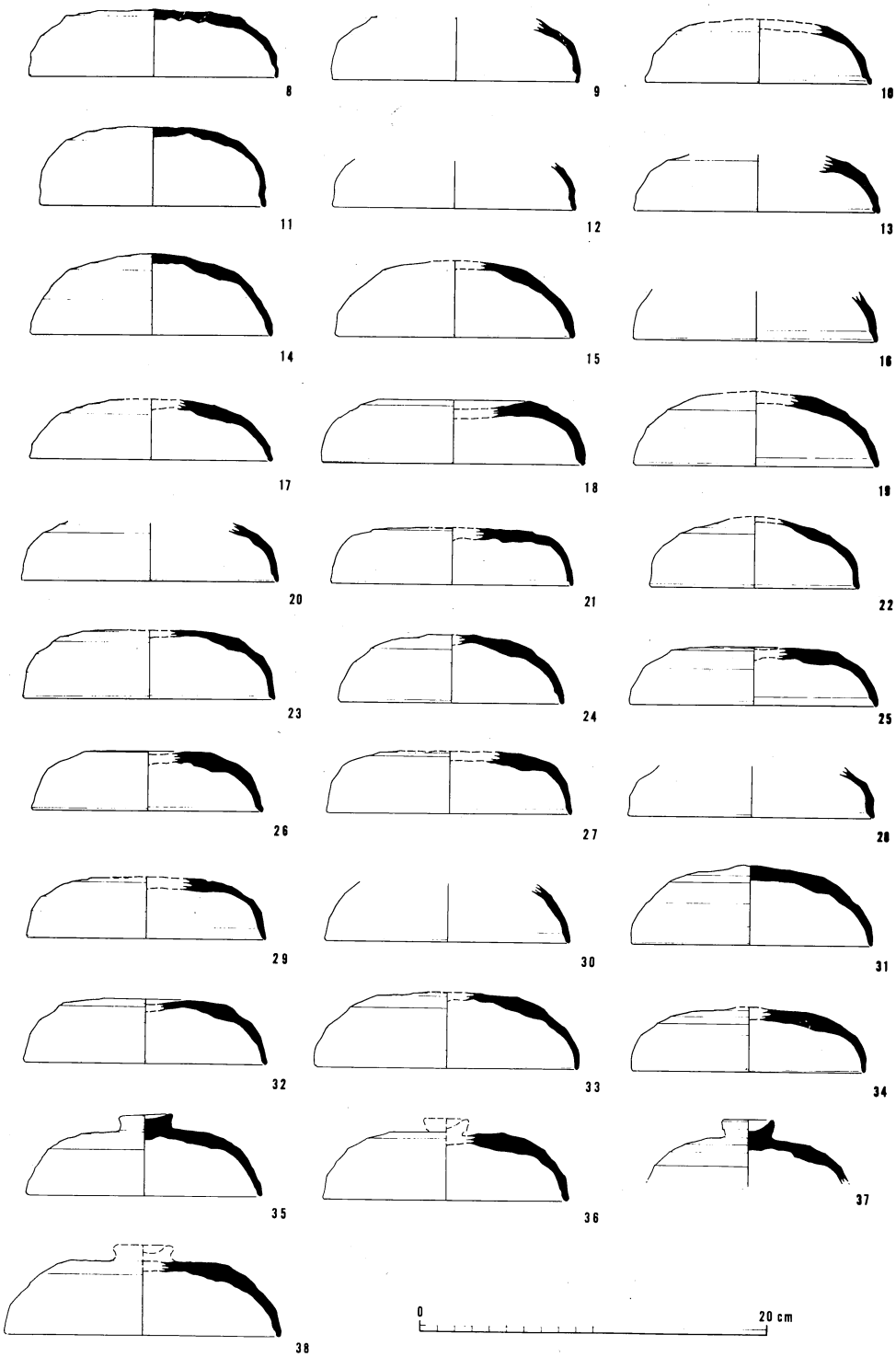
底部まで残存してているものがほとんどなく、坏として図示しているもののなかには、有蓋高坏にあたるものを含んでいると思われる。

口径は大半のものは、11～13cm前後に収まるが、器高については不明である。全体的な形態をとらえられるものは少なく、底部付近まで遺存しているものでは、器壁が厚いものが多く、ボッテリとしている。

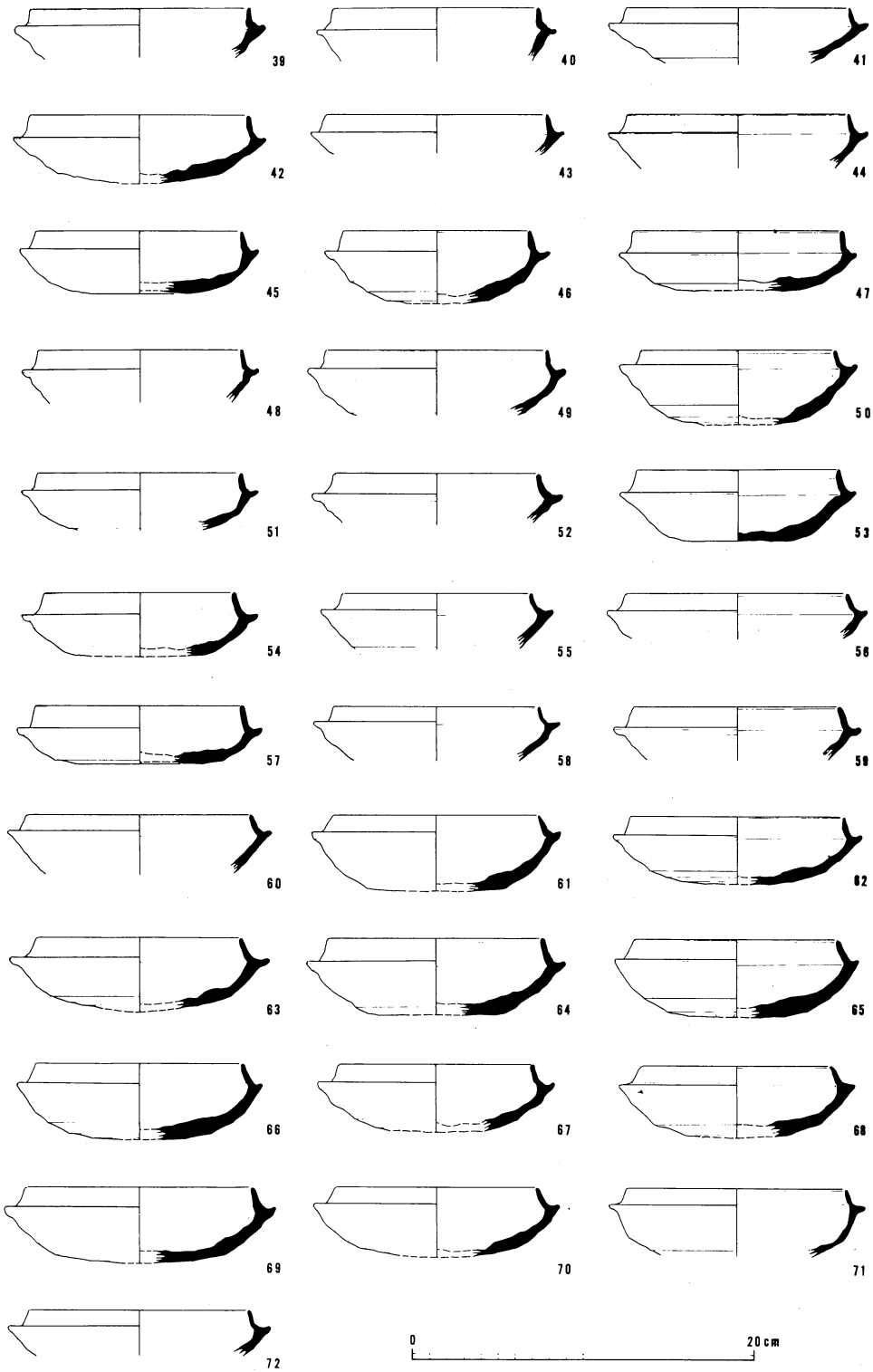
坏には口縁端部に面をつくるものは全く見られないため、坏Ａに該当するものはない。したがって、全ての坏が端部を丸く仕上げる坏Ｂの形態に含まれる。そのなかでたちあが



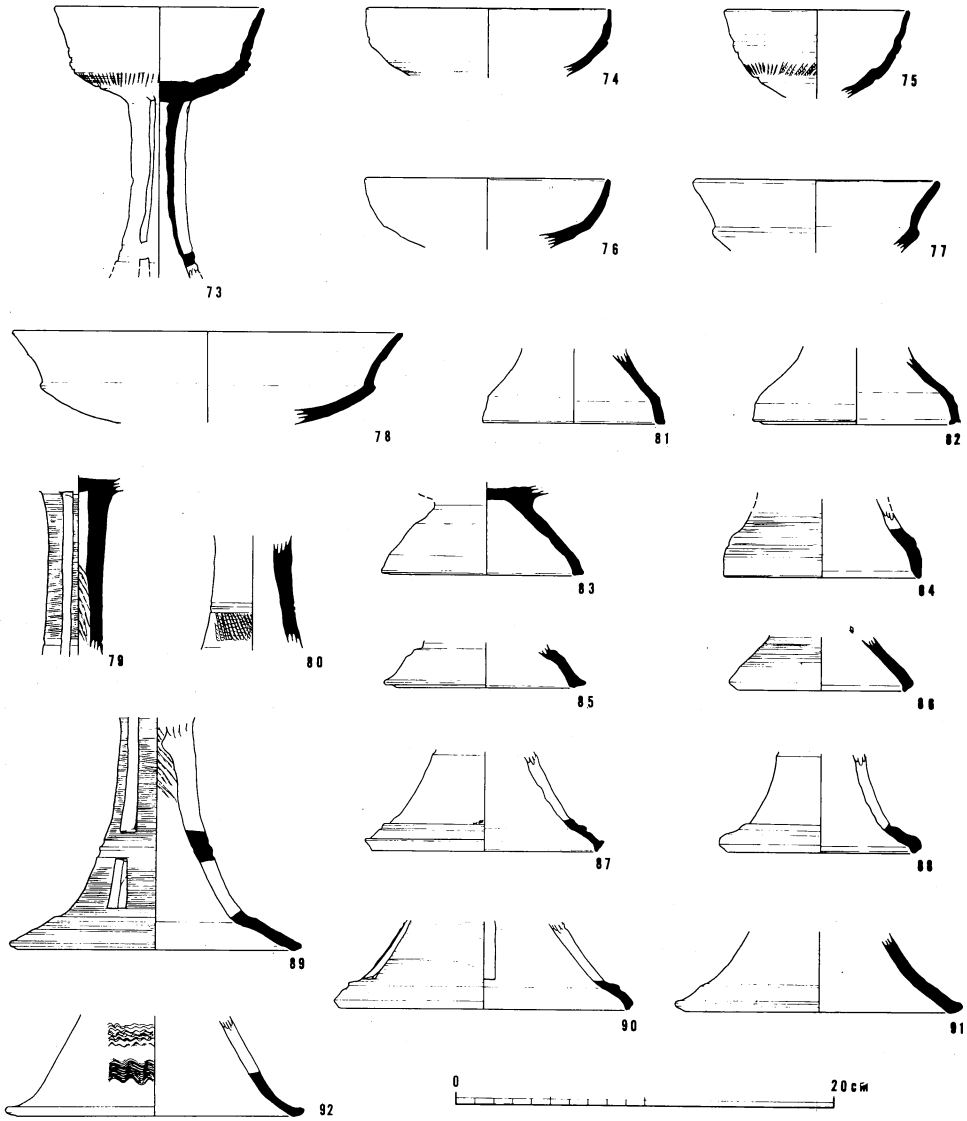
第44図　中井鴨池窯跡遺物実測図（1）



第45図　中井鴨池窯跡　遺物実測図　(2)



第46図　中井鴨池窯跡　遺物実測図（3）



第47図　中井鴨池窯跡　遺物実測図（4）

りの器壁の厚さが同じで端部を丸く仕上げるものを坏B_1、端部にかけて先細りし、尖り気味の口縁端部となるものを坏B_2とする。B_1は比較的たちあがりの高いものが多く、受部端も口縁部に対応するかのように丸く仕上げていることが多い。B_2はたちあがりの低いもので受部端は比較的尖りぎみのものが多い。

自然釉が付着しているものが多く、整形・調整技法の観察は困難である。底部1/2程度に回転ヘラケズリを施している。ケズリの回転方向は、すべて左まわりである。坏の底部内面にも同心円タタキ目痕が残っているものもある。

蓋（1～4、8～38）

口縁端部の形態から、A：端部に面をつくるもの、B：丸く仕上げるものとに大別できる。しかし、蓋Bの形態をとるものは少なく、多くは蓋Aに属する。蓋Aは端面が直線的に内傾するものを蓋A_1、カーブをもち内傾するものを蓋A_2とに細分する。この蓋A_1とA_2は、量的にはほぼ同じくらいの割合いで、口縁部以外の形態からは大きな相違は見られない。

口径は、14cm前後に大半は収まる。器高に関しては、天井部が陥没しているものや、また完形になるのが少なく正確さに若干かけるが、4.0 cm 前後である。天井部は偏平で、天井部と口縁部とを画する明瞭な稜をもつものや、明確な凹線を有するものは全くない。天井部の約 2/1 程度に回転ヘラケズリ調整が行われている。ケズリの回転方向はすべて左まわりで、ケズリ終わりは口縁部のほうにかけてさっとながしているだけのものが多いが、全体的にはまだ丁寧に行っている。天井部内面中央に同心円タタキ目痕が残るものも見られる。

35～38はつまみのつくもので、有蓋高坏か、有蓋壺とセット関係になるものと考えられる。つまみを有する蓋の口縁端部は、蓋Aと蓋Bのような差異は見られず、明らかにつまみを有する蓋については蓋Aだけである。つまみは径 2.5 ～ 3.0 cm前後のもので 3 形態に分かれる。①中凹み状を呈する。②中凹み状を呈し、真ん中が若干突出する。③ほぼ平坦面状となる。これらのなかで最も多く見られるのは、①の中凹み状のもので、径は 2.5 cm 前後のつまみである。

また、この窯跡においては、蓋・坏が重ね焼きされて付着したままの状態の破片も見られたが、重ね焼きされた状態の個体数は僅かで、自然釉が厚くかかっていたり、口縁端部のみが残存するという小破片のものであった。蓋A_1・A_2、Bと坏B_1・B_2の組み合わせ関係については、蓋は蓋Bの出土数が少なく、ほとんどが蓋Aの範疇にはいるもので、重ね焼きの残るものについては蓋Bは見られなかった。坏は、坏B_1、B_2とも見られたが個々に蓋A_1、A_2とセット関係になっているものはなく、セット関係については不分明で、各各の間での差も考えられない。

高坏（73～91、114～117・119）

有蓋高坏と無蓋高坏の 2 種類が併存すると考えられ、前者は高坏A、後者を高坏Bとする。今回の調査からは、全体の形態が把握可能なものはの高坏B（73）のみで、坏部から脚部にかけて依存しているようなものは見られなかった。

高坏Aについては小破片で残存状態も悪く、口縁部付近の破片のみでは、坏と高坏を明確に区分することは不可能であった。そのため、高坏Aは存在が推測できるにすぎない。

高坏Bは坏部の形態から 2 大別できる。坏部底から稜をもって屈曲し、斜上方に外彎しながらのびる口縁をもつものを高坏B_1と、蓋を逆転させたように、坏底部からなだらかに

彎曲しながら口縁部へと移行していく高坏B_2がある。高坏B_2のうち74や116のように口縁部に端面をつくるものも見られ、これらについては破片では一見蓋との区別が困難である。

脚部は、長脚になるものと、短脚なものとがあり、長脚が多い。長脚のものは、2段の長方形透かしを3方に施すことを常とし、脚裾部で大きく開き、筒部内面上半ではシボリ目が顕著である。透かしは一般的にはくり抜かれているが、73のように切り込みが貫通していないものもある。短脚のものは、無透かしで内彎気味に「ハ」字形に開く、比較的脚部径の小さいものである。

また、第49図のように加飾しているものが目立つ。坏部には櫛描きの斜線文・列点文・波状文などが施され、脚部にも櫛描きの波状文・列点文などがみられる。その他カキ目が顕著である。

壺・甕（93～113）

破片のみからでは明確に区別し難い。器種としては、短頸壺・提瓶・瓮などが挙げられるが、いずれも破片で、なおかつ個体数が数点であるため全貌の明らかなものはない。

壺と甕は、体部までの形態が分かるものがなかったため、口縁部からのみでは区別することは不可能であった。その中で97は、1点だけであるが有蓋壺がある。全体的に厚手なつくりで頸部にカキ目を施す。たちあがりはやや内傾気味に伸び、端部は丸く収める。受部は、薄手で斜め上方に内彎気味にのびる。

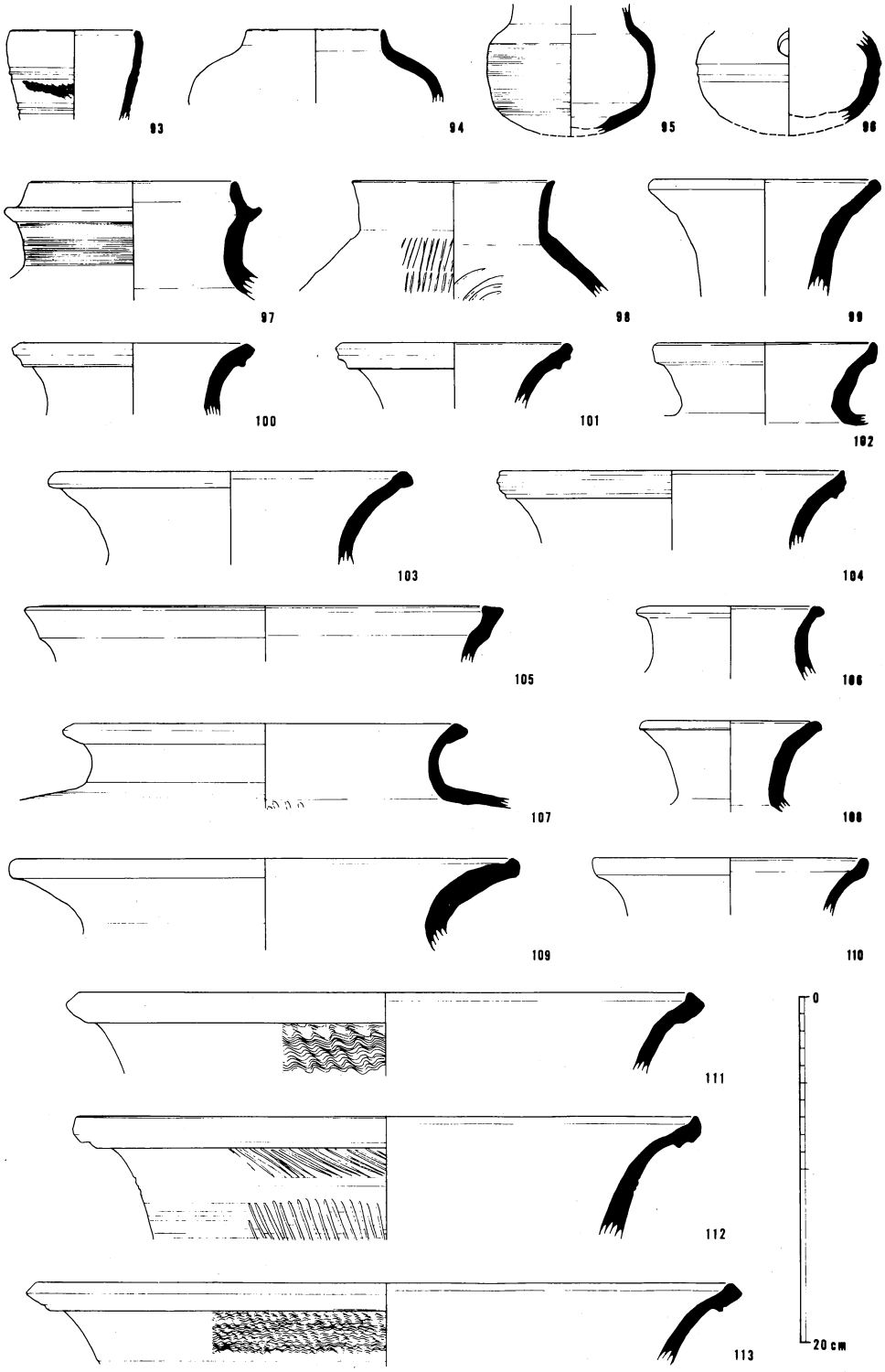
その他は、口径が6～40cmと比較的バラツキがみられ、多くの器形の存在が考えられよう。また111～113のように頸部に波状文や斜線文などを施す、大型の甕も若干認められる。

タタキ目は第51図のように、外面は平行タタキ目と格子タタキ目とに大別できる。平行タタキ目は、タタキ目の間隔が3～5本/cmであり、3本/cmのものがここでは最も多く見られる。

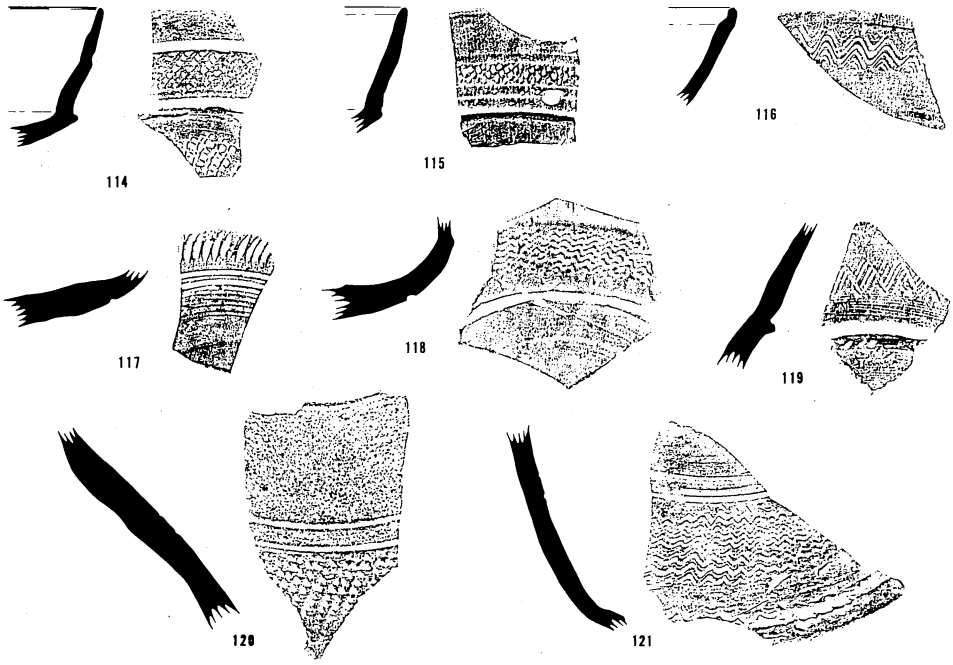
内面のタタキ目も、第51図のように同心円痕を施すのをの常とし、一部は同心円痕のうえからナデ消しているもの、ハケ目状原体で消しているもの、あるいは板状なもので消しているものなどである。このようなことは、個体差によって生じるのか、部位差によるものかは、各々の破片がどの位置を占めるものかは不明瞭で判然としない。

第50図は、古墳時代以降の出土遺物で、量的にはコンテナ1箱ほどである。極めて小さな破片のものが多い。器種の明らかなもののうち、坏は高台の有無によって分けた。坏Aは高台を持たないもの、坏Bは高台を有するもので、ほかには蓋・鉄鉢形土器・平瓶などが主なものである。これらは遺物量は少ないが、若干の時期幅をもつものと思われる。

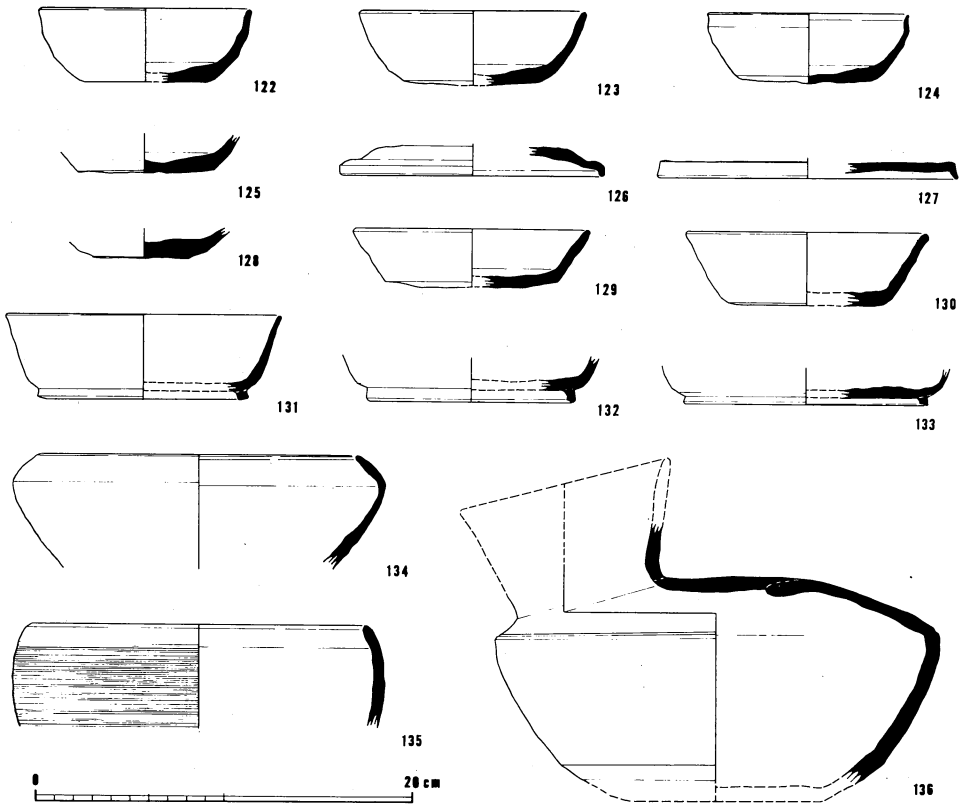
蓋（127・128）



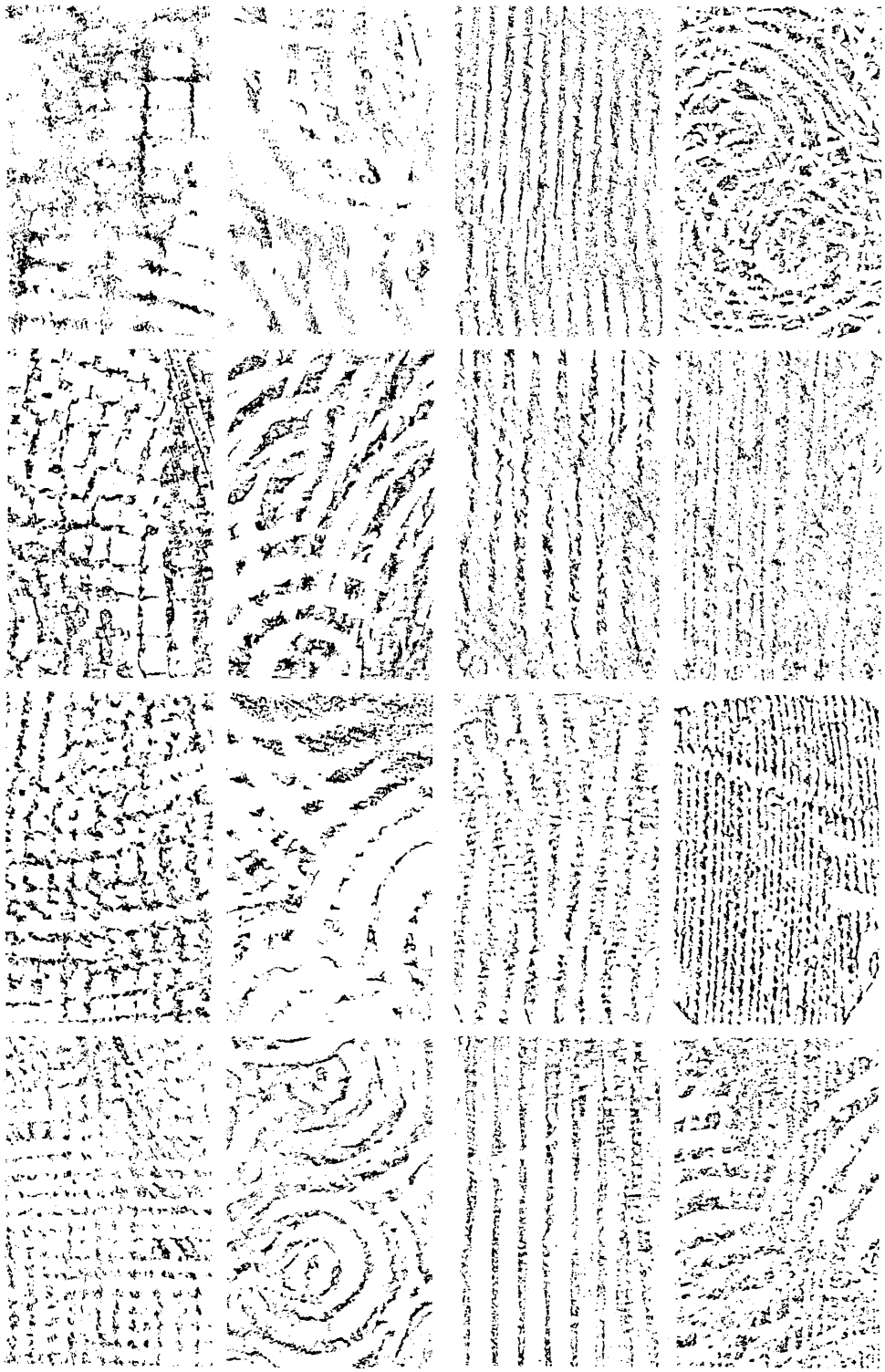
第48図 中井鴨池窯跡　遺物実測図 (5)



第49図　中井鴨池窯跡　遺物実測図　(6)



第50図　中井鴨池窯跡　遺物実測図　(7)



第51図　中井鴨池窯跡　甕胴部叩き目拓影

口縁端部近くの破片ばかりで全様の判かるものはなかった。

坏A（122～124）

古相を呈するもので、ヘラきりの底部や底部から上方にのびる口縁部は丸味を帯びている。129・130は底部にまだ丸味を残すものも見られるが、口縁部は斜め上方にまっすぐのびている。

坏B（131～133）

高台高も低く、外方への踏ん張りも少なく、高台貼付部分は底部の外側近くになっている。

鉄鉢形土器（134・135）

底部の形態は両方とも欠損のため不明だが、134のほうが体部の屈曲度は大きい。

平瓶（136）は、口縁部・底部とも遺存部が見られないが、把手を有さない体部上半は丸味を残し、肩部の稜も緩やかに屈曲している。

第5節．小結

中井鴨池窯跡の出土須恵器についての、概略を述べてきた。

出土須恵器は、古墳時代のものと奈良時代に下るものとに2大別可能であった。

古墳時代の須恵器は、蓋・坏・高坏・瑞・提瓶・壺・甕と多種類の器種をみとめることができる。しかし、全体的な傾向として破片が多く、特徴を把握できるようなものとしては、蓋・坏ぐらいであった。そこでここでは、比較的時期の求めやすい蓋・坏に限ってみていきたい。

中井鴨池窯跡における蓋・坏の特徴を、再度簡単にまとめてみる。

① 蓋は、天井部と口縁部を画する明瞭な稜は見られない。口縁端部の形態から、端部をつくる蓋Aと丸く仕上げる蓋Bとに細分可能である。

② 坏は、口縁端部に面をつくるものはなく、丸く仕上げる坏Bに含まれるものばかりである。

③ 蓋は天井部が偏平で、丸味を持ちながら口縁部へと続く。坏は良好な土器が少なく全体的には不明瞭な点が多いが、底部は偏平に近いと思われる。

④ 蓋・坏とも、回転ヘラケズリの範囲は天井部・底部の約1/2程で、比較的丁寧に行っていて、ケズリの方向は時計まわりである。

⑤ 蓋・坏の内面中央付近に、同心円タタキ目痕の残るものが見られる。

⑥ 重ね焼きの状態からは、蓋と坏のなかで明らかにセット関係を捉えることができるものはなかった。

以上のようなことをふまえて、中井鴨池窯跡の時期について考えていくこととする。蓋

・坏とも、明確な時期幅をとらえることは不可能であったが、各々のなかにおいて若干の差を指摘できよう。

蓋Aの口縁端部の形態は、ＴＫ10型式で見られるように、端面が内傾して端面との内、外面をわける稜線は明瞭といったものはなく、不明瞭である。また、天井部と口縁部を分ける凹線もみられない。

蓋Bについては、蓋Aと比べると出土数が少ない。天井部と口縁部を画する明確な稜もなく、蓋Aと同様で口縁端部は丸く仕上げるが差異を指摘できるものはない。

坏は、坏Aはなく坏Bの範疇にはいるものばかりである。そのなかでは、端部の丸い坏B_1とやや尖り気味の坏B_2とのように僅かな口縁端部差をもつが、上記の⑥のことから差を論じるには至っていない。

このようなことから、中井鴨池窯跡の時期を考えていくならば、蓋のところで少しは触れているが、ＴＫ10型式よりは僅かであるが下るものであろう。形態的には、ＭＴ85号窯出土の須恵器に最も近いものであると考える。

したがって、中井鴨池窯跡についてはＴＫ10からＴＫ43型式の間に収まるものとして考えておきたい。この間のなかで、２形態の蓋・坏が見られる。しかしこの差に関しては、地方色の検討など資料的にもまだまだ不充分であるので、ここでは型式差としては考えないこととする。奈良時代に下る須恵器には、坏Ａ・坏Ｂ・蓋・鉄鉢形土器・平瓶などが見られる。

122～124の坏Aは、底部がヘラ切り不調整でまだ丸みを残しているもので、全体のなかでは古いものであろう。坏Bの高台貼付部分の鉄鉢形土器・平瓶の体部の丸い屈曲からみても、ＴＫ48からＭＴ21型式期のものと考えられ、新しくても奈良時代前半頃には収まるものと思われる。

これらの性格については、土器片には溶着したものが認められないことから、窯跡としての存在を考えるには、少し困難であるかもしれない。

次に古墳時代の窯跡（一応Ⅱ期の終わりのＴＫ209までとしておく）自体については、兵庫県下についても第51図のように数十例に過ぎず、播磨においては22例である。このように今は類例に乏しいが、中井鴨池窯跡期の位置を簡単に述べておきたい。

播磨の須恵器生産については、今まで多くの方によって精力的に研究がなされ、地域的や時代別的にまとめられてきている。

播磨で今のところ最も古い窯跡は、相生市の丸山窯跡群中の那波野丸山３号窯で、ＴＫ23～ＴＫ47型式と考えられている。これに続く窯跡としては、同じく丸山窯跡群の那波野丸山２号窯の他、姫路市西北部から揖保郡にかけての西播地方南部分布範囲に散見し、御津町碇岩窯跡・姫路市大岡窯跡・姫路市八代江尻病院裏山窯跡などが挙げられる。いずれ

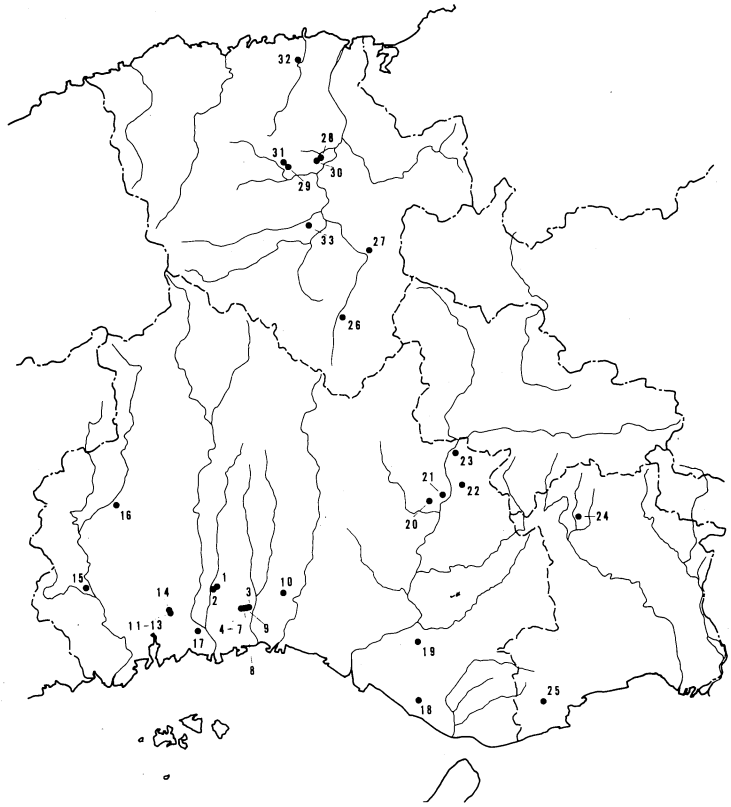
もＴＫ10型式に併行すると見られている。また地域的には少しはなれるが、東播地方では明石市の鴨谷池窯跡が挙げられ、ＴＫ10型式併行と考えられる。鴨谷池窯跡は東播地域では、最古の窯跡として位置付けられている。

西播地方では、先の那波野丸山２号窯や碇岩窯に続く窯跡は、姫路市の青山から太市地域で見られる。この青山・太市などの窯跡群ではＭＴ85号窯出土の須恵器と時期的に重なる青山稲荷大明神社裏窯跡などがあり、中井鴨池窯跡もほぼ併行する時期に求められる。

この地域ではさらに、ＴＫ43型式前後であろうと考えられる青山1･2･4･5 号窯跡と推移し、さらにＴＫ 209 型式併行の上池窯跡・桜峠６号窯跡へと続いていく。

一方、播磨内陸部では、加古川市野村窯跡・西脇市童子山窯跡・黒田庄町大山谷１号窯跡などのように加古川中流域の窯跡群が知られている。時期はＴＫ43～ＴＫ 209 型式の範疇に収まるものである。

このように播磨の須恵器生産は、西播地域の那波野丸山３号窯を最古として、６世紀中葉以降は、姫路市西部域で展開している。そして、６世紀後半以降になると暫時東播の方や、加古川中流域にも多く見られるようになる。



第52図　兵庫県下の古墳時代窯跡分布図

第６表　兵庫県下古墳時代窯跡地名表

播　磨　国

No.	窯　　名	所　　在　　地	時　　期	文献番号
1	中井鴨池窯跡	龍野市龍野町中井	６Ｃ後半	
2	大住寺窯跡	龍野市神岡町大住寺	６Ｃ後半	1
3	大岡窯跡	姫路市青山町大岡	６Ｃ中頃	2
4	青山１号窯跡	〃　　出屋敷千石池	６Ｃ末～７Ｃ初め	2
5	〃　２号窯跡	〃	〃	2
6	〃　４号窯跡	〃	７Ｃ初め	2
7	〃　５号窯跡	〃	６Ｃ末～７Ｃ初め	2
8	青山稲荷大明神社裏窯跡	〃	６Ｃ後半	2
9	上池窯跡	姫路市青山町後池	７Ｃ初め	2
10	八代江尻病院裏山窯跡	姫路市八代町	６Ｃ中頃	3
11	那波野丸山３号	相生市那波野研屋垣内	５Ｃ末～６Ｃ初め	4
12	〃　　２号	〃	６Ｃ中頃	4
13	〃　　1.4号	〃	７Ｃ初め	4
14	那波野土井１号	相生市那波野字土井	６Ｃ代	5
15	山田奥窯跡	赤穂市有年牟礼字山田	６Ｃ後半	6
16	島脇西狭間池窯跡	佐用郡三日月町末広	６Ｃ末	7
17	碇岩窯跡	揖保郡御津町碇岩	６Ｃ後半	８．９
18	鴨谷池窯跡	明石市魚住町西岡	６Ｃ中頃	10
19	野村窯跡	加古川市八幡町野村	７Ｃ初め	11．９
20	童子山窯跡	西脇市山手町童子山	６Ｃ末	12．13
21	北垣内池窯跡	〃　上比延町丸山	７Ｃ初め	12．13
22	谷窯跡	〃　谷町上ノ垣内	７Ｃ初め	12．13
23	大山谷１号窯跡	多可郡黒田庄町黒田	６Ｃ末～７Ｃ前半	9

摂　津　国

No.	窯　　名	所　　在　　地	時　　期	文献番号
24	郡塚１号窯	三田市末野郡塚	５Ｃ末～６Ｃ初め	14
25	林山窯	神戸市長田区林山町	６Ｃ後半	15

但　馬　国

No.	窯　　名	所　　在　　地	時　　期	文献番号
26	松谷窯跡	朝来郡朝来町石田字宮ノ奥	６Ｃ後半	16
27	岡田１～３号窯	〃　和田山町岡田	〃	16
28	宮ノ谷窯跡	城崎郡日高町中字宮ノ谷	〃	16
29	尾鼻窯跡	〃　庄境字尾鼻	〃	16
30	イチゴ谷１・２号	〃　中字イチゴ谷	6Ｃ後半～7Ｃ中頃	16
31	倉谷窯跡	〃　庄境字倉谷	６Ｃ後半	16
32	鬼神谷窯跡	〃　竹野町鬼神谷字宮ノ下	５Ｃ末～６Ｃ初め	16．17
33	中山窯跡	養父郡関宮町三宅字中山	６Ｃ前半～中	16

参考文献

1．加西市教育委員会永井信弘氏の御教示による。

2．永井信弘　「播磨中部古窯跡群について」　東播地域史懇談会12回例会資料　1983
『鹿児』　第93号　加古川史学会　1984
「姫路市西北部の古代窯業生産遺跡」　昭和59年度兵庫県立姫路聾学校夏季研修レポート」

3．松本正信・加藤史郎　『兼田―弥生遺跡と古墳群の調査』　姫路市教育委員会・兼田遺跡発掘調査 1982

4．森内秀造　「相生の古代窯業」『相生市史』第１巻　1984

5．兵庫県教育委員会森内秀造氏の御教示による。

6．松岡秀夫　『赤穂市史』第４巻　1984

7．兵庫県教育委員会大平茂氏の御教示による。

8．中村信義　『御津町岩見地区遺跡分布調査報告』　御津町教育委員会　1975

9．上月昭信　「播磨地方における須恵器の生産」『鹿児』　第100号　加古川史学会　1984

10．『鴨谷池古窯址群』　神戸古代史研究会　1983

11．中村　浩　「窯跡」『加古川市史』第７巻別編１　1985

12．岸本一郎　『播磨・緑風台窯址』　西脇市教育委員会　1983

13．北野耕平・絹川和明　『西脇市史』本篇　1983

14．井守徳男　「ＡＮ―88（窯址）調査概要」『三田市・青野ダム建設に伴う埋蔵文化財調査概要（２）』 兵庫県教育委員会　1979

15．稲沢正弘・渡辺伸行　「神戸市長田区林山窯について」『神戸古代史』Vol.13　No.1（No.7）　1986

16．加賀見省一　「但馬地方における須恵器生産の展開」『よみがえる古代の但馬』　但馬考古学研究会 1981

17．瀬戸谷晧　「竹野町鬼神谷窯跡の資料」『兵庫県埋蔵文化財調査集報』第３集　兵庫県文化協会1976

付記

兵庫県下の古墳時代の窯跡をまとめるに際して、播磨国に関しては加西市教育委員会の永井信弘氏に多大な御教示を得た。記して感謝いたします。

第６章　おわりに

中井古墳群・中井鴨池窯跡の調査によって、

①中井古墳群は比較的広い平坦面に２基のみが立地する特殊な立地条件を有する古墳群であり、北側に律令期山陽道が通る地域に面している。

②中井古墳群は、横穴式石室を主体部とする後期の古墳では20m 前後の墳丘規模を持つ大型の範疇に入る２基の古墳で構成される。

③石室の形態は片袖式で特殊な平面プランの大型の石室である。

④１号墳からは三累環頭大刀、２号墳からは頭椎大刀と２基とも装飾大刀を保有している。

⑤中井鴨池窯跡は窯体をはじめ灰原の大半も残っていなかったが、古墳時代の須恵器窯跡で少ない県下の窯跡の資料を追加した。

⑥需給関係にある古墳群と窯跡の好例と考えられる。

などの成果を挙げることができた。以下、これら２・３について考えてみておわりにとしたい。

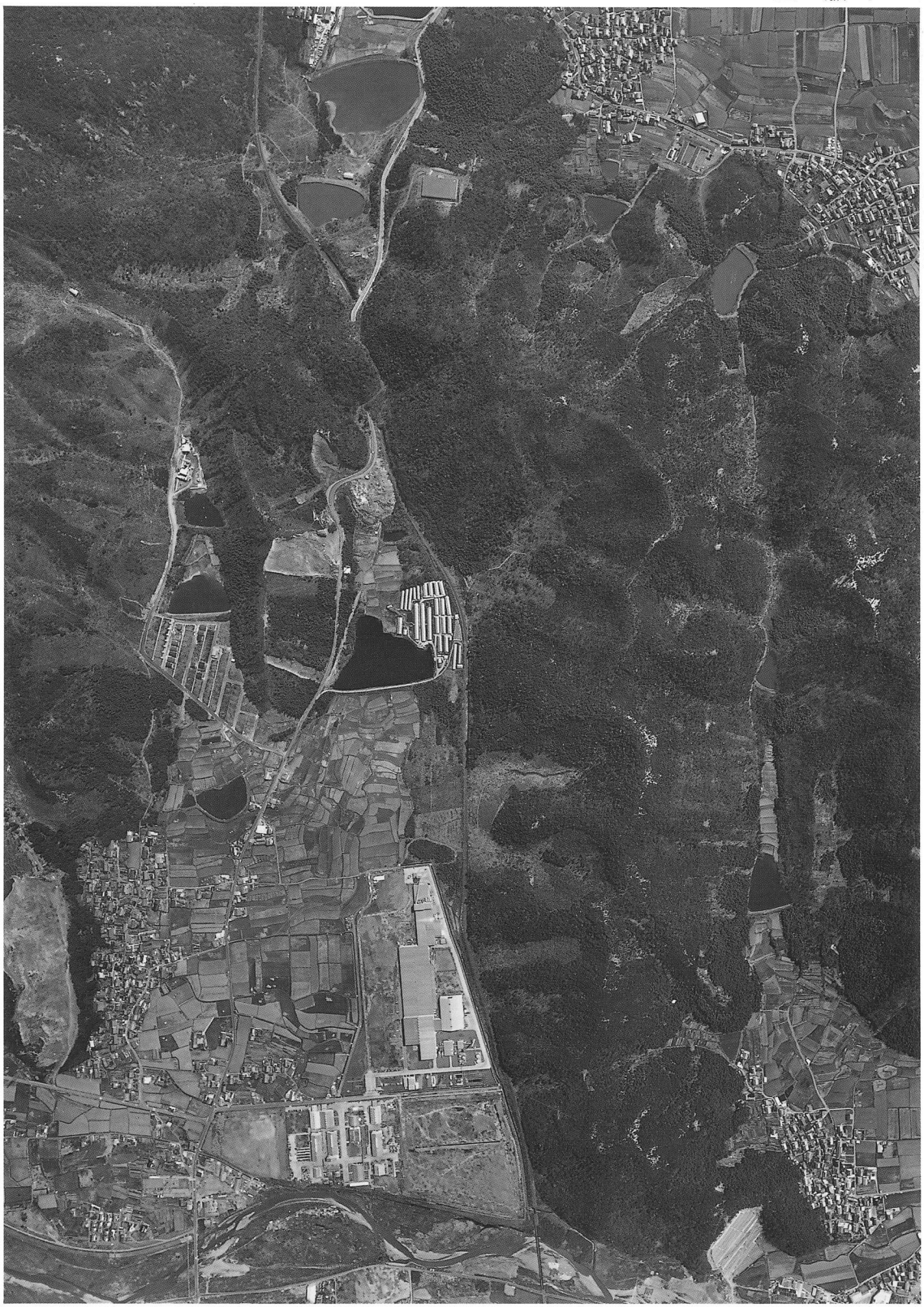
麓屑面という平坦面に立地していることは墳丘規模以上に古墳を際立たせ、視覚的に大きく見える立地をしている。ただ、地形的には平坦ではあるが、山の北斜面で生活の場としては好適な立地とは言えない。しかし、平坦面上に２基のみが存在することは特殊であろう。２基の築造時期は大差なく、余り差を置くことなく続けて構築されたものと思われる。

中井古墳群の２基は、ともに大型の横穴式石室で県下でも最大クラスの主体部である。１号墳は全長８.９ｍ、最大幅2.45ｍ、２号墳は全長11.1ｍ、最大幅２.１ｍと大型である。平面プランな特異なものを持ち、奥壁幅と玄門幅が同じで、袖を設けるために台形プランとなってある。１号墳は右片袖、２号墳は左片袖と対照的であるが、平面的な構築方法は同一である。玄室と羨道の長さの比率は、１号墳が玄室長の1.7倍、２号墳が２倍の羨道長となり、２号墳の方が羨道長指数が大きい。１号墳は立地条件が麓屑面の端部に位置するため制約を受けたのか、意図的な制約なのであろうか。後期の大型の横穴式石室は龍野市域では、揖西町北縁部に点在している。狐塚古墳が全長10.1ｍ、最大幅２.２ｍ、中垣内１号墳が全長10.0ｍ、最大幅２.３ｍを測り、中井１・２号墳を含めて市内の大型石室に数えられるものである。近くで石室長が10ｍを越える古墳は、新宮町天神山古墳、新宮町馬立南古墳群中の１基(八丁塚)、相生市那波野古墳、御津町正玄塚古墳、姫路市丁山頂古墳、姫路市西脇所在の古墳など揖保郡内でも10基余りを列挙出来る。丁山頂古墳、龍野市西宮山古墳などの古式の石室を除くと玄室と羨道の長さの比率は１～1.3が一般的である。中井１号墳の1.7の指数に近い古墳は天神山古墳・八丁塚古墳・那波野古墳だけである。中井２号墳のように羨道の長いものは知られていない。八丁塚古墳・那波野古墳は岩屋山亜式タイプと考えられる古墳で、中井１・２号墳よりも新しい時期の築造である。天神山古墳が管見に触れる限りでは、中井１・２号墳に近い古墳と考えられるが、天神山古墳の方が平

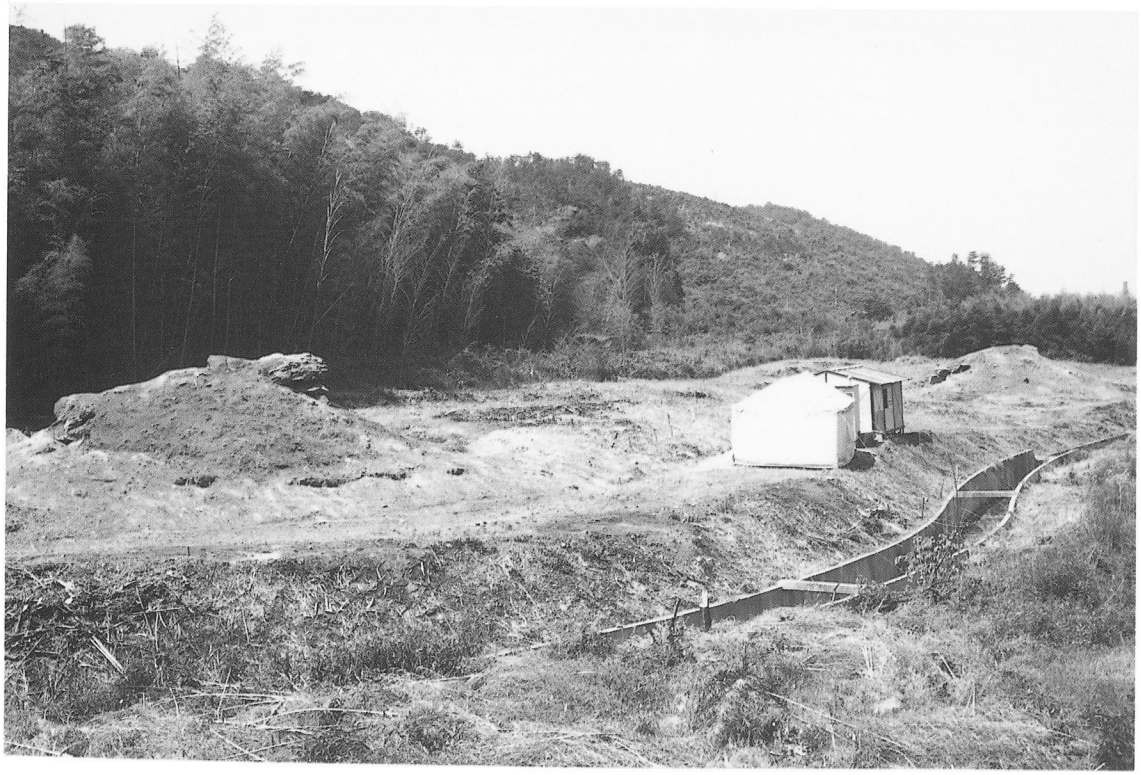
面プランもしっかりした右片袖式石室でやや古い時期と考えられないだろうか。中井１・２号墳の石室タイプは、大型石室ながら無袖式石室に移行する寸前の段階と考えられる。石室が狭長になる傾向は、龍子向ィ山古墳群・鳥坂５号墳などで顕著に見られ、龍野市域の東西に離れているものの、中井１・２号墳と同時期のものである。石室の平面プランとともに石室の形態が崩れ始める時期の築造であり、那波野古墳などのタイプの古墳とは異なり、在地的な性格の古墳と考えられる。石材も在地の石材を使用しており、切石もしくは切石に類する石材は使っていない。

この性格は、両墳が保有していた装飾大刀からも読み取れる。１号墳の三累環頭大刀、２号墳の銀象嵌を施した頭椎大刀ともに一段階下の大刀と考えられている。龍野市周辺では最大クラスの古墳にもかかわらず、大刀の性格はやや落ちるものである。この時期の播磨の龍野周辺の位置付けが、２本の大刀に象徴されるのであろうか。

時期的にはやや空白期があるが、山陽道を隔てて北側に中井廃寺が造営されてあり、結び着きを否定は出来ない。大型の石室が山陽道沿いに築かれ、また古代寺院も同地域に営まれていることは見逃せないであろう。古墳時代中期までの分布状況と一変しており、中井古墳群・中井鴨池窯跡も古代山陽道と深い関係があることは否めない事実であろう。



中井古墳群・中井鴨池窯跡周辺



(1) 中井古墳群・中井鴨池窯跡遠景

(2) 中井古墳群調査前全景

(1) 中井古墳群空中写真（北東より）

(2) 中井古墳群空中写真（北西より）

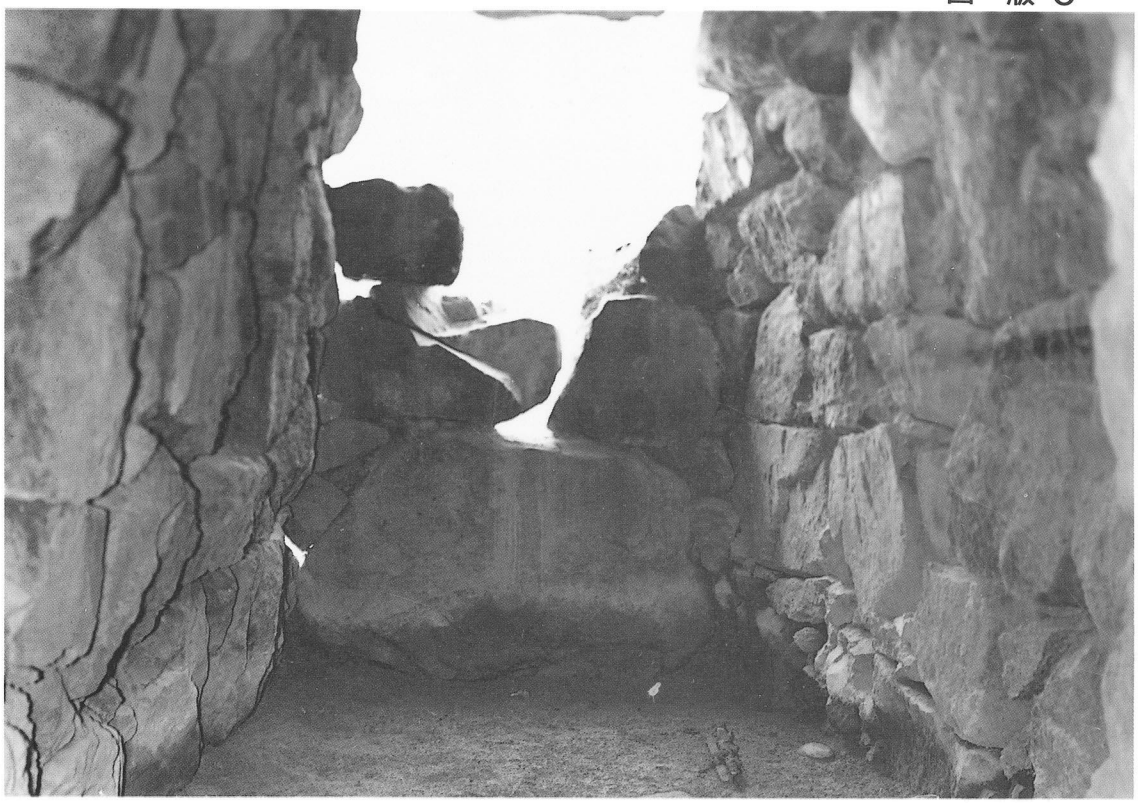
(1) 調査前

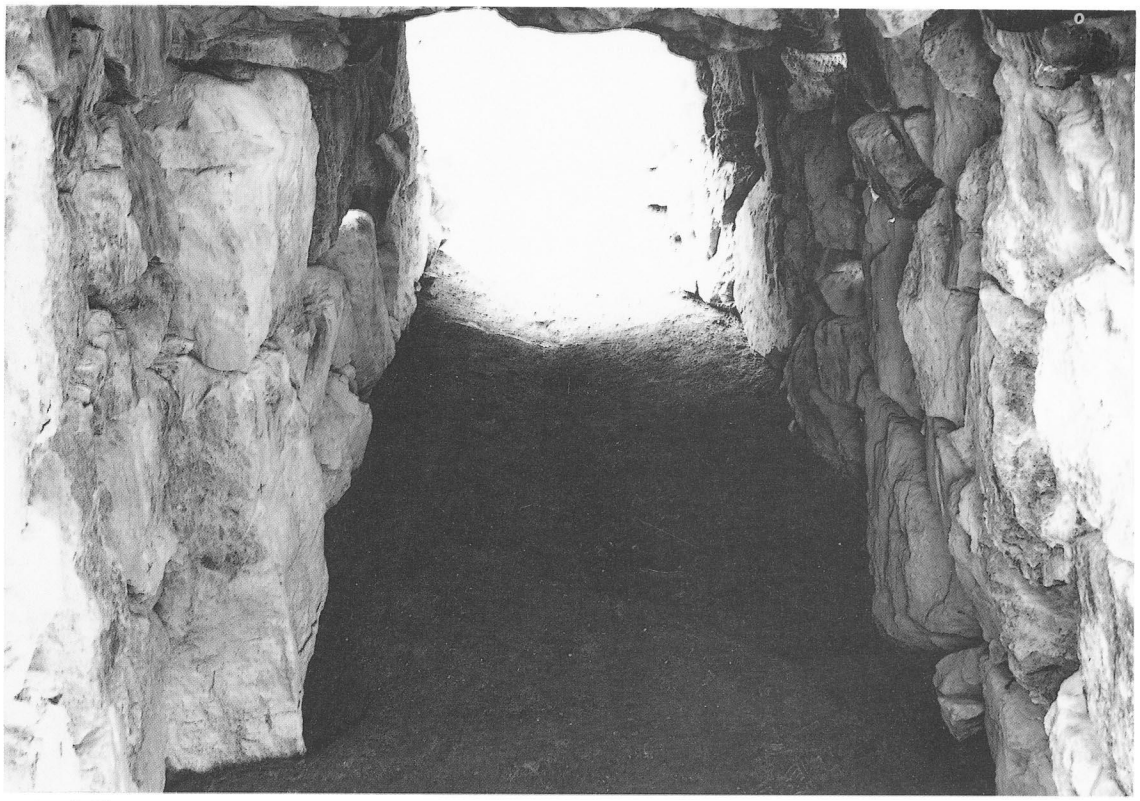
(2) 南側壁裏面状況

(1) 北側墳丘断面

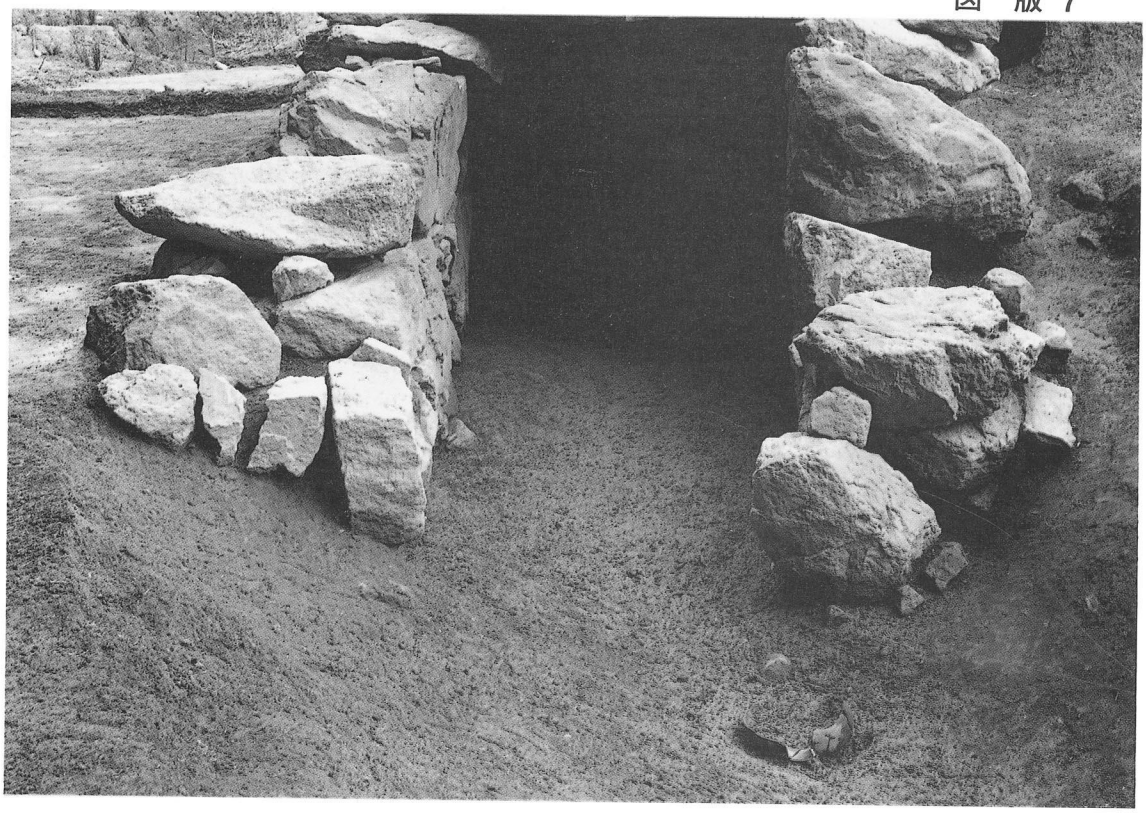
(2) 奥壁側墳丘断面

中井一号墳



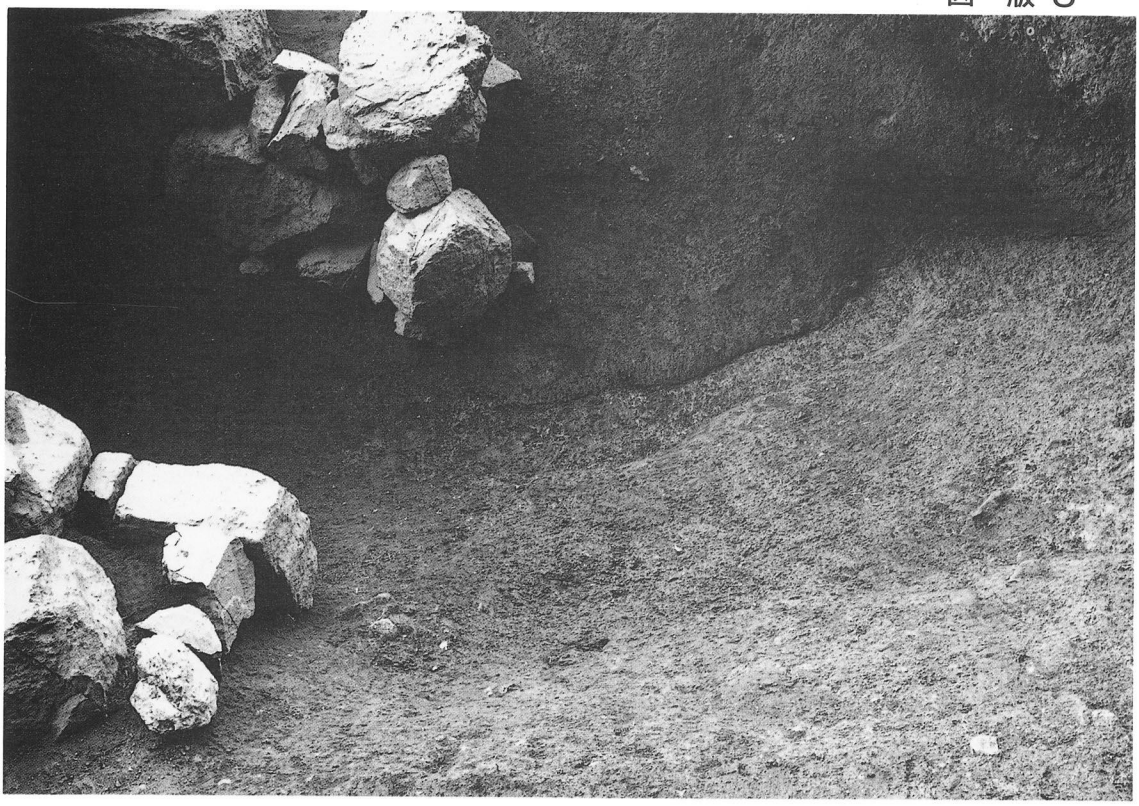


(1) 奥壁
(2) 羨道



(1) 羨門

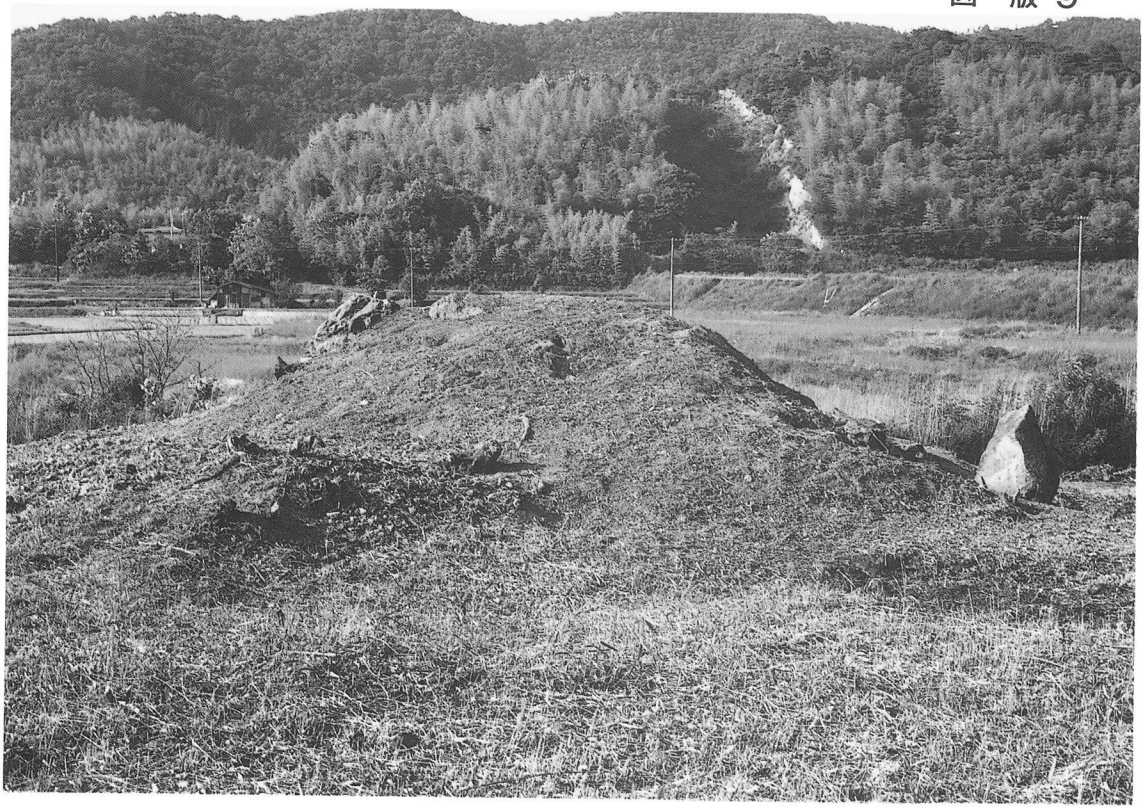
(2) 第２次床面



(1) 排水溝

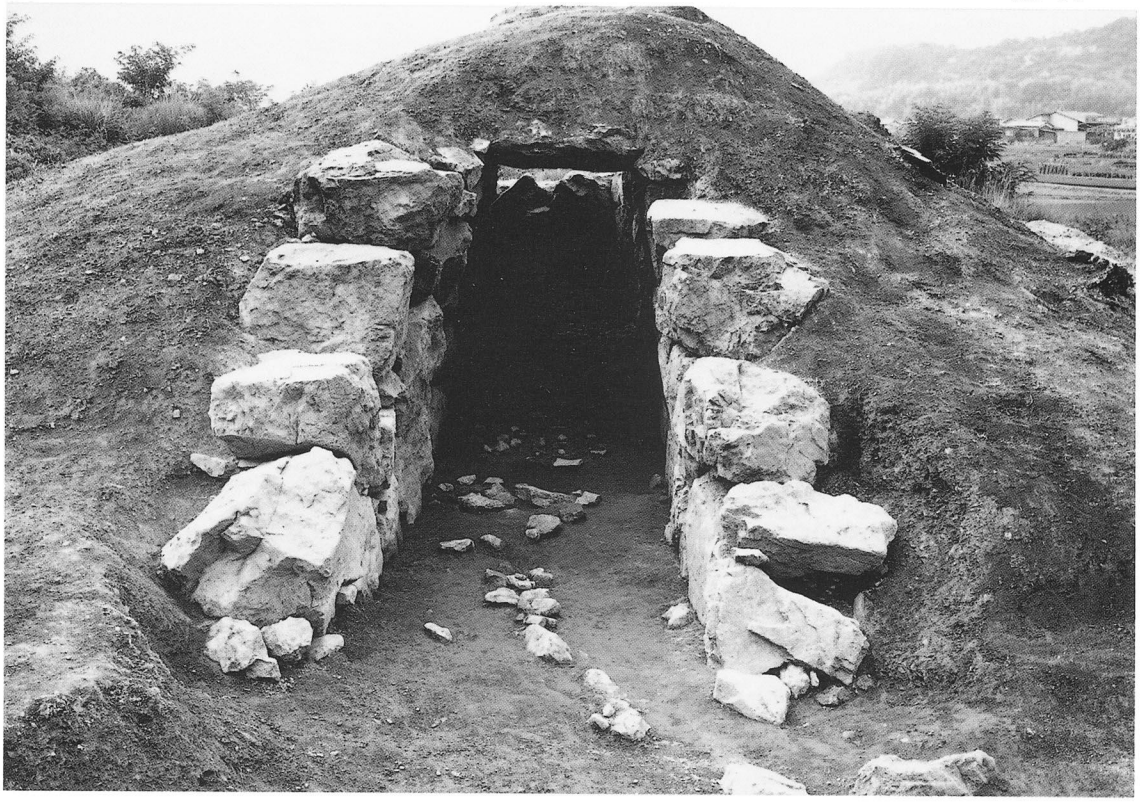
(2) 第1次床面遺物出土状況

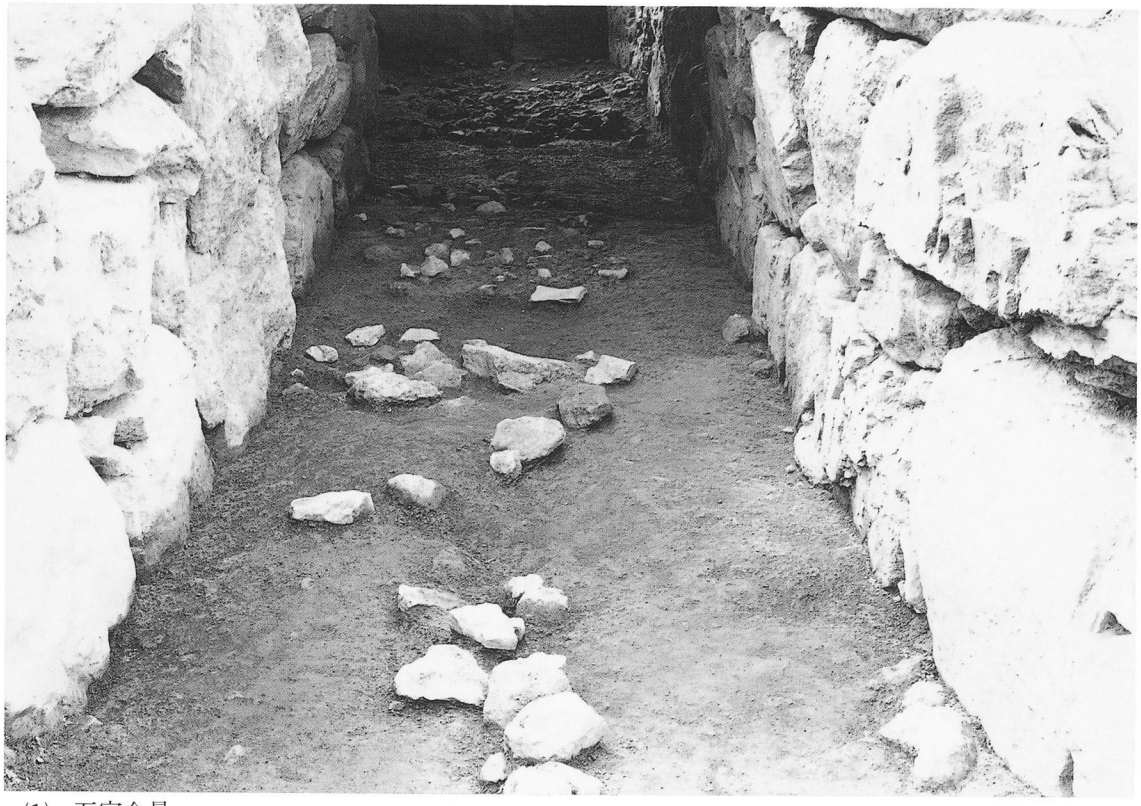
中井二号墳



(1) 調査前

(2) 全景

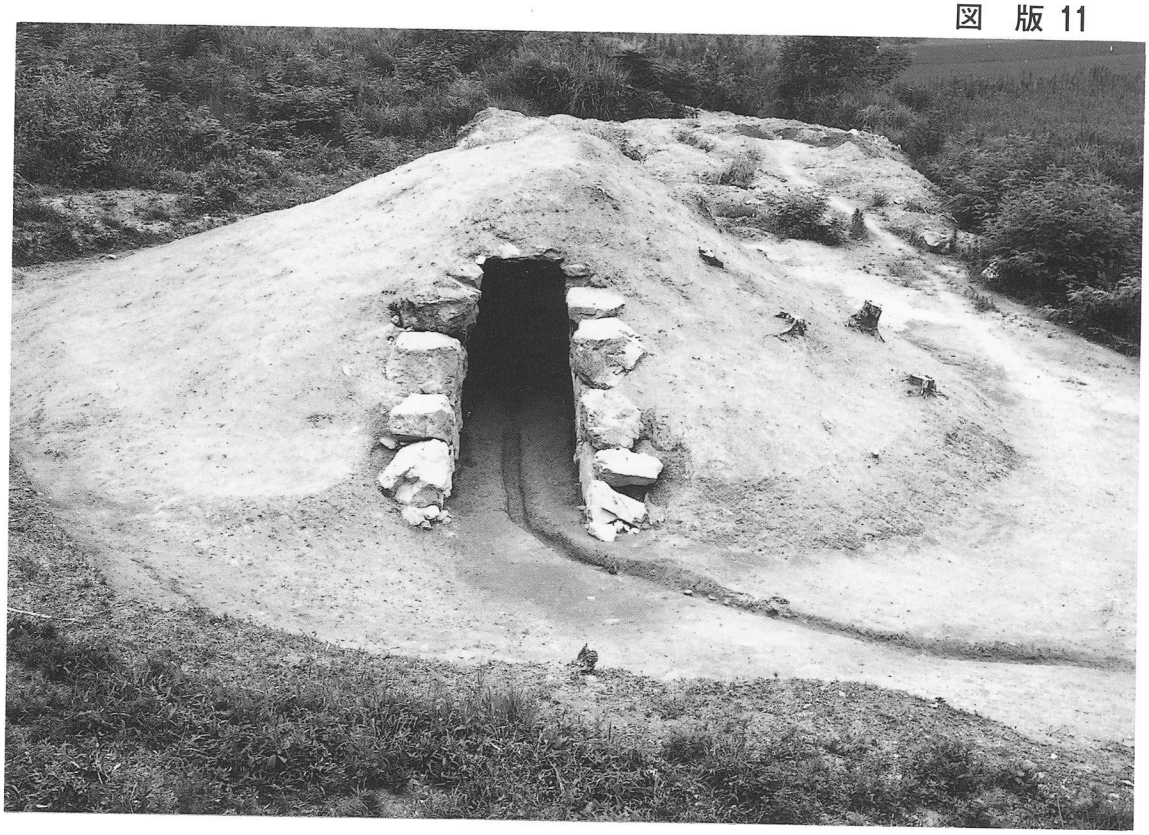


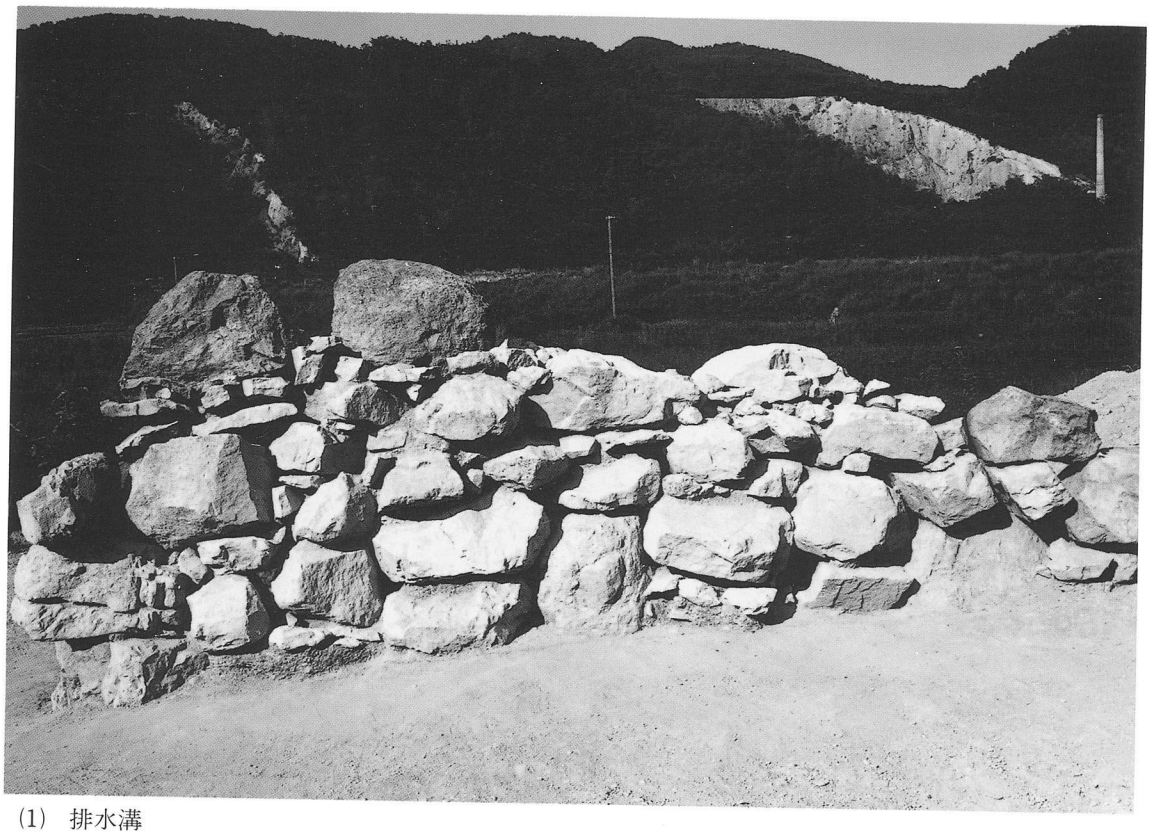


(1)　石室全景

(2)　第１次床面

中井二号墳

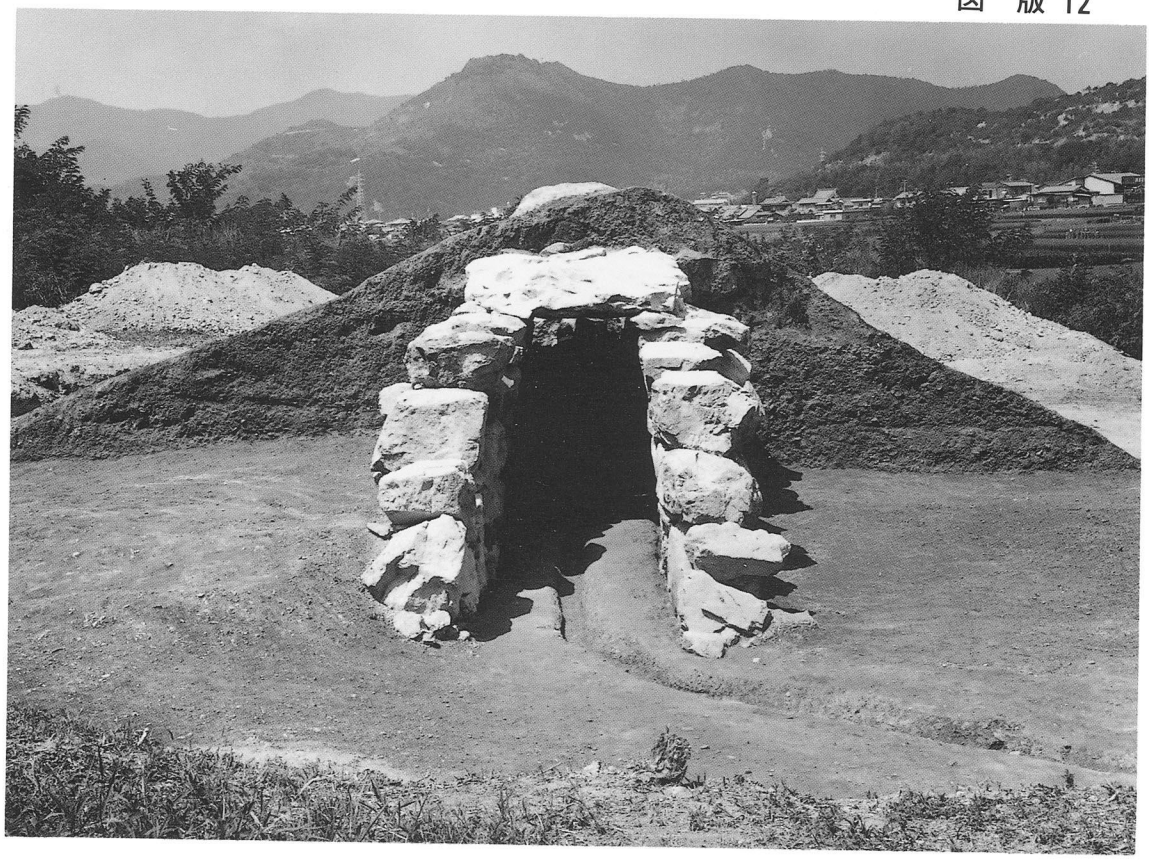




(1) 排水溝

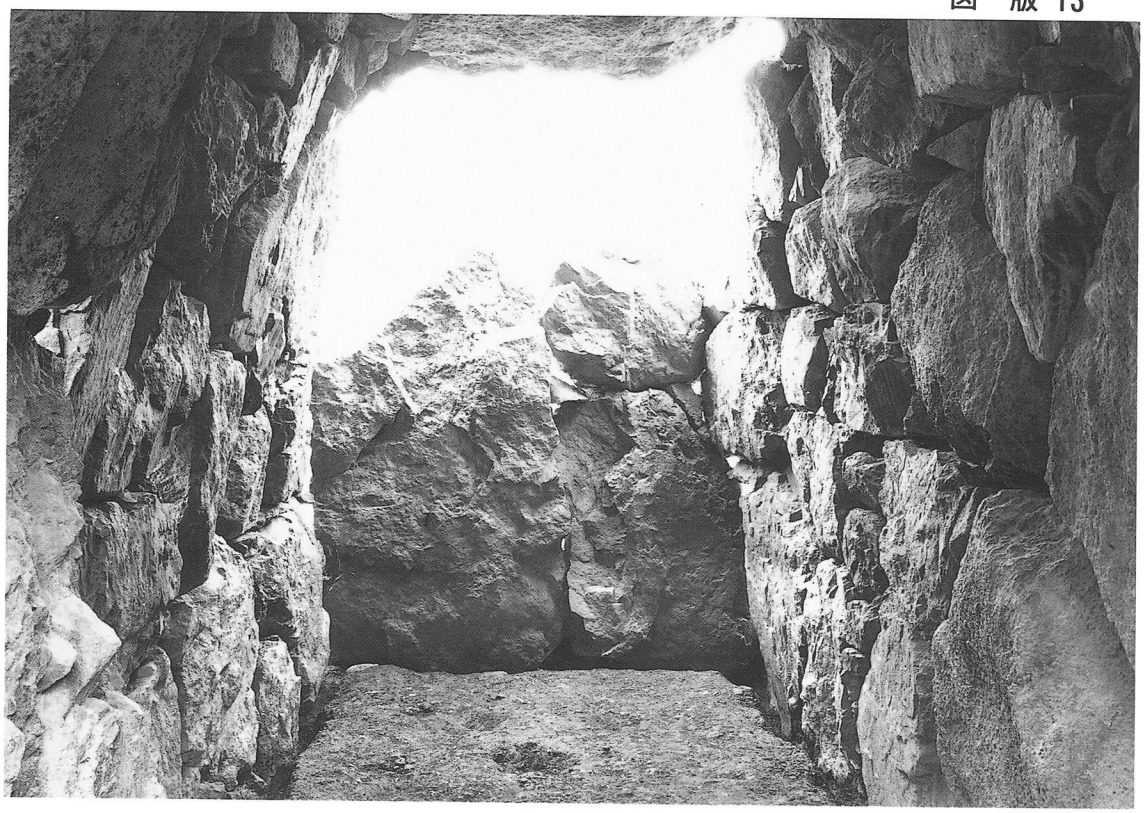
(2) 南側壁裏面状況

中井二号墳



(1) 墳丘断面

(2) 墳丘断面（奥壁側）



(1) 奥壁

(2) 奥壁裏面状況

中井二号墳

(1) 石室全景（墳丘除去後）
(2) 石室全景（天井石除去後）

(1) 基底石（羨門側より）

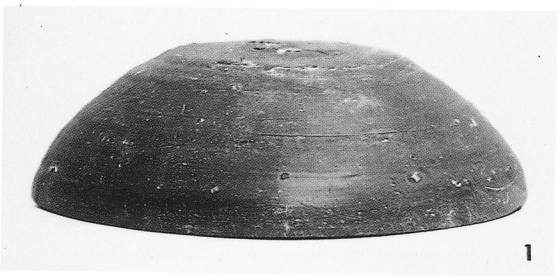
(2) 基底石（奥壁側より）

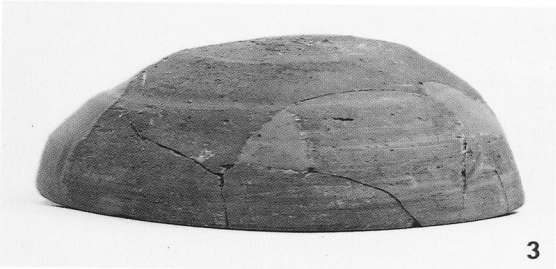
(1) 第１次床面遺物出土状況

(2) 第１次床面遺物出土状況

(1) 排水溝内遺物出土状況

(2) 排水溝内遺物出土状況


1


3

7

9

17

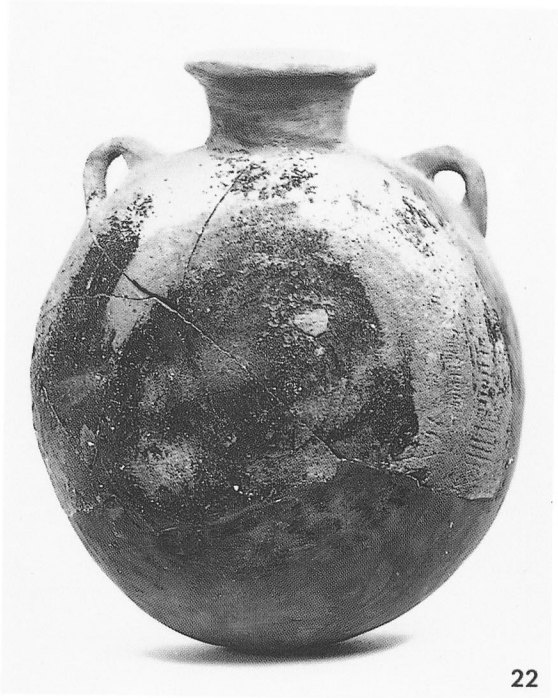
8

18

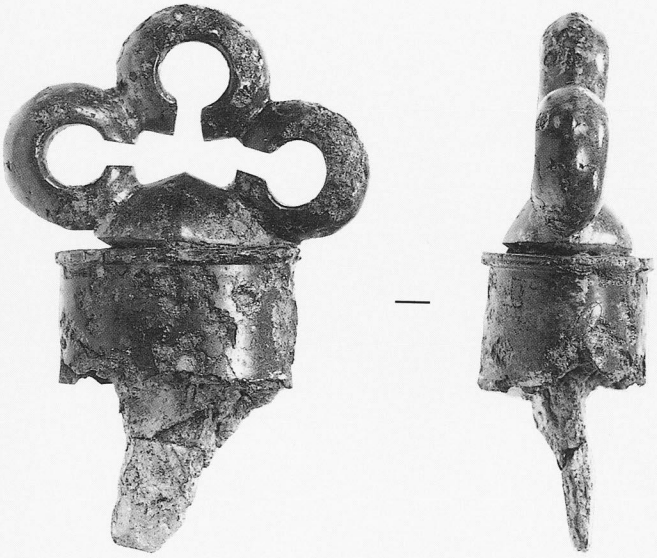
16

15

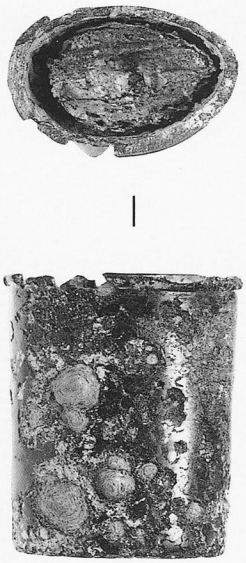
須恵器



須恵器



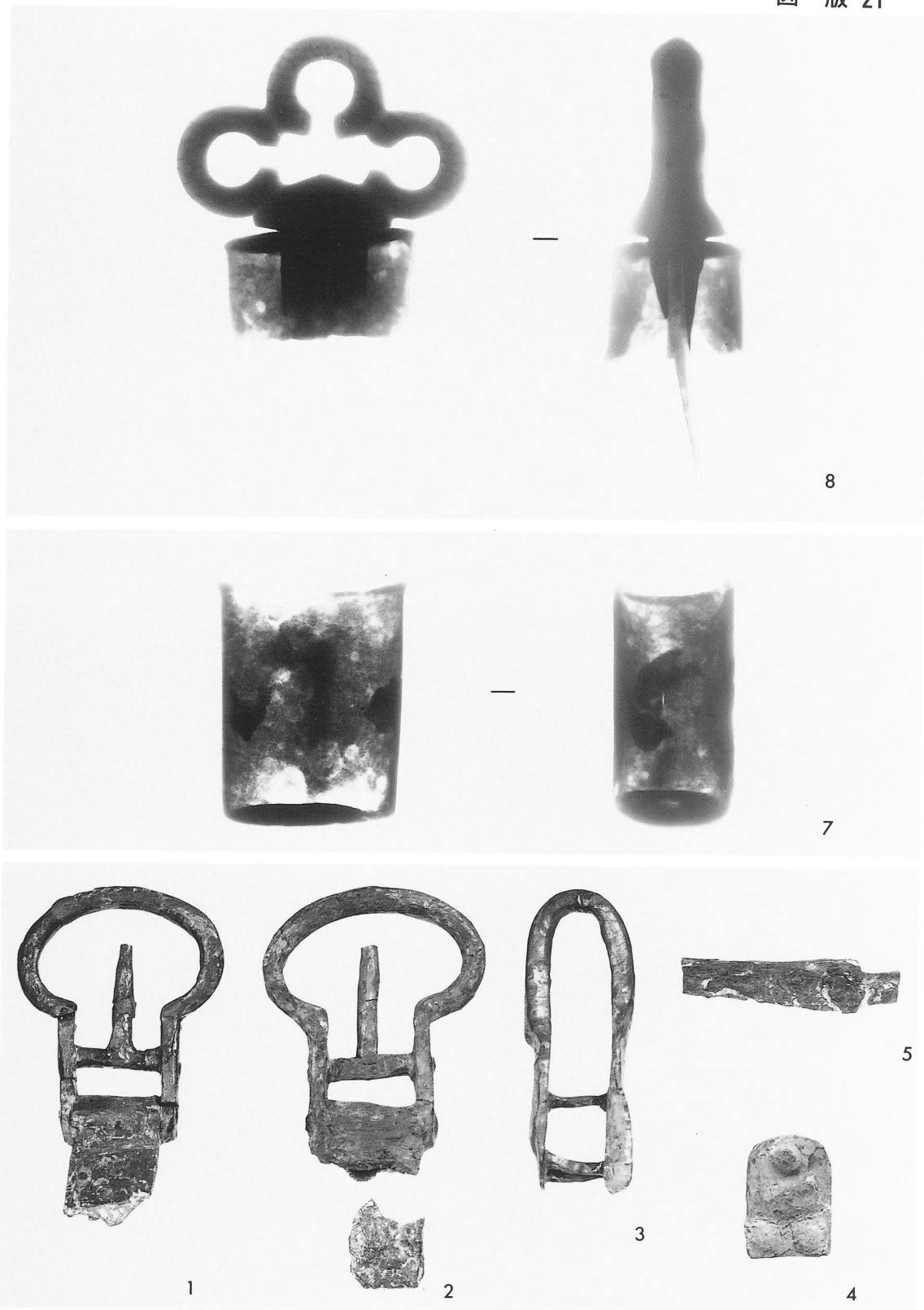
8



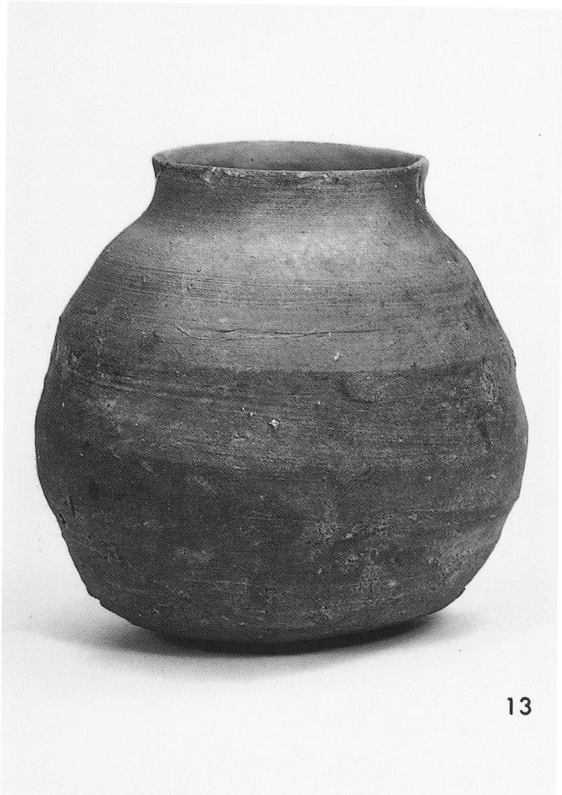
7

6

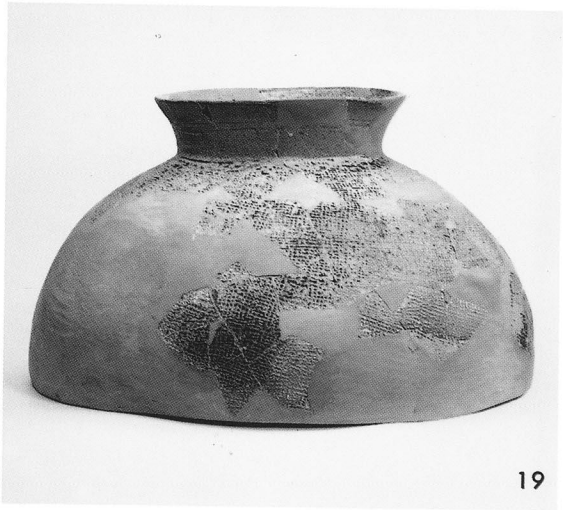
9

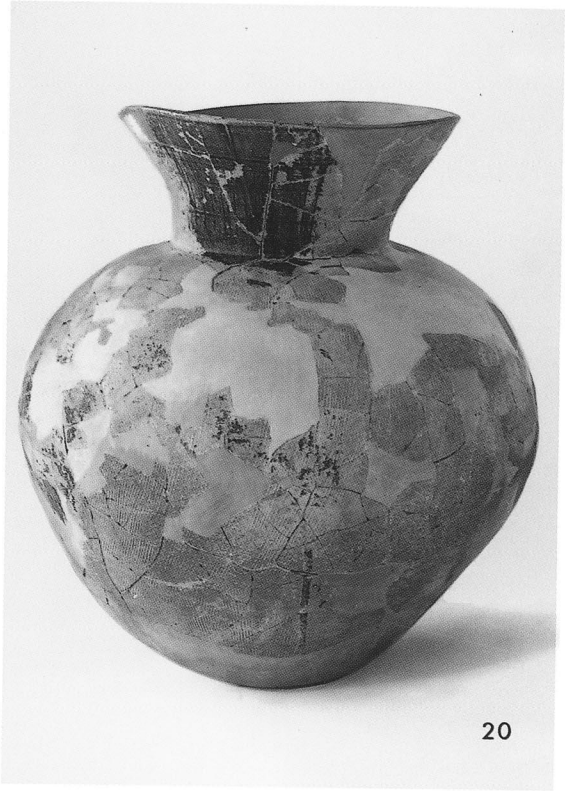


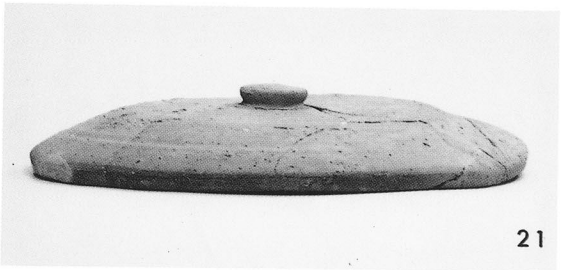
X線撮影・鉄器

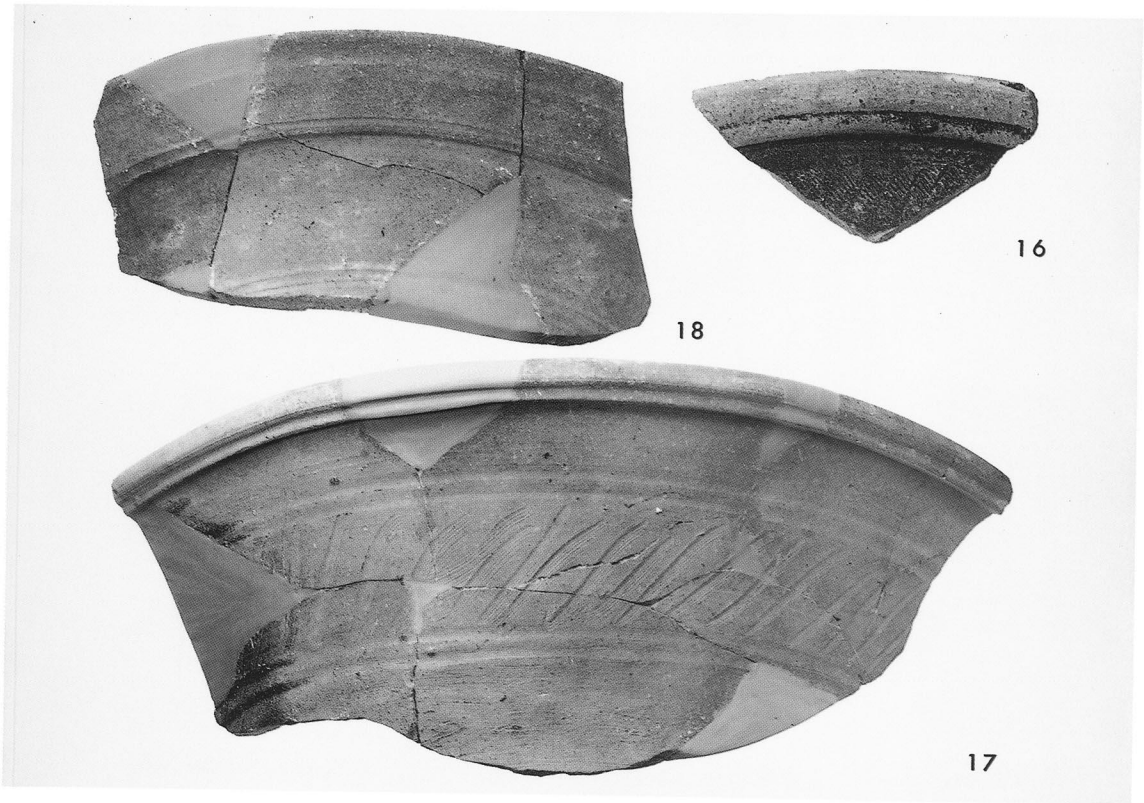


須恵器

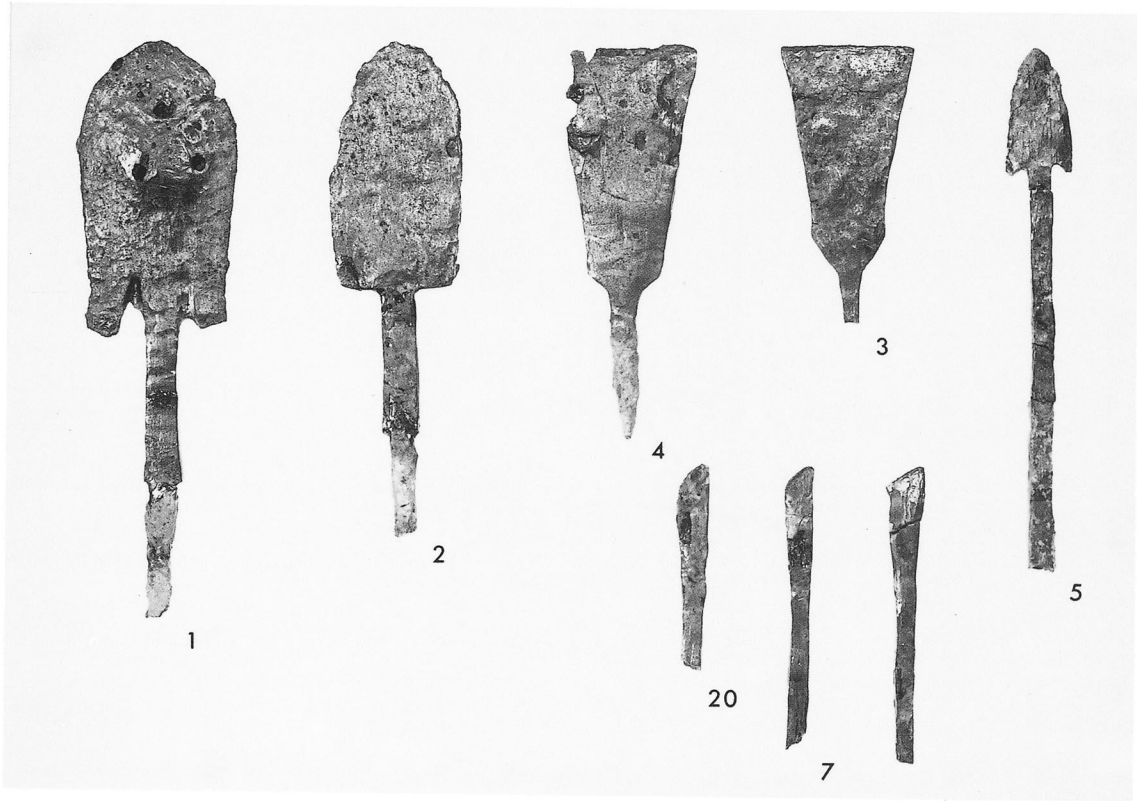


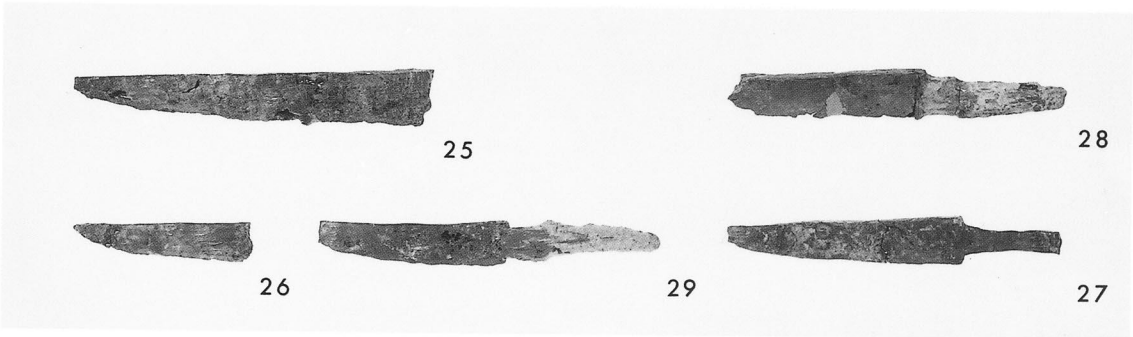




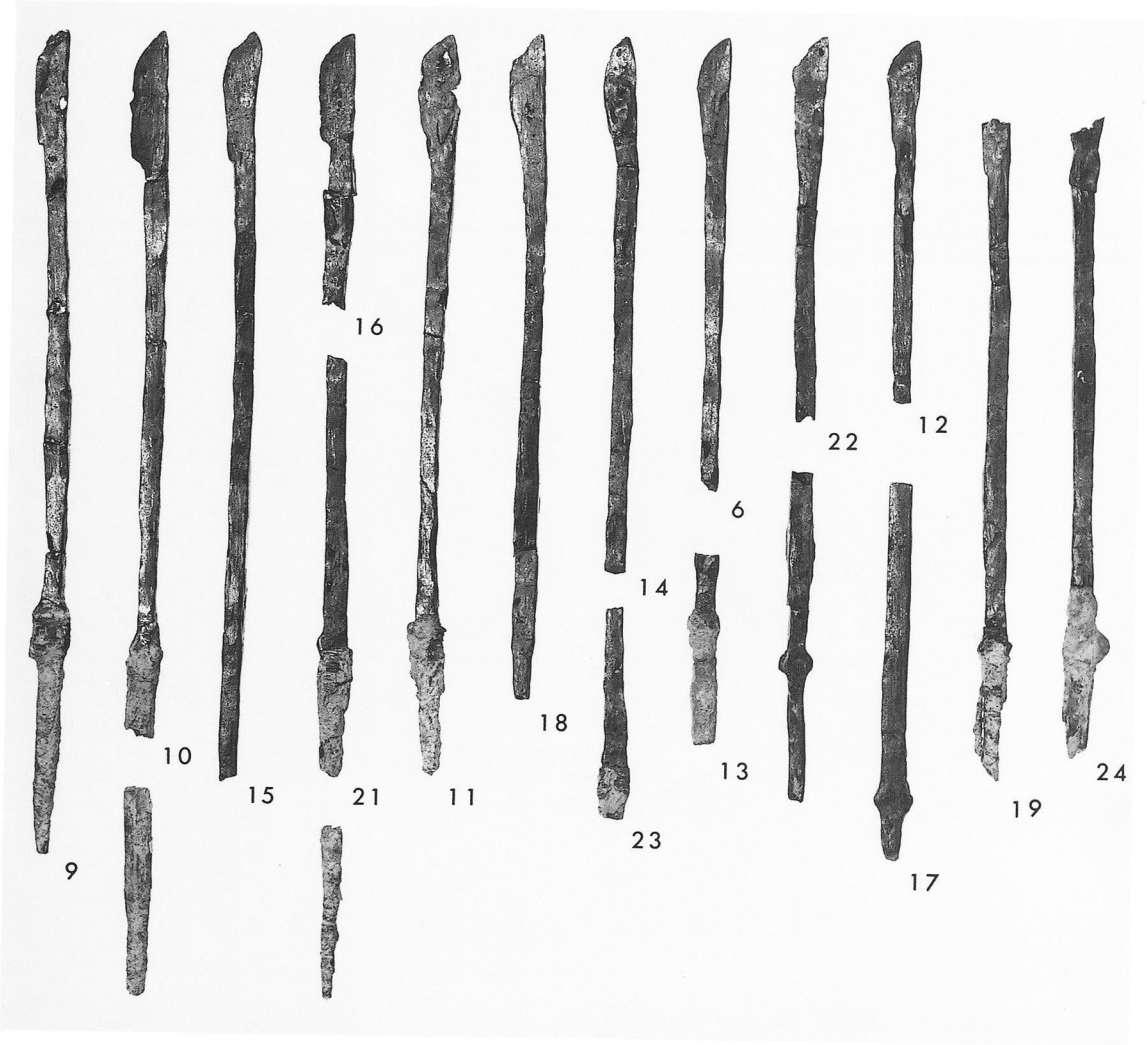


須恵器

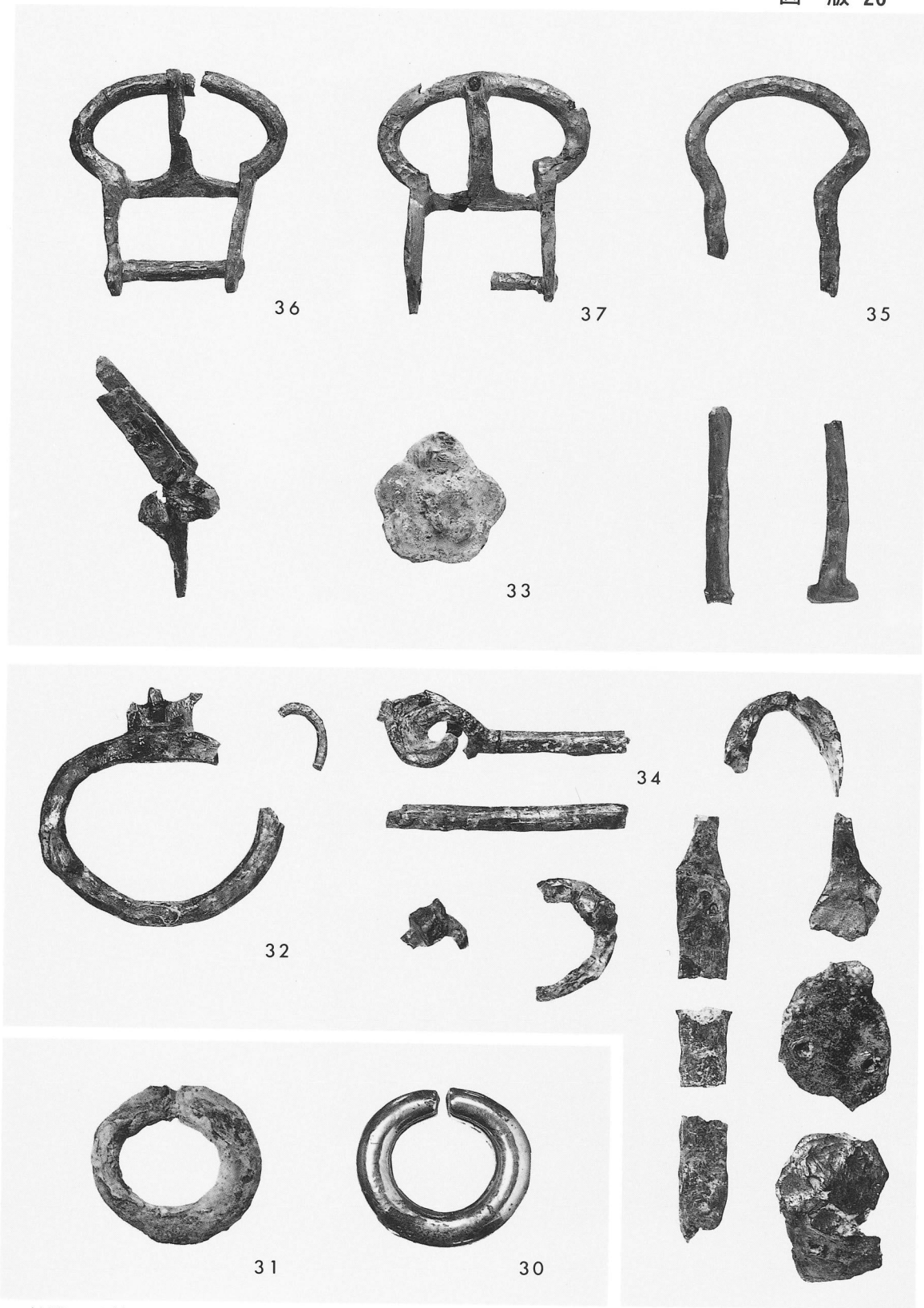




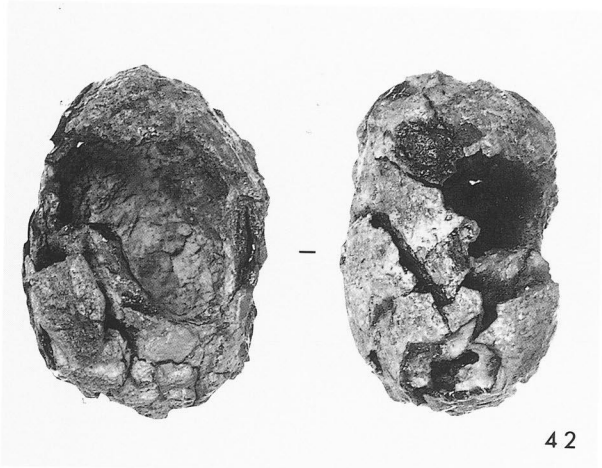
鉄器

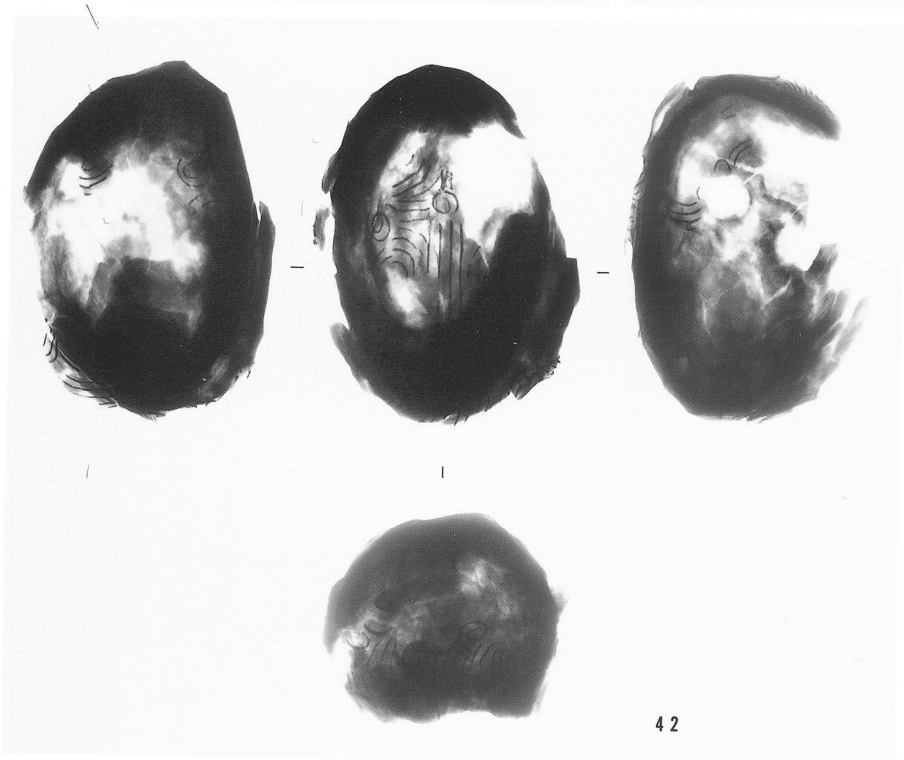


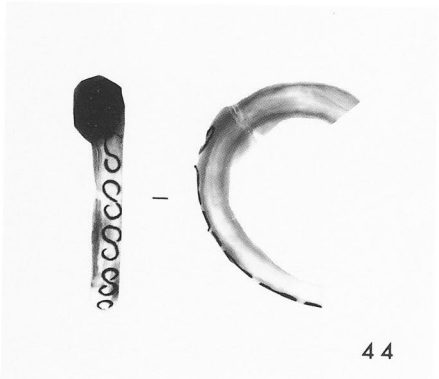
鉄器

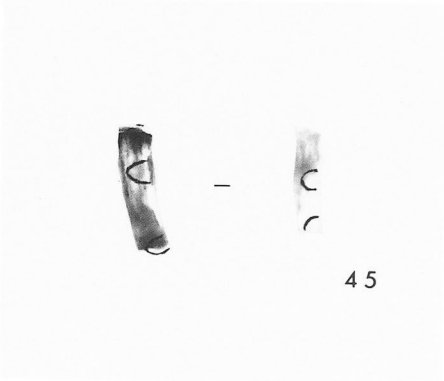


鉄器・耳環

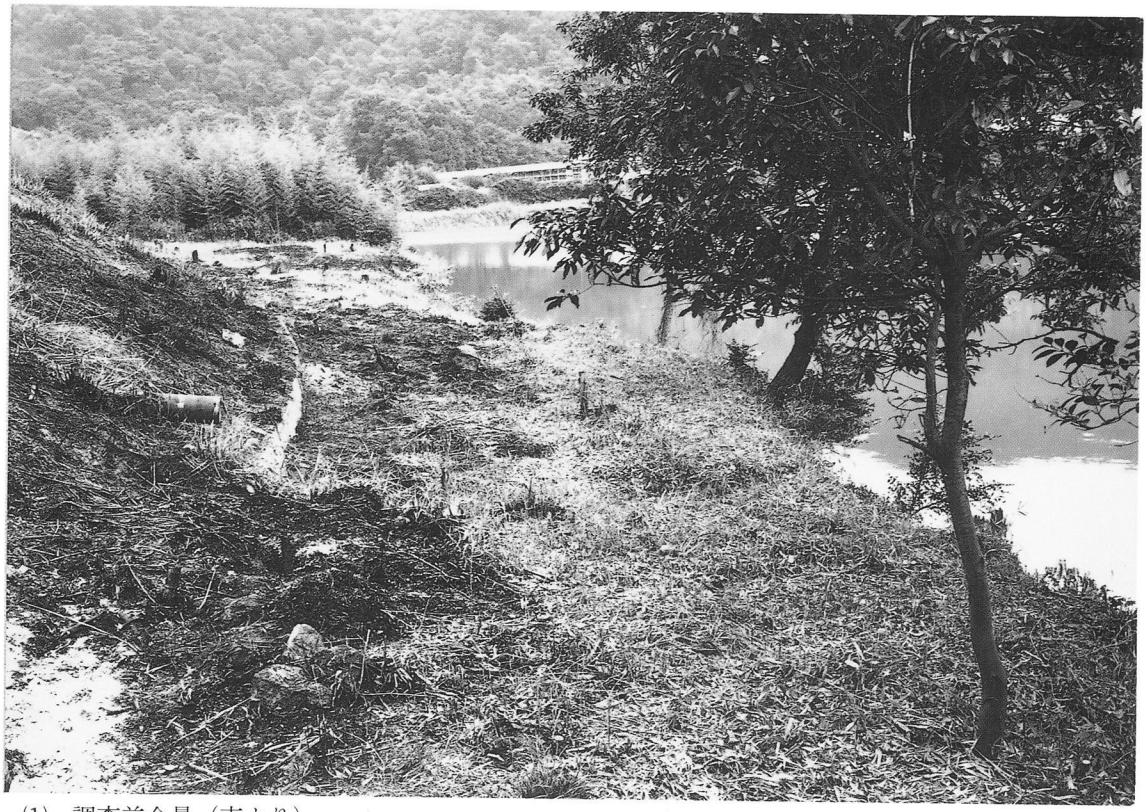








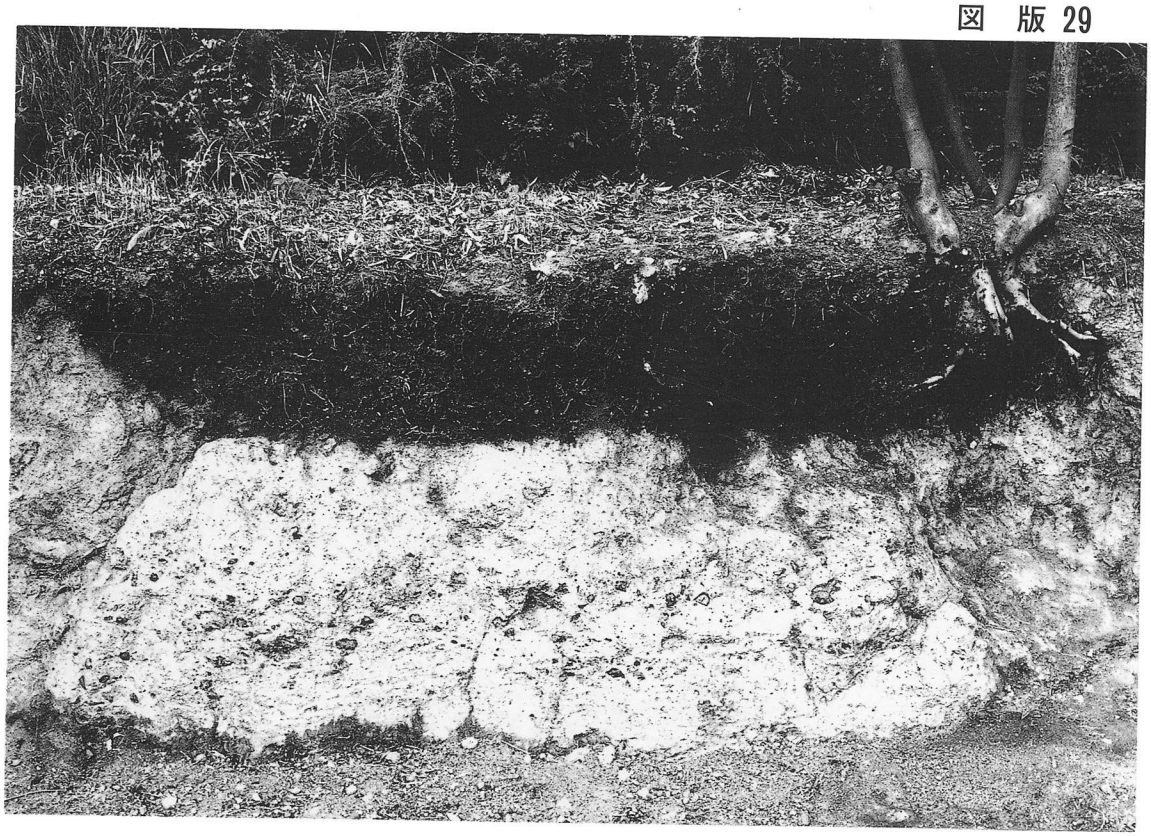
鉄器・X線撮影



(1) 調査前全景（南より）

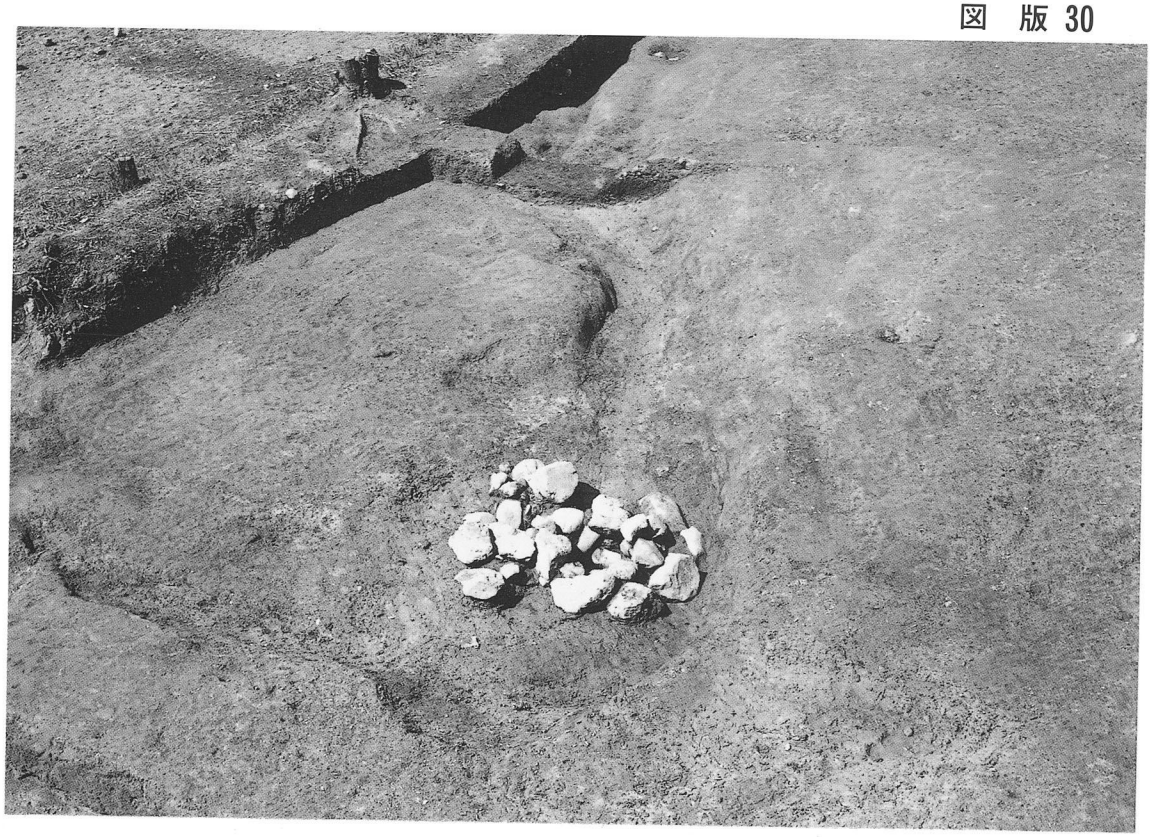
(2) 調査前全景（西より）

中井鴨池窯跡



(1) 灰原断面

(2) 灰原



(1) 井戸状遺構・溝

(2) 井戸状遺構

14

31

15

32

65

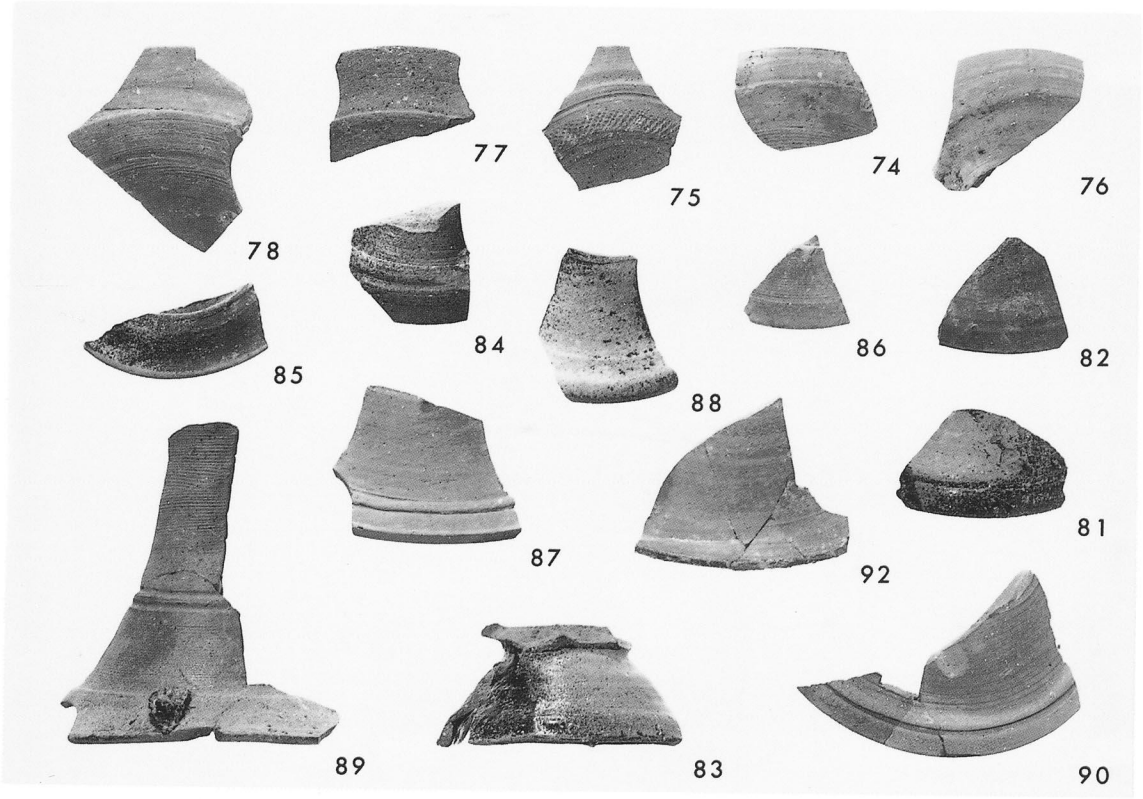
42

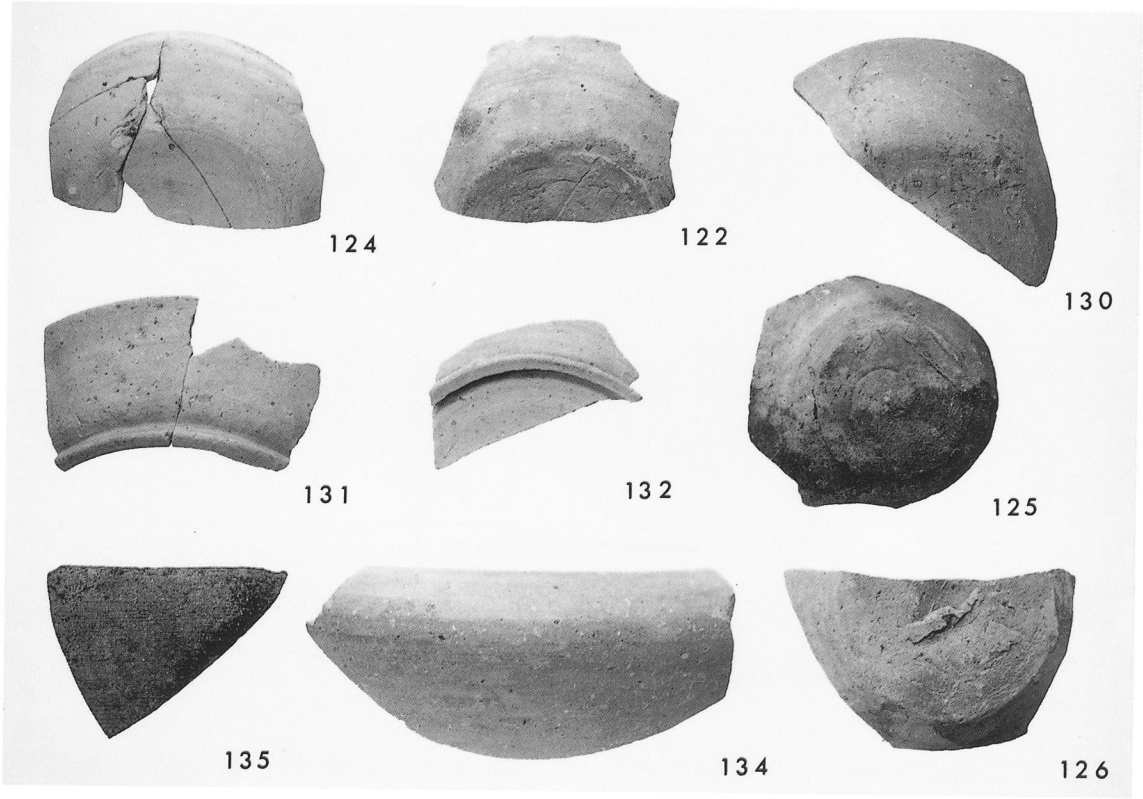
89

53

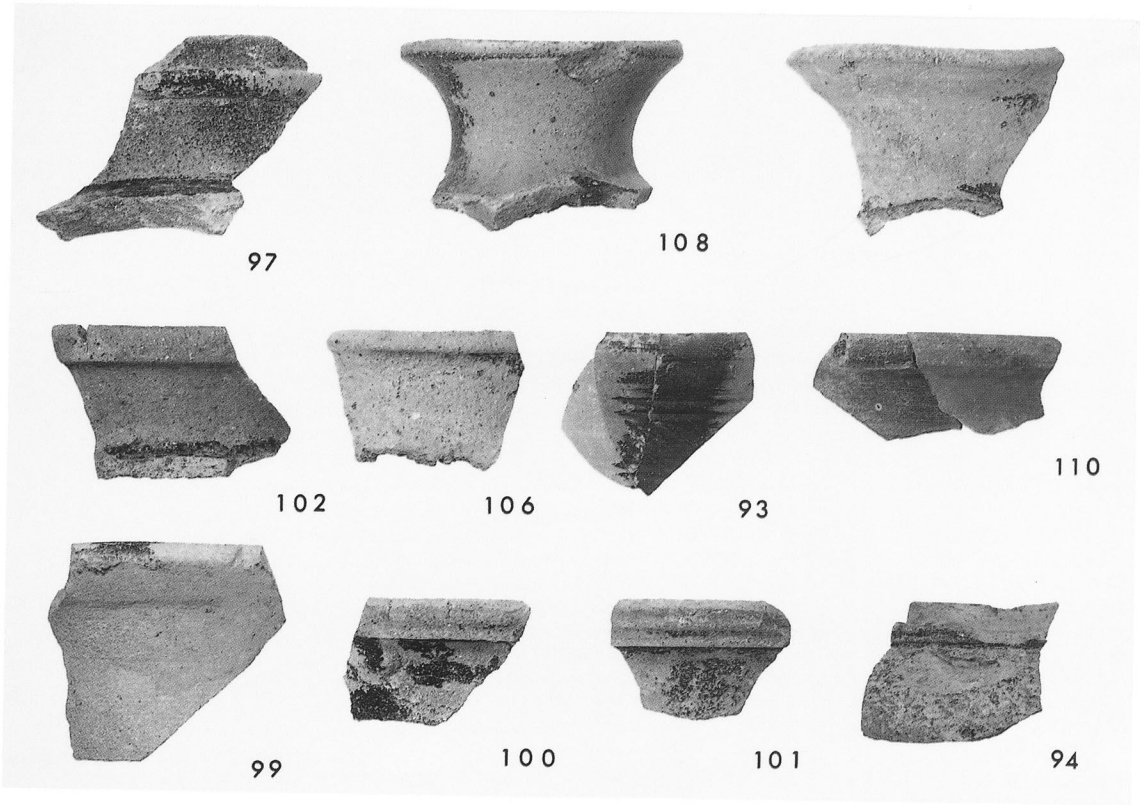
136

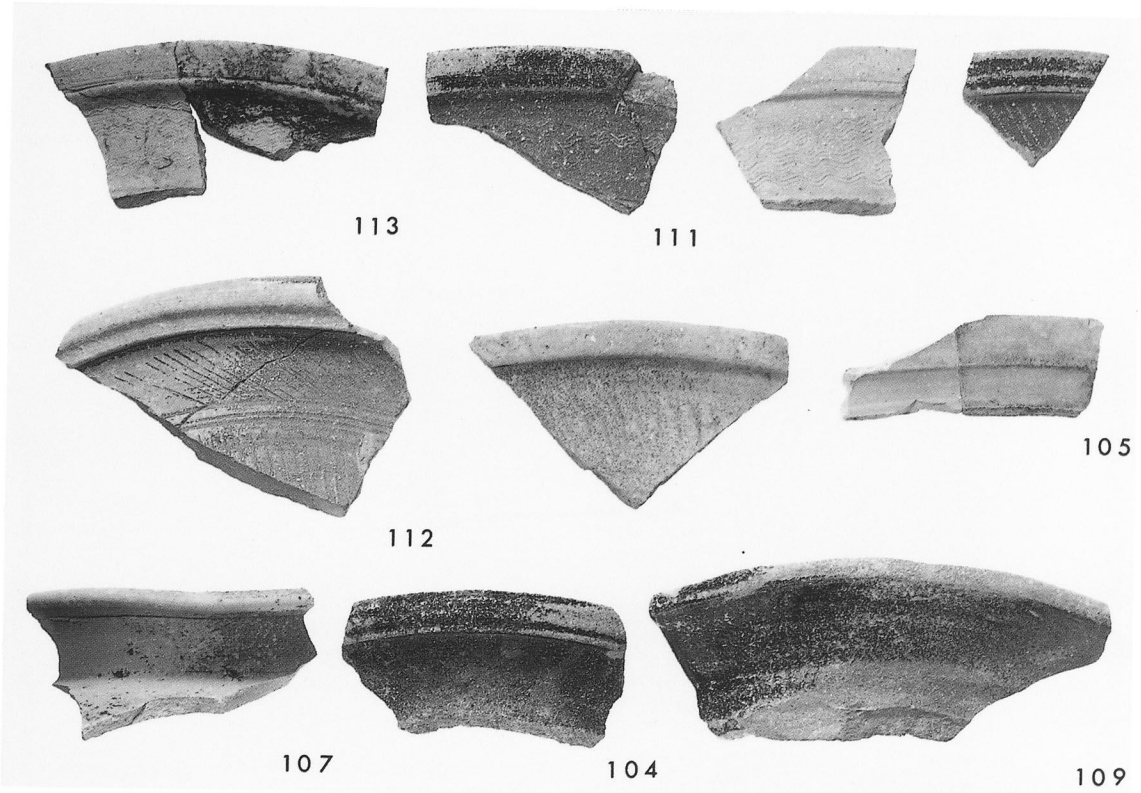
須恵器


78
77
75
74
76
85
84
88
86
82
87
92
81
89
83
90


124
122
130
131
132
125
135
134
126

須恵器





須恵器

兵庫県文化財調査報告書　第38冊

1987年2月28日　発行

中井古墳群・中井鴨池窯跡

—山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告V—

編集　兵庫県教育委員会社会教育・文化財課

発行　兵　庫　県　教　育　委　員　会

〒650 神戸市中央区下山手通5丁目10—1

TEL 078 (341) 7711

印刷　㈱関西広済堂神戸支店

〒650 神戸市中央区北長狭通6丁目3—3

TEL 078 (341) 4912